●絹傘　王侯乘輿の上にさしかける絹張り傘。

●物體　もの〳〵しきこと。

はつて、唐櫃先に舁入させゆう〳〵たる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其物體、錦祥女出迎ひ何とて早き御退出、御前は何と候ぞや、詞されば〳〵、韃靼大王叡感深く過分の御加增、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠裝束賜り大役仰付らるゝ、家の面目これに過ずと有ければ、それはお手柄目出たい〳〵、なふ家の吉事は重なるもの、日來戀しい床しいと申暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟賴度事ありとて、地門外まで來り給へどもお留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆返し母上ばかりを留置しが、猶も上の聞えを畏れ、繩をかけてあれ彼の奥の亭にて御馳走は申せども、胎内からぬ母上繩かけし御心

●優曇花の客人　優曇花は三千年に一度花咲くといふより、極めて珍重なる客人といふもに用ひたり

底、悲さよとぞ語りける、詞ムウ繩かけしとは好い了簡、上へ聞えて言譯あり、地隨分饗せいざ先我も對面せん、案内申せといふ聲の、フシ漏聞えてや妻戸の内、なふ錦祥女、甘輝殿のお歸りか爰は餘り高上り、妾それへと立出る、貌はいとど老木の松の、しめからまれし藤葛、フシ起居苦き其風情、地甘輝見る目もいたはしく、誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ其甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし、詞それ女房お手が痛むか氣を注けよ、地優曇華の客人いさゝか麁略を存せず、何事なりとも此甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置るなと、世に睦じく饗せば、老母顏色打解てヲ、賴母しい忝ない、其詞を聞からは

何しに心置べきぞ、賴入度大事密に語り申たし、是へ〳〵と小聲になり、詞なふ我々此度唐土へ渡りし事娘ゆかしい計りでなし、去年の初冬肥前の國松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹栴檀皇女小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語聞と齊しく、父は素より明朝の倍臣、我子の和藤内と申者賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を滅し、昔の御代に飜へし、姫宮を帝位に即んと先づ日本に遣し置き、親子三人此唐土へは來れども、地淺ましや草木まで皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず、和藤内が片腕の味方に賴むは甘輝殿、力を添へて下されかし偏に賴み參らする、是が拜む心ぞと

額を膝に押下けゞ〳〵、只一筋の心ざし思込ふで見えにける、地甘輝大きに驚き、詞ムウ扨は聞及ぶ日本の和藤内と申すは、此錦祥女とは兄弟鄭芝龍一官の子息候な、ム、武勇の程唐土までも隱れなく賴母しき思立ち尤も斯こそあるべけれ、我等も先祖は大明の臣下、帝亡び給ひてより恃むべき主君なく、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から望む所の御賴み、早速味方と申度が少し存する旨あれば、急にあつとも申されず篤と思案し御返事をと言せも果ず、ア、ウそりや御卑怯な詞が違ふ、是程の一大事口より出せば世間ぞや、地思案の間に漏聞えて不覺を取り悔んでも還らずお恨みとは思ふまじ、成れ成らざれお返事を、サア只今と責つくれ

ば、詞ムウ急に返答聞たくば易い事〳〵、如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なりと、いふより疾く錦祥女が胸元取て引寄せ、劍引拔て咽笛に差當る、地老母あはて飛蒐り二人が中へ割て入り、持たる手を踏放し、娘を背中に押遣〳〵、仰向に重臥し大聲上て、地是情なや何事ぞ人に物を賴れては、女房を刺殺すが唐土の習ひか、心に染まぬ無心を聞くも、女房の緣あるゆゑと心腹が立ての事か、但は狂氣か遇々始て來て見たる、母親の目の前で殺さうとする無法人、日比が思ひ遣られた、味方をせずばせぬまでよ、今迄と違ふて親のある大事の娘、これ怖い事はない、母に慥かと取付やと、地隔ての垣と身を捨て圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知

らねども母の情の難有さ、怪我遊ばすなとフシばかりにて、共に涙に咽びけり、地甘輝飛退つてチ、御不審御尤、詞全く某無法にあらず狂氣にも候はず、昨日韃靼王より某を召し、此頃日本より和藤内といふ似而非者小僕下劣の身を以て智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け大明の世に飜へさんと此土に渡る、彼が討手誰ならんと數千人の諸侯の中より、此甘輝を選出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を給はる、和藤内を我妻の兄弟と今聞迄は夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈辨慶とやらんが勇力あるとも、我又孔明が腸に分入り、樊噲項羽が骨髓をかつて、一戰に追て追捲り、和藤内が月代首提げて來

らんと廣言吐し某が、地一太刀も合せず矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖する者でなし、女に絆され緣に引かれ、腰が脫て弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられんは必定、然れば子孫末孫の耻辱遁れがたし、恩愛不便の妻を害し、女の緣にひかれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲め、詞ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の劍の先には忠孝こもる、地親の慈悲と忠孝に命を捨よ女房と、理非を飾らぬ勇士の詞、チヽ、聞譯た身に適ふた忠孝、親に貰ふた此體、孝行の爲め捨るは惜いとは思はぬと、母を押退け突と寄り、胸押明れば引寄せて、見る目危き氷の

欠

●釋迦に經　これは下文にある鬼に鐵棒の對句にてまた同意なり母の遺言は釋迦に經文を附加へたる如しとなり。庭訓〔雜註〕孔子の子伯魚、ある時庭を通りたるに、孔子伯魚に、詩と禮を學ぶべしといひしより、故事となつて父の教を庭訓といふ。

●玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず　國性爺の如き智勇の士を出し、明末の亂を救ひたる日本は、即ち玉淵龍池なりと賞美したるなり。

●ちくら者　唐土と日本の潮境をちくらが沖といふ事は既に說けりこれよりして當時、何處の者とも素性の定かならぬ人をちくら者などいひしなるべし。

おさむ道の邊に、　地出陣の門出と生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒討ば勝ち、攻れば取る末代不思議の智仁の勇士、玉有る淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず、斯る勇者の出生す、國々たり君〻たる、日本の麒麟是なるはと、異國に武德を照しけり

第四

地　唐土の便今やと松浦潟、小むつが宿の明暮は、唐の姫宮相住を、邊り隣りも浮名立て、唐と日本の汐ざかひ、フシちくら者かと疑へり、　地夫も今は國性爺と名を改め、數萬騎の大將軍と聞からに、我も心の勇みあり、

欠

●居合　居ながら刀を拔き敵と立合ふ術にて、劔道の一派なり。然るに此の技を演し、藥師どもが膏藥を賣る弘めになし、神社佛閣の境内にて、人を集めて見せしめたり。

地若衆扮裝に樣をかへ、撫付鬢の大たぶさ、翡翠の大蟬髻ふつさりと、禰宜の息子か膏藥賣か、女とよもや水淺黄の股引しめて羽織着て、朱鞘木刀眞紅の下緒、花の口紅雪の白粉、管笠深く脛高く、フシ足元輕き濱千鳥、濱邊傳ひを日參の、印松浦の住吉や、神前にこそ着にけれ、充滿御願と祈誓をかけ、手を合すると見えけるが、ひらりと拔たる居合の早業、神木の松を相手取り、木刀翳し跳上つて聲をかけ、ゑいやつたう〳〵ゑい〳〵たう、ゑいやつたうと上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅、足取る手の内四寸八寸身の開き、踏込で打入身の木刀、古木の松の片枝を、ずつぱと切て落せしは、フシ今牛若とも謂つべし、地何時の間にか

●汐干珠汐滿珠　＊

●船玉神　船の神、住吉の神の和魂を祭るといふ。

梅檀女森の蔭より走出で、詞なふ〳〵小むつ殿、毎日〳〵時を違へず變つた風俗、今日といふ今日跡と慕ふて見付しが、地誰に習ふて此兵法、器用な事やと宣へば、詞イヤ師匠はなけれど夫の打太刀、習はふより馴ての事、地唐土の便心元なく、お迎ひ舟は參らずとも、お供して渡らんと此明神へ吉凶を祈候へば、詞是見給へ、木刀にて此松の木の眞劍の如く切れたるは、神納受の印と申し、商船の便船時節も能く候と、地申上れば、それは嬉し賴母しゝ、片時も早く戻して給べと、御悅びは淺からず、詞御心安く思召せ、惣じて此住吉と申は、船路を護りの御神にて、神功皇后と申帝新羅退治の御時、汐干珠汐滿珠を以て御船を守護し、船玉神

●昔唐土の白樂天云々　【雜波土產】にもある通り、謠曲「白樂天」に日本の智惠を計れとの宣旨に任せ唐の太子の賓客白樂天が日本へ渡る事あり、これを取りしなり。

●青苔衣を帶びて云々　これも同じ謠曲にある「青苔衣を負ふて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐる」といふ句なり。さて此の句は「江談抄」にある後中書王の詩「白雲似レ帶圍二山腰一、青苔如レ衣負二巖背一、年々別恩驚二秋雁一、夜々幽聲到二曉鶴一」を少し變へて謠曲に取り、更にこゝに轉用せしなり。

●唐子髷には薩摩櫛云々　【雜註】此文句うは、べは何事もなけれ共、底意にふまへたる故事有て書出したる也、莊子に蝸牛の角のうへに國二ケ國あり、左の角の上なるを蠻の國と名づけ、右の角の上なるを蜀の國と名づく、此左右の國互ひに爭ふて戰ふといへり……此語の心をふまへて、中昔の毎句付の笠にかしらの上に國二ケ國といふ題ありしを、加賀笠の下にさしたる薩摩櫛といふ句を附けて勝句となし、世上の人の語り草となる、此の道行の出の文句又是をやつしたる也、唐子髷には和國の薩摩櫛和國の島田にはもろこしの唐櫛とやまともろこし打まぜてといひかけて、栴檀女と小むつと打まじりての旅立をことわる也。

●枕をたゝむ夢たゝむ　【雜註】船中などに用ゆる懷中のたゝみ枕より、邯鄲の枕をふまへて夢たゝむといひ、飛張房が縮地の杖の意をふまへて千里をむれにたゝみこむといふ、殊に二人が渡海のはるけさ、千里あなたへ着く意を胸にたゝみたくはふる情によせていふ。

●二葉に見せて栴檀女　栴檀は二葉にて香しといふ諺に取る。

●大村　肥前の城市。

●鐘宮　肥前國松浦郡にあり。

●二十五筋の琴　二十五絃琴は即ち瑟なりふにや、或は今十三絃の

とも申なり、　地　昔唐土の白樂天といひし人、日本の智慧を圖らんと、此秋津洲に渡り給ひ、　地　目前の景色を取敢ず、青苔衣を帶て巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐると、詠じ給へば大明神卑しき釣の翁と現じ、一首の歌の御答へ、苔衣着たる巖はさもなくて、きぬ〳〵山の帶をするかなと、詠じ給ひし御歌に、ぎつと詰つて樂天は、フシ爰より本土に歸るとかや、　地　國を守りの御神の、其御歌は苔衣、我身に受て旅衣、いざとて二人打連れて、船路遙けく　三重　なりふりや

栴檀女道行

唐子髷には、薩摩櫛　フシ　島田髷には唐櫛と、大和唐土

打交て、さしも習はぬ旅立や、船と陸とを行道は、笠捨られず懷中に、枕をたゝむ夢たゝむ、千里を胸にたゝみこむ、女心の强弓も、男ゆゑにぞ　フシ　引れゆく、我は故郷を出る旅、君は故郷へ戻る旅、　チクリ　二葉に〳〵見せて栴檀女、小むつが諫め力にて、　地　大明國へと思立ち　チクリ　〳〵心の內こそはるかなれ、フシ親と妻とを、持し身は、何か歎きは有明の、　チクリ　月さへ同じ月なれど、なふ二人見馴し　フシ　閨の中、名殘數々大村の、　地　浦の濱風一村雨はさら〳〵と霽ても晴れぬ我涙、袖に包みて袂に拭ふ、鏡の宮に影とめて、泣ぬと人や見るめの浦、振さけ見れば久方の、日も行末の空遠く、歸るさ何時ぞ天津雁、誘へや誘へ我夫も、二十五筋の

琴の絲、結び契りし年の數、いざすがかきて箱崎の、松とし聞かば我も急がん、磯邊傳ひに寄藻搔く、海士の子供の打群て、彈き石投子又丁か半、三つ四つ五つ算へては、フシ幼遊びも睦じく、七瀨の淀に行水も、昔の影や隱ん坊、鬼の來ぬ間と謠ひしも、濡て乾かぬ旅衣、唐土船を松浦川、港もちかの浦風に、其方の方を見給へば、磯に手操の厨川、波に搖るゝ釣舟に　地鬢づら結ふたる童子一人、網は下さで釣竿の、フシいとゆう〳〵と眠來る、詞なう〳〵お兒、我々は唐土へ渡る者、好からん方まで乘て給べとぞ仰せける、アラ何共なや、一人は唐人一人は筑紫人、女性の身にて唐土へ渡るとは戀しき人のあるやらん、地二千里の外古人の

爭の琴も、昔は二十五絃なりしともありしと。

●箱崎の松　筑前那珂郡、箱崎八幡宮の前にある松原。即ち千代の松原なり。

●彈き　女兒の遊戯にて今謂ふ、蠅蝶彈きのこと。

●石投子　これも女兒の遊戯にて東京にてお手玉といふものに同じ

●七瀨の淀　松浦川の瀨淀なりと。古歌に「松浦川七瀨の淀はよどむ共、我はよどまず君をしまたん」。但し「昔の影や隱んぼ、鬼の來ぬ間云々」の事は當時の小唄などにあるともなるべし。松浦川は城市の傍を流る川なり。

●ちか、厨川　ちかの島とて上松浦郡にあり。厨川は詳ならず。

●鬢づら　みづらの音便、角髮は上古の男の髮の風にて項髮を左右へ分けて結ひたるもの。

●二千里の外故人の心、三五夜中にあらねども　「和漢朗詠集」に出たる「三五夜中新月色、二千里外故人心」を取りしなり。此の詩は白樂天が宮中に宿直しながら、八月十五日の月を見て、遠方にある詩の友元稹が身の上を懷ひ、彼れも今宵はヤハリ今花の名月を弄びたるならんとの意。それを今栴檀女が唐土へ渡る心の中に比し、併しこれは樂天が所謂十五夜にはあらずとなり。

心、三五夜中にあらねども、影を漏さぬ月の船、疾々召され候へとはや差寄する水馴棹、不思議の緣と打乘て、焦れ行衞も白波に　フシ凪て長閑き海の面、地續きて見ゆる八十島を、異國の人の家產に、敎てたばせ給へとよ、地童子舳板に立上り、海原遙に指さして、いかに旅人聞給へ、先彼に續くは鬼界十二の島、五島七島中にもあの白き鳥の、多く群れ居るは白石が島、此方に煙の立登るは硫黃が島、さて又南に高く、霞かゝるはちどの島なり、彼は古天照神の、住吉の明神に笛吹かせ舞曲を奏し二神の、遊び給ひし所とて、二神島とは申すなり、フシなう唐土人とぞ語らるゝ、語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ、それより先の島々の、

●海原　海上の平にしてさながら野原の如ければしかいふ。

●鬼界　薩摩の硫黃が島のこと。此の島の近傍に十二の小島列れりと。

●あれは古へ天照神の云々　「これは天照太神の天の岩戸隱れの時、住吉の神をはじめ八百萬神の神樂を奏し、踊舞をなし給ひし事ないふなるべし。

●天の鳥船岩船　「神代記」に見えたり、船は鳥の形したるより鳥船の名あり。岩船は巖丈なることを稱へたる稱。

●秋風に鱸釣る松江の港　松江は鱸魚を產し有名なり。「秋風に鱸釣る」の句は、「世の中は唯秋風に鱸つる、浦のとまやぞ住みよかりける」といふ古歌に取れり。〔闕註〕

●大かい童子　大海童子にて住吉の神のことをいふなるべし。

島かと見れば雲の峯、山かと見れば空の海、風はなけれど蜑小舟、天の鳥舟岩船の、フシ空走り行く如くにて、山なき西に山見ゆる、月に先立ち日につれて、日の本出し秋風の、立もかはらず其儘の、未だ秋風に鱸釣る、

フシ松江の港に着にけり、人々船より上り給ひ、誠にお兒の御情、坐したる樣なる船の中、かゝる波濤を時の間に、渡し給へる御方は、如何なる人にて有やらん、

詞人がましやな名もなきもの、我日の本に昔より、住馴れたれば住吉の、地大かい童子と申者、暇申して此童は、詞住吉に立歸り歸朝を待申さんと、夕波の汀なる　チクリ蜑の小舟を漕戻し、追風に任せつゝ、沖の方に出にけりや、沖の方へぞ　三重

●陶朱公　范蠡がこと。會稽山のこと前に說けり。

●鑾輿屬車　天子の乘輿には鑾鈴を備ふ、故に鑾輿といふ。屬車はこれにつゞく車。

九仙山

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ、會稽山に籠り居て、種々の智略をめぐらし、遂に吳王を滅して、勾踐の本意を達すとかや、昔を問へば遠き世の、例しも吳三桂が、今身の上に白雲の、フシ山より山に身を隱し、地太子を育て奉る、移れば變る苔莚、宮前の楊柳寺前の花、長地峰の古木に立かはり、夕の霧の間には、我身を以て褥とし、詞鑾輿屬車の手車も、フシ蔦の錦に織かへて、朝の露のほとりには、谷の猿の肩に駕し、早二歳は昨日今日、暮るも山明るも山、我名も君が顏も、人目を包む雲水に、虹の架橋途絕して、深山鳥やぬゑこ鳥、

●崔嵬　土山の石を戴く貌、又石山の土を戴くともいふ。

●手談　圍碁は對坐して言なく、手を以て碁につく、故に手談といふと「書言故事」に見えたり。

●中間禪　欲界四禪天中大梵天のこと。中間とは初禪には尋有り伺有り、二禪には尋無く伺無し、大梵天は尋無く伺有り、故に中間禪といふ。即ち中間禪とは、離欲又淨行或は高淨の義。

●琴詩酒の三つの友　白居易が北窓三友の詩にいふ、「三友者爲レ誰、琴

梢に來鳴く鸚鵡さへ、昔をまねぶ聲はなし、水遠くして　フシ山長く、根笹茅原槇檜原、峨々と聳へし崔嵬の山路に疲れ行末は、名にのみ聞し江寧府の、九仙山に攀登り、暫し佇む松風も、馴てや友と住馴れし、地蓬眉白髮の老翁二人、石上に碁盤を据え、黑白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目連々たる雁行、傍目もふらぬ碁の勝負、地心は蜘蛛の、空に繫れる絲に似て、身は空蟬の枯枝となり、浮世を離れし手段の技、中間禪のかうたいかと、太子を石段に移し參らせ、枯木の株に頤持せ、見惚る我も諸共に、フシ餘念の塵をや拂ふらむ、地吳三桂輿に乘じ、詞なふ〳〵老人に物申さん、市中を離れし座隱の遊び面白し去ながら、琴

琴罷輙擧レ酒、酒罷輙吟レ詩、三友遞相引、循環無己時、一彈悠二中心一、一詠暢二四肢一、猶恐二中有レ聞、以レ酔彌二縫之一。

詩酒の三つの友を離れ、碁を打て勝負を爭ひ給ふ事、別に樂む所ばし候か、翁差して應なく、碁盤を見ればに碁盤にて碁石と見る目は碁石なり、地大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり、心上の須彌山是にあり、大明一國の山河草木、今爰より見るになどか曇らん、一角に九十目、四方に四季の九十目、合せて三百六十目、一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ、詞面白し〳〵、天地一體の樂に二人對ふは何事ぞ、詞陰陽二つあらざれば萬物調ふ事もなし、勝負はさて如何に、詞人間の吉凶は時の運にあらずや、さて白黑は、夜晝、手段は如何に、軍の法、切て押へて跳かけて、軍は花の亂れ碁や、フシ飛かふ鴉、群居る鷺と假へ

●斧の柄も自からとや朽ぬべし　此の事は晋の王質といふ者、或時薪を切りに山へ入りしに、仙人碁圍をみて居たり、よりて斧の柄を支へて見、やがて薪を切らんと斧を取れば其の柄朽ちぬたり、不思議に思ひ家に帰りて聞けば、王質より七世の孫の時なりしといふ神仙談を、此の九仙山に取組みしなり。國性爺が韃靼と戦ひて、明の國土を回復するとも、一場の夢物語の如く、仙家の景中に納めたるは、省畧の筆として頗る妙あり。

●柳櫻をこきまぜて　※

しも、白き黒きに夜晝も別て昔の斧の柄も、自からとや朽ぬべし、　地　翁重ねてのたまはく、　詞　今日本より國性爺といふ勇將渡つて、大明の味方となり、只今軍眞最中、　地　是より其間遙なれども、一心の碁情眼力にあり〳〵と、合戰の有様目前に見すべしと、のたまふ聲も山風も、フシ　碁石の音にぞ響きける、　地　吳三桂はつと心付き、實に〳〵爰は九仙山、此九仙山と申すは四百餘州を瞰の下に、峰も幽かにおぼろ〳〵と、雲かと見れば一霞、麓に落る春風の、風のまに〳〵吹霽す、空は彌生の中旬なる、平家柳櫻をこきまぜて、錦に包む城廓の、あり〳〵とこそ見えにけれ、何國の誰が籠りしぞ、門高く堀深く、砦々に搔楯築き、要害嶮岨を帶たりし、こう〳〵たる高櫓、揚る雲雀や歸る鴈、花と見つゝも色々の、旗に翼や休むらむ、長閑に照す朝日影月影打て付たるは、日の本の美名を顯はし、　詞　延平王國性爺が乘取たる石頭城、いはねどそれと白眞弓、鐵砲高麗矛、鎗長刀大旗小旗靡き合ひ、吹拔のぼり馬標翻飜と飜へり、天も五色に染なせば、藤も躑躅も山吹も、　チクリ　共に〳〵映らふ、色見えて春の日數は盤上の、石の數とぞ積りける、フシ　若葉が末の深綠、晴行く雲の絶間より、是南京の雲門關と、名乘て出る杜鵑、フシ　幔幕高き卯の花垣、今年も夏の中ばなり、　詞　方三十里に逆茂木引き、關の大將左龍虎右龍虎三千餘騎、兜の星を輝かし、太鼓を打て亂調子、　地　鳥の空音はかるとも

●鳥の空音はかるとも　これは「百人一首」にも出たる、清少納言の「夜をこめて鳥の空音はかる

とも、よに逢坂の關はゆるさし」。といふ歌を取りしにて、此の歌は孟嘗君が、鷄を鳴して函谷關を通りしといふ故事を詠じたるを誰も知る所なり。

●驪山　唐の玄宗皇帝の別業にて華淸宮といふ御殿のありし所。

●楊貴妃の御廟大眞殿　玄宗帝安祿山の亂を避けて楊貴妃と共に蜀に遁る、其途中馬嵬といふ所にて、かれて楊貴妃を惡める軍兵共、遂に貴妃を殺しければ、其の後玄宗悲み慕ひ、方士をして貴妃が魂の所在を尋れ求めしめ、蓬萊山にいたり、大眞殿といふ額。を打ちし所へゆき、楊貴妃に逢ひたりといふ話を取りしなり。

●それつら〳〵おもんみれば　以下の文、勸進帳の文句をもぢりて作りたり。

も、ゆるす方なき勢ひに、劍は夏野の薄を亂し、火繩は澤の螢火と、要害嚴しき關の戸は、鳥も通はぬばかりなり、日本育ちの國性爺、例へば此關鐵石にて堅めたりとも、押破て通らん事、童が障子一重破るよりも、安けれども、軍中の目覺しに、我本國文治の昔武藏坊辨慶が、安宅の關守欺きし、例しを引や梓弓、フシ軍兵に目配せし、そも〳〵是は、驪山の麓楊貴妃の御廟所、大眞殿再興勸進の大行者、勸進帳を聽聞し、勸めに入れや關守と、軍勢の着到一卷取出し、味方の祈禱敵調伏と觀念し、高らかにこそ讀上けれ、それつら〳〵おもんみれば、韃靼逆徒の秋の月は、無殘の雲に隱れ、生死不定の永き夢、驚かすべき勢もなし、爰に往昔、

●褒似　周の幽王の妃。

●關吹きこゆる秋の風　〔關註〕中納言行平の歌として「旅人の秋すゞしくなりにけり、關吹きこゆる須磨の秋風」。

●飛んで火に入る夏の蟲　＊

●樊會流は珍らしからず　こゝの文句、當時一口淨るりに流行せしにや、或は作者の自讃にや、「天網島」のなまいだ坊主の所にも、これを引けり。

帝おはします御名をば、玄宗皇帝と名付奉り、寵愛の玉妃に別れ慕戀やみがたく、涕泣眼にあらく、涙玉を貫く思ひをせんろに飜して大眞殿を建立す、箇程の靈場の、絶なん事を悲しみて、隣鄕の褒似が末葉諸國を勸進す、一戰合戰の輩は、敵方にては首を矛に貫かれ、味方にては、合戰勝利の勝鬨揚げん、歸命稽首敬て申すと、フシ天も響けと讀上たり、地關の大將右龍虎左龍虎すは國性爺、飛で火に入る夏の蟲、梢に蟬の喚いて蒐ればにつこと笑ひ、樊會流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて、貫の木逆茂木押破り、向ふ者をたゝき伏せ、逃るを摑んで人礫、左龍虎右龍虎討取て、フシ難なく過る月日の關や、碁盤の上

●俱梨伽羅落し　木曾義仲が北國にて平家の軍を破りし古跡。

●坂落し　これは源義經が、一の谷の坂落しをいふ。

もせき吹越ゆる秋の風、霧霽わたる山城は、韃靼の軍將海利王が楯籠り前は巖壁後は海、要害頼みの油斷を見て、秋の夜討の國性爺乘たる駒の轡蟲、月松蟲の聲澄渡り、しん〳〵りん〳〵りんしつ〳〵〳〵と、堀際近く攻寄て、百千の高提灯一度にぱつと立たるは、千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵寢耳に水の、あはて騷いで甲を臑當鎧は逆さ、馬を背中に、ヲ、〳〵〳〵〳〵大手の門を押開き、切て出れば寄手の勢、貝鉦鳴し鯨波の聲、大將團扇追取つて、ひらり〳〵ひらり〳〵ひらり閃かし、地日本流の軍の下知、攻付挫ぐは義經流、緩めて討は楠流、俱梨迦羅落し阪落し、八島の浦の浦波も、爰に寄手の威勢強く、揉立

●楚人の一炬　杜牧之の「阿房宮の賦」に曰く「楚人一炬可ㇾ憐焦土」とあるに據る。咸陽宮は秦の始皇の御殿にして、楚項羽が一戰に打敗け、楚人の爲めん燒き盡されたるをいふ。

●偽りの無き世なりけり神無月　「續後拾遺集」定家の歌「いつはりのなき世なりけり神無月、誰が誠よりしぐれそめけむ」を取れり。

〳〵　三重〳〵切立られ、城中指てぞ引たりける、時分はよしと夕暗に日本秘密の炮碌火矢、打て放つ其響き須彌も崩るゝばかりなり、楯も櫓も海士の焚く、鹽の煙か炭竈か、火焔は秋の村紅葉、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮とも謂つべし、國性爺勝鬨の駒の手綱を搔繰て、輪乘をかけてくる〳〵くる、くるり〳〵と乘廻し、廻る月日に偽りの無き世なりけり、神無月時雨て過る岡の邊に、棟門高き城廓こそ、是も國性爺が切取りし北州の長樂城、軒の甍は爛々と玉を彩る初霰、霙交りの夕嵐、吹來る上に降積り、塀も櫓も埋れて、雪の眺は面白や、地其外みん州けん州諸國の府、三十八ケ所切取て、太子の御幸を待顔に、所々に附城築き、

●高皇帝　明太祖のこと。

●青田の劉伯溫　劉基字は伯溫、明の青田の人、博く經史に通ず、太祖を助けて天下を定む、太祖任するに腹心を以てし、常に老先生と呼び、我張子房なりといへり。

●知見　大なる悟りにて法相をも知り得るをいふ。

兵糧軍兵込置て、威勢は天の氣に顯れ、手に取る樣にぞ見えにける、地吳三桂悅喜の餘り、身をも人をも打忘れ、太子を抱き奉り、城ある山へと走り行く、地二人の老翁引留め愚なり〳〵、詞目擊一瞬に見ゆるといへども、各百里を隔たり、汝此山に入て一時と思ふとも五年の春秋を送り、四年に四季の合戰を見たるとはよも知らじ、地斯いふ中にも經つ月日、太子の成長汝が身の、面影を能く水鏡、水清ければ影清し、汝忠あり誠あり、心の鏡に映り來る、我は先祖高皇帝、我は青田劉伯溫、住家は月の中に立つ桂の裏葉吹返へし、地智見の目には上十五、地下十五夜と見つれども、地衆生は心亂れ碁の、石とや嘸な見るらん、詞又水中

の遊魚は、釣針と疑へり、詞雲上の飛鳥は、地弓の影とも驚けり、詞一輪も下らず、地萬水とても上らねば、滿ては缺る影あれば、缺ても滿る月を見よ、暫しが程の雲隱れ、遂には晴て天照す、日の本和國の神力にて、太子の位は早出る日と、宣ふ御聲は松吹く嵐、俤ばかりは松立山の、峯の嵐に吹隱れてぞ失せ給ふ、地茫然として吳三桂、夢かと思へばまどろまず、實にも五年の月日を經たるしるしにや、我顏には髭伸たり、太子の尊容時の間に御背丈も立伸て、早七歲の御物ごし、吳三桂〳〵と召さるゝ御聲おとなしく、雪の深山に黃鳥の、初音も聞し思ひにて、あい〳〵と頭を下げ、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず、二度夢の心

地せり、御前に手を束ね、古への鄭芝龍が一子國性爺日本より渡つて味方の義兵を起すとは、音にこそ承れ春秋五年の勳功明かに、大明半國は取返し候へば、國性爺に案内して、君是にまします旨を告知せたく候と、申も敢ぬに遙の谷の向ふより、なふ〳〵それなるは、司馬將軍吳三桂にてはなきか吳三桂〳〵、と呼るゝ方を能々見て、御身は昔の鄭芝龍か、是は〳〵吳三桂、命あれば珍しや、一子國性爺が故郷の妻、栴檀皇女を御供せしと、招ぎあへば姫宮も、懷しの吳三桂、おことが妻柳歌君、命懸ての忠節にて、憂き瀨を渡る浮れ舟日本へ吹き流され、一官親子夫婦の情、不思議に再び逢ふ事よ、柳歌君は何國にぞ嬰兒は何となりけるぞ、

早う逢たい逢せて給べと、焦れ給ふぞ道理なる、詞されば其時の深手にて、我妻は空しくなり、后も敵の鐵砲に命を落し給ひしゆゑ、胎内を斷破り、我子を害し敵を欺むき、太子は山中にて 地安々育て 地參らせし、地はやし七歳の生先は是に渡らせ給ふぞと、語るにつけて姫宮も、わつとばかりにどうと伏し、人目も別ぬ御歎き、フシ思遣られていたはしく、地一官麓を見返つて、詞あれ〳〵貝勒王奴が姫宮を見付、數千騎にて追蒐る、年寄骨に力身を出し、蹈留て命限り、防ぎ支へんと逸れども、宮の御上危し〳〵、それへどうぞ退たいが此山不案内、谷を越す道は有まいか、いや〳〵此山まはれば六十里、谷深ふて底知れず、是へも呼れ

●「福壽海無量」にある語にて、福と壽との德を得る事大海の量り無きが如しとの意。

●「雲無心」「歸去來の辭」に「雲無心出レ岫」とあり。

●鵲の渡せる橋　中納言家持の歌「鵲の渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞ更けにけり」。

●くめの岩はし　大和國大峯山を葛城山といふ、此の所にくめの岩はしといふ所あり。

ず其處へも越されず、エ、如何せん何とかせんと虛空を拜し、地只今奇瑞を現じ給ふ、御先祖高祖皇帝、青田の劉伯溫、神仙微妙の力を合せ、非常の危難を救ひ給へと、太子諸共一心不亂に祈誓あり、姫宮小むつも手を合せ南無、日本住吉大明神、福壽海無量と丹精無二の心ざし、天も感應地も納受、洞口より一筋の雲無心にしてたな引けば、天の雲梯鵲の、渡せる橋や、葛城の久米の岩橋夜ならで、フシ夢路を辿る如くにて、渡るともなく行くともなく、チクリ向ふの〳〵峰に登り着き

フシ足もわち〳〵慄ひけり、地程なく賊兵雲霞の如くどつと駈寄せ、詞あれ〳〵太子吳三桂も見えたるは、思ひも寄らぬ拾ひ物、詞鰯網で鯨を捕るとは此事、的

になりたる奴原、やれ弓よ鐵砲よ、フシ打取れ射取れと犇きける、詞貝勒王下知をなし、やれ待て〳〵後は廣し退き場はあり、弓鐵砲は叶ふまじ、こりや見よ遂に見ぬ雲梯、必定國性爺めが日本流の算盤橋、疊橋なんどいふ物ならん、敵に喰物あてがふは愚の軍法、地續けや者共渡れや渡れや五百餘騎、押合詰合我先にと、ゑい〳〵聲をかけ梯の、半ば渡ると見えけるが、山風谷風颯々〳〵と、雲の梯吹切て、大將殆め五百餘騎どたく〳〵と落重なり、面額打割る天窓を碎く、泣つ喚いつ彌が上、フシ谷をも埋むばかりなり、地吳三桂鄭芝龍得たりかしこし心地よしと、地大石大木當るを幸ひ投かけく〳〵打つくれば、一騎も殘らず刹那が中、人

●葛藷　蔓草にて、根に芋あること、自然生に似たり。

の鮨とぞなりにける、調中にも大將貝勒王、岩根を傳ひ葛を手繰り這ひ登れば、吳三桂遊仙の碁盤引提げ、こりや此碁盤は葛藷で練て石より堅く、苦ふて口に合ずとも一口喰ふか、已れが一目目を持て御無用の碁の相手、地碁勢を見よと頭を出せば丁と打ち、面を出せば磕と撲ち、打付〳〵腦も鉢も打碎かれ、フシ微塵になつてぞ失せにける、チヽ〳〵本望〳〵、本朝にても斯る例は、先例吉野の碁盤忠信、それは榧の木是はところの九仙山、先手が味方へ廻りくる四ツ目殺に中手を入れて、しちやうに懸て打切て、攻手搦手斷切て、手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上げ、國も御代も打かへて、手を盡したる刼もあり、忠義の道は先づ斯う

●泰山を挾んで北海越ゆる　これは「孟子」に出たる語にて、孟子が齊の宣王に見え、王道を說ける條にあり、人の爲〳〵能はざる事の譬。

●永曆　永曆は永明王の年號。

●からくみ　組などを絡げ組むなり。これを城廓などを組立るとに用ひたる俗語なり。

〳〵、道は斯うよと打連れて、福州の城にぞ入にける

第五

地泰山を挾んで北海を越ることは能はず、王の王たるは能はざるにあらずとかや、延平王國性爺兵を用ふる事掌にめぐらすが如く、五十餘城を屠り、武威日々に熾にして、妻の女房古郷より梅檀皇女を供し參らせ、九仙山より吳三桂太子を御幸なし申せば、十善天子の印綬を捧げ、永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の本城をからくみ、陣幕戸幕錦の幕、陣屋の上には日本伊勢兩宮の御秡、大麻を勸請し、太子を別殿に移し參らせ、其身は中央の床几にかゝり、司馬將軍吳三

桂散騎將軍甘輝、同じく左右の床几に座し、韃靼大明分目の勝負、軍（フシ）評諚とり〳〵なり、（詞）吳三桂團扇取直し、凡そ謀計は淺きに出て、淺きに至るに如はなしと竹筒一本取出し、此筒に蜜をこめて山蜂多く入れ置たり、斯の如く數千本拵へ、先手の雜兵に持せ、立合の軍する體にて筒を捨て逃退かば、貪慾熾んの韃靼勢、食物と心得拾取んは必定、口を拔くと齊しく數萬の山蜂群り出で、賊兵を毒痛せしめ、漂ふ處を取て返し、八方より討取るべし、（地）是御覽候へと口を拔けば數多の蜂、フシ鳴り羽ぶいてぞ出にける、（詞）賊兵嘲笑ひ、淺墓なる童威しの謀計、（地）燒捨て耻かゝせよと積重ねて火を放けん、其時筒の底に仕懸たる放火の藥鳴渡り、

●鴆毒　鴆といふ鳥若し水に影をうつせば、魚類死すといふ程毒ある鳥なり。鴆毒は此の鳥より製したる劇藥の名なり。

飛散て十町四方の軍兵に、生殘る者は候まじと、火繩を筒に差つくると齊しく、飛だる亂火の仕掛、實にもフシ斯とぞ見えにける、（詞）五常軍甘輝、菓物入たる花折一合取出し、吳三桂の奇計尤に候又某が謀計、斯の如く折籠二三千合も拵へ、樣々の菓子餉酒肴したゝめ、各是に鴆毒を入れ、陣屋に貯へ竝べ置き、陣所近く敵を引受け、戰ひ負たる體にして十里計り引取るべし、韃靼が例の長追ひ、勝誇て陣屋に込入り、此食物に眼暮れ、寶の山に入たりと軍將雜兵、我先にと掴み喰はん事必定、（地）唇に觸ると齊しく片端に毒血を吐き、刄に血ぬらずして皆殺しにしてくれんと、面々軍慮心を碎き、フシ評議取々區々なり、國性爺打頷き、（詞）孰れも

一理ある計畧、批判申に及ばず去ながら、國性爺が魂に徹し忘れ難きは、母が最期の一句の詞、韃靼王は汝等が母の敵、妻の敵と思ひ込んで本望遂よ、氣を撓ませぬ其爲の自害なりとの詞の末、骨に泌み五臟に徹し刹那も忘るゝ事はなし、地千變萬化の謀計も何かせん、只無二無三に攻入て韃靼王李蹈天に、押並べてむずと組、ずた〳〵に刻んで棄ずんば、假へ國性爺が百千萬の軍功も、君の忠も世の仁義も母の爲には不孝の罪と、鏡のやうなる兩眼に涙をはら〳〵と流しければ、吳三桂甘輝を始め、一座の上下諸共に、フシ皆々袖をぞ濡しける、地殊更女の身ながらも、故郷を忘ぜず生國を重んじ、最期まで日本の國の耻を思はれし、我も同じく

日本の産生國は捨まじと、あれ見結へ天照大神を勸請す、詞某匹夫より出て數箇所の城を攻落し、今諸侯王となつて各の〻傳きに預る事、全く日本の神力に依てなり、然れば竹林にて從へし島夷ども、日本頭につくり置き、彼等を眞先きに立て、日本の加勢と披露せば、元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬かくれなく、韃靼夷聞怖して、二の足に成る所を疊みよせて乘取らんと、頃日我女房に牒合せたり、ヤア〳〵源の牛若、地軍兵率し是へ〳〵と、團扇を上ぐれば、あつと答へて立出る、小むつが髪の初元結、諸軍勢の元服頭、大和淺黄に唐錦、フシ華麗なりける扮裝なり、假御殿の幔幕より姫宮走出給ひ、詞なふ〳〵國性爺、此旗は御身の父一

官の旗印、　地　此書付も一官の筆心元なき文言と、出し給へば床几を下つて讀上ぐる、我愁ひに明朝先帝の朝恩を報ぜんと、再び此土に歸參し功もなく　フシ　譽もなし、老後の餘命幾許の樂をか期せん、今月今夜南京の城に向て討死を遂げ、美名を和漢に留むる者なり、鄭芝龍老一官、行年七十三歳と、讀も終らず國性爺すつくと立ち、　詞　サア敵に念が入て來た、　地　母の敵に父の敵、智略も入らず軍法も何かせん、旁は兎も角も身に逼るは國性爺、只一人南京の城に乘込、韃靼王李蹈天が首捻切り、父が最期の場をかへず討死して父母が、冥途の旅を同道せん、今生の御暇請と飛で出づれば、　詞　兩將袖に縋つてア、曲もなし、甘輝が爲には妻の敵

舅の敵、吳三桂が爲にも妻の敵嬰子の敵、チ、それ〳〵孰れも敵に輕めなし、天下の敵は三人一所、　地　サア來いと駈出る、此の三人の太刀先には、如何なる天魔疫神も面を向くべき　三重　方もなし、　地　鄭子龍老一官、夕霧暗き黑革威すゝどげに出立て、南京城の外廓の大木戸敲いて、國性爺が父老一官と申す者、　詞　年寄膝骨弱はつて人並の軍叶はず、さればとて若殿原の軍咄し安閑と聞ても居られず、此城門に推參して、速かに討死し素意を達したく候、あはれ李蹈天出合ひ、此白髮首を取て給べ、生前の情　フシ　ならんとぞ呼はりける、　地　城の中六尺豐かの大男、優しゝ一官相手になつてとらせんと、木戸押開き切て蒐る、心得たりと二打

三打討ぞと見えしが、突と入て首打落し大きに不興し大音上げ、　詞一官年寄たれども、斯樣の葉武者に遣る首持たず、李蹈天出合れよ外の者が出たらば、何時ま でも此通りと、城を睨んで立たりけり、韃靼大王壽陽門の櫓に顯はれ出、國性爺が父老一官とは彼奴めよな、問ふべき仔細數多あり、殺さずとも搦め取て引て來れ、　地承ると四五十人棒づくめに取廻し、隙をあらせず滅多打、捻伏せ〳〵縛りつけ、城中さして引て入る、　フシ無念といふも餘りあり、　地程なく甘輝吳三桂國性爺を眞先に、大手の門に駈付れば、引續いて六萬餘騎、小むつを後陣の大將にて、今日を死戰と押寄せたり、國性爺下知を爲し、　詞未だ生死も知れず、殊に此南京

城、四方に十二の大門三十六の小門有り、一方にても明たる方より落失せんは必定、　地四方に心を配つて討てと、相詞に手を配り、簸を叩き鯨波の聲　フシ天も傾くばかりなり、　地小むつが嗜む劍術の、牛若流の小太刀を以て一陣に進み出、相手選ばず時選ばず所も選ばぬ此若武者、死たい者が相手ぞと、思ふさま廣言し、多勢が中へ割て入り、火水を飛せて　三重〳〵戰ける、　地賊兵夥多討るれども、七十萬騎楯籠つたる南京城、　フシ落べき樣こそなかりけれ、　地國性爺は如何にもして、父の生死を知るべしと駈廻ても詮方なく、陣頭に大音上げ、　詞我れ唐土へ渡つて五年の間、數箇度の合戰終に無刀の軍をせず、今日珍しく劍の柄に手もかけ

まじ、馬上の達者劍術獵物の韃靼勢、寄て討てやと招きかくれば、地憎い廣言打殺せと、我も〳〵と喚いて蒐る、引寄て劍捻取たゝき挫ぎ打ちみしやぎ、鋒槍長刀もぎ取り〳〵、捻曲げ押曲げ折碎き、寄來る奴原脛に障れば踏殺し、手に觸るを捻殺し、絞殺しては人礫、騎馬の武者は馬共に一つに摑んで手玉に上げ、四足を摑んで馬礫、人礫馬礫石の礫も打交じり、人間業とは三重〳〵見えざりし、地さしもの韃靼責寄られ、すは落城と見えたる處に、一官を楯の表に縛付け、韃靼王を先に立て李蹈天進み出、ヤア〳〵國性爺、おのれ日本の小國より這出、唐土の地を踏荒し、數ケ所の城を切取、剩へ大王の御座近く、今日の狼藉緩怠千萬、是に依て

親一官を斯の如く召捕たり、日本流に腹切か、但親子諸共　地直に日本に歸るに於ては一官を助くべし、承引なくば只た今、目前にて一官を引張切にせん、とくの返答早や申せと、高聲に呼はれば、今迄勇む國性爺、はつとばかりに眼も暗み力も落て打萎れ、地諸軍勢も氣を失ひ、フシ陣中ひつそと靜りける、詞一官は齒嚙をなし、ヤイ國性爺、狼狽たか後れたか、七十に餘る此一官命存へ何になる、母が最期の健氣なりとて、父にも語り吹聽せしを忘れしか、是程迄仕終せし一大事、此皺爺が命一つに迷ふて仕損ぜしと言れて、地末代の恥辱故郷の聞え、日本生れは愛に溺れ義を知らぬと、他國に惡名とゞめんは日本の恥ならずや、地女なれど

も汝が母は生れ故郷を重んじ、日本の耻といふ字に命を捨しを忘れしか、是程の手詰になり、此親が目前に八つ裂にせらるゝとも、眼も觸らず飛蒐つて本望遂げ、大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失ふた、エ、未練なり淺ましと地團太踏んで制すれば、地國性爺父に耻しめられ、思切て大王目懸け、飛で出れば李踏天父に劍を差當る、はつと氣も消え立留まり、進みかねたるしどろ足、頭の上に須彌山が今崩れかゝつても、びくともせぬ國性爺、フシ前後に暮てぞ見えにける、

詞 甘輝吳三桂互に屹と目配せ、突と出て韃靼王の前に頭を下げ、斯まで仕了せ候へども、御運强き韃靼王、一官搦め捕らるゝ事國性爺が運も是迄、末頼みなき大

●八逆五逆十惡人 ＊

將、我々兩人が命を助け給はらば、國性爺が首取て差上ん、御誓言にて御返答承はらんと 地いひもあへぬに韃靼王、チ、〳〵神妙〳〵といふ所を、飛蒐てはつたと蹶倒し絞上れば、隙をあらせず國性爺、飛蒐て父が縛め捻切り〳〵、李蹈天を取て押へ父を縛りし楯の面、まづ其如く高手小手に縛付、三人目と目を見合せて、ア、嬉しやと悅ぶ聲、フシ國中響くばかりなり、諸軍勢勇みをなし、太子姫宮御幸なし奉れば、御前にて彼奴原則ち罪科に行ふべし、詞夷とはいひながら韃靼國の王なれば、縛りながら鞭打して本國へ送るべしと、左右に分つて五百鞭、半死半生打するて引退けたり、地サア是からが李蹈天、元の起りの八逆五逆十惡人、

片身恨みのない樣に、國性爺は首引拔かん、兩人は兩腕と三方に立かゝり、聲をかけて一時に、ゑいやうんと引拔き捨て、永曆皇帝御代萬歲、國安全と壽くも大日本の君が代の、神德武德盛德の、滿て盡きせぬ國繁昌、民繁昌の惠によつて、五穀豐饒に打續き、萬々年とぞ祝ひける

女殺油地獄

解題

此の淨瑠璃は享保六年七月十五日より、竹本座にて操にかけしものにて門左衛門六十九歲の時の作なり。大阪本天滿町河內屋德兵衛二男與兵衛といふ者、繼父の甘やかしに我儘增長して放蕩を盡し、廓の金に詰り、同じ町に同じ油商を營むてじまや七左衛門の妻お吉とは、日頃心易きより金の無心をいひかけしに、堅氣のお吉は夫の留守に斯樣のことはならずと、其の請ひを容れざるより、强ひて借らんと迫り、遂にお吉を殺したる事實を仕組みたるものにして、筋は單純なれども作者老熟の筆に、放逸無賴なる與兵衛の性格活躍し、近松が世話物中異彩の作なり。但し此の事件は、他の心中ものと異なり、艶氣に乏しければ、操にかけては面白味少なく、且つ餘りに殘酷に過ぎたれば、見物に悅ばれざりしなるべく、當時は寧ろ不評の作なりしが如し。

●船は新造の乘り心云々　「松の落葉」卷四、「君はしんぞの乘り心、さよいあい〳〵、君と我と我と君と引きよせてはよる〳〵さ男は花の都入り圖につたのつて來た〳〵船のや宿の娘は小手まねき云々。此の歌を作り替たるものか、或は別に本歌あるにや。

女殺油地獄

近松門左衞門作

歌詞

船は新造の乘り心サヨイサエ、君と我と我と君とは、圖に乘つた乘つて來た、しつとんとんとんしととん〳〵、しつと〻逢瀨の沈枕、杯は何處いた、オンド君が杯いつも飲たや武藏野の、月の、月の夜すがら戯れ遊べ、ナチス囃し立てたる　フシ大騒ぎ、フシ北の新地の地料理茶屋、主人なけれど咲く花や、後家のおかめが請こんで、客の變名は郎九とて、生れは陸奥會津にて、名代ながさぬ金遣ひ、此頃浪華此里へ、登りつめたよ天

●なまづ川　片町と網島との間を流るゝ小川。昔し大阪より野崎參りするもの、多くは此の川を船にて上り、寢屋川に出で野崎に到る

●野崎祭り　野崎村は河内國讃良郡にあり、（今は北河内郡四條村に屬す）。福壽山慈眼寺は本尊十一面觀音、毎年春季に大阪より參詣するもの頗る多し。これを野崎祭りといふ。今年（享保六年）四月中旬開帳なりしと下文に見ゆ。

●昔在靈山云々　こゝは「昔在靈山名法華、今在四方名阿彌陀、婆婆示現觀世音、三世利益同一體」といふ經文を唱へつゝ行く所なり。其の意は、昔天竺の靈鷲山にては佛の衆生を濟度する御名を法華と名け、今西方極樂淨土にては、阿彌陀と名け、又此の婆婆世界を救はん爲には觀世音と現はれ給へど過去現在未來の三世を通じて利益は同一體なりと。

●去々年つちのへ亥　此の戊亥解しがたし、此の年享保六年なれば去々年は享保四年なり、然るに四年の干支は戊亥にあらず己亥にして、其の前年は戊戌なれば、いづれにしても合はず、恐らくつちのとなつちのへに書損なるべし。

王寺屋、小菊を思ひ、思はれたさに、なまづ川よりゆら〳〵と、野崎參りの屋形船、卯月中旬のはつあつさ、小チクリ末の閨に追繰て、まだ肌寒き川風を、酒に凌ぎてそゝり行く、昔在靈山名法華、今在四方名阿彌陀、婆婆示現觀世音、三世の利益三年續き、去々年つちのへ亥の春は、うらやせどやに罪深く、針櫛箱や珠數袋、そこに日の目も見ず知らぬ、一文不通の衆生迄、フシ千手の御手の攫み取り　紫摩黃金の御肌に、忽ち那智の觀世音、去年は和州法隆寺、聖德太子の千百年忌、これ又救世の大悲の化身、續いて今年此薩陲、櫻過にし山里の、誰れ訪べくも無かりしに、老若男女の　フシ花咲きて、足をそら〳〵空吹風に、散らぬ色香の伊達參

●一文不通　一の文字も讀み得ざるをいふ。無學文盲などいふに同じ。

●紫磨黃金　＊

●和洲法隆寺　同寺は用明天皇御懺の御祈りに藥師の像を造り佛閣を建立せんとの御願なりしも、天皇崩御ありしにより一たん中止せられしを聖德太子推古天皇十五年に御建立あり、又此の地は班鳩里と稱し、太子宮殿ありし地なり。

●救世の大慈の化身　佛家にて聖德太子は救世菩薩の化身といふ。

●此薩陲　薩陲は菩薩といふに同じ。但し野崎の觀音をさす。

●行くもちんつ皈るもちんつ　此の頃の流行歌なるべし。

●得庵堤　得庵村は廢屋川の北にあり、其の附近の堤をいふ。乘合船は借切よりも德といふかけたるなり。

●町で名古屋の胸高帶　町では新地での意なるべし。名古屋帶は、昔し豐太閤肥前名古屋におはせし頃遊女などが唐絲にて縫みたる帶をしめたるに始ると。文祿より寛永頃まで流行せし由、詳しくは「骨董集」に見えたり。但しこゝは帶の結び方の高きをいへるなるべし。

り、大人童も歌ふを聞けば、歌行くもちんつ、歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテナチス次手を賴みの乘合船は、借切よりも得菴堤、共に舳を漕付て、餘所も一つの船の內、客は是見よ顏自慢、動ともすれば痴話ごとの、夫に任せた身の上も、人も耻かし氣詰りと　フシチクリ小菊は〳〵陸へ一飛に、ひらりぼうしのふかぐくと、本フシ眉を隱せどとりなりの、町で名古屋の胸高帶は、小チクリ小笹に、露のたまられぬ、始末算用世智辨も、人にこそよれ品にこそ、よれつもつれの道草に、人の言草アゝむつかしく、うるさく憎く嫌らしく、我が供船を小手招き、歌是の見さんせナ愛宕の山にヨエ、ちんの煙が三筋立つ、烟がナちんの、

●世智辨　吝嗇のこと。

●是の見さんせナ愛宕の山に　當時の流行歌なるべけれども、證歌見當ず。

●ちん　枕香のこと。

●四筋に分れ　道の四方に別れたるをを云ふ。辰巳（東南）は奈良街道、丑寅（東北）は山城八幡道、未申（西南）は攝津玉造、西は元來し京橋、片町網島は京橋口の先きなればなり。玉鉾は道の枕詞。

●岡山　野崎村の北にあり。（今北河內郡甲可村に屬す）慶長十九年、大阪夏陣の時、秀忠此の山に本陣を布く。此の山に壽命長久の松といふ古松あり。されば此の松の名を德川氏治世に壽ぎて、御代長久の岡山と書きしなり。又岡山を古歌には忍びの岡と詠めりし由、「勅後選」に法印覺寬の歌、「待人になどかたらはで郭公、ひとし忍びの岡に鳴らん」（河內名所鑑）

●讃良　郡の名。山口一ツ橋、此の邊の地名にや。

●じゆふくかく　案福海なるべし此の所は普門品の「具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂

ちんの煙が三筋立つ、ナチス四筋に　フシ別れ玉鉾の、フシ是より辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡道、玉造へは未申、西は元來し京橋や、野田の片町大和川、爰は名にあふ壽名の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、讃良山口一ツ橋、渡して救ふ御願力、無量無邊のじゆふくかく、慈眼視衆生念彼觀音、身得度者の御誓ひ、問ふも語るも行く船も、徒路ひろふも諸ともに、迷ひを開く腰扇、御堂に念珠を　三重繰返へす、フシ所をとへば　地本天滿町、町の幅さへ細々の、柳腰やなぎ髮、とろりとせいも種油、梅花紙こし荏の油、夫はチクリ手島屋七左衞門妻の野崎の開張參り、姉は九ツ三人娘、抱手引手に見返る人も、子持とは　フシ見ぬ花盛り、吉

禮」の語を取入れしなり。福聚海無量とは、大海の増さず減らざるの値あるが如く、無量の衆生を度すといへども、とることもなく無數の群生多しといへどもすつることもなきなりいふ。念被觀音は即ち彼の慈悲廣大の觀音力を念ずることなり。

●本天滿町　今の東區伏見町二三丁目の所、其の頃は是より上が本町、下が伏見町、五丁町が錦町といへり。

●野崎の開帳　享保六年四月、野崎觀音の開帳ありしと見ゆ。

●ぶゞ　小兒や婦人がお茶又は湯を呼ぶに、ぶゞといふ。

●刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛　刷毛皆朱は男伊達をまれて綽名に呼ぶものにて、五人男の極印仙右衛門の類。いづれも俠客かぶれのあぶれ者なり。

●萬事を夢　職業などの事は少しも頓着なく、唯酒色に耽りて夢の如くに遊び暮すをいふ。

●坊主持　花見遊山寺社參りに、携へたる包みなどを互ひ持にする順番なり、途中出會する坊主にて定むるをいふ。

野の吉の字を取つて、お吉とは誰が名付けん、お清は六ツ中娘、母様ぶゞが飲たいも、折節傍の出茶屋見世、フシ爰借りますと憩ひぬ、地是も同町筋向ひ、河内屋與兵衛、まだ二十三親がゝり、同商賣の色友達刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛、野崎參りの三人づれ、萬事を夢と呑みあげし、寢覺め提重五升樽、坊主持して北うずむ、小菊めが容と連立、よし〳〵と下向するも此節と、のさばり返つてくる道の、茶見世の内より申々與兵衛様、爰へ〳〵と呼懸けられ、調ヤお吉様子供衆連ての參りか、存たら連に成ましよ物、七左衛門殿は留守なさるゝか、いや此方の人も同道二三軒寄る所もあり、地追付爰へ見へる筈、お連衆もマア是れへ、平に

●のんこらし　伊達衆らしきことなるべし。

●島縮　縞縮子のこと。

●しやじやないか　しやはそれしや、即ち素人ではなしとなり。

●中の風　新町廓のこと。中といふ。

●贅　妓を連れて婚者を街ふこと。

●新地　曾根崎新地のこと。

〳〵と強られて、烟草一服致さうかと、フシ腰打かくるものんこらし、調何と與兵衛様、御繁昌な參りでは無いかいの、よい衆の娘子達やお家様がた、アレ〳〵地彼處の桔梗染の腰變り、島縮の帶しやじやはひの〳〵、調ソレ〳〵〳〵其處ハ島縮に鹿子の帶、地慥に中の風と見た、又一位見事ではあるぞ、調如何様若いお衆が此様な折に、あんな見事な者引連れ、贅の遣たいは道理、こな様も連立たい者があろ、こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か、新町の備前屋松風殿か、なんとよう知つて思るか、地何故連立て參らんせぬと、ばつと乘すればふはと乘り、調殘り多い天晴今日は物の見事なことで、參りの群集に目を醒させうと、此中か

●川御座　屋形船の川にて使用するもの。

らもがいたれど、備前屋の松風めは先約が有て、貰ひも貸もならぬと吐す、地天王寺屋の小菊めは、野崎へは方が悪い、どなたの御意でも參らぬと言きる、詞夫に聞て下され、小菊めが今日會津の客に揚られ、早天から川御座で參りおつた、地田舍者に仕負ては此與兵衛が立ぬ、小菊めが歸るを待つて一出入と咄の内から二人のつれ、腕押もんで力みかけ、フシ鬼とも組べき勢なり、詞それ〳〵問ふには落ず語るに落ると、利口そうに夫が信心の觀音參りか、喧嘩師ののら參り、買しやんすお山も傾城も、何屋の誰何屋の誰と、親御達がよふ知ていとしぼや、そちへは與兵衛めが間がな隙がな入浸て居る、異見して下されと、私等夫婦に折入て

●入子鉢　大小數個組合せ中に入るべき鉢は段々小さく製したる鉢なり。お吉が子澤山を形容したるなり。

●こうとう　じみといふに同じ。着實なるも。

●せうごん　正勤にて邪惡を去り、正道を守りて勤行す事なるべし。

口説ごと、こちの七左衛門殿もいやらぬ事は有るまい、定めしこな様の心には、所こそあれ野がけの茶見世で、若い女子のざまで入子鉢の様な、面々の子供の世話計りやきおらず、小さし出たと憎かろが、地此諸萬人の群集を、突のけ押のけ目に立つ風俗、本天滿町河内屋德兵衛といふ、油屋の二番息子、茶屋〳〵のわけも碌に立ず、あの様見よと指さしするが笑止な、こうとうな兄御を手本にして、商人といふ物は、一文錢もあだにせす、雀の巣もくふにたまる、隨分稼いで親達の肩助けと、心願立てさんせ、脇へは行かぬ其身のせうごん、詞ハア氣に入らぬやら返事がない、姉おじや早ふ參らふ、道でこちの人に逢しやんしたら、本堂に待て

●飴細工の鳥　見かけは奇麗なれども、味のないと。遊野郎い目からは堅氣の女房は蠟を嚙むが如く氣の毒なるべし。

●やつしは甚左衛門　大和山甚左衛門のこと。京役者にてやつし濡れ事の名人なり。幸左衛門は竹島幸左衛門か四郎三は櫻山四郎三郎なるべし。

居ると言ふて下さんせ、地茶屋殿過分と袂より置く茶の錢の八九文、四分におもく五分には、輕々し氣の物參り、フシ別れてお吉は通りける、地惡性に上塗するかいしゆの善兵衛、詞あの女は與兵衛が筋向ひのおか樣でないかい、物ごしもどこやら戀のある美しい顏で、扨々堅い女房じやな、されば年もまだ二十七、色は有れど數の子程産廣げ、地所帶染て氣がこうとう、好い女房にいかひ疵、見懸計りで美味の無い、フシ飴細工の鳥じやと笑ひける、フシ斯くとはいかでしろうとの、田舍の客に揚られて、連て主人の後家交りかはりちんつの國訛り、歌やつしは甚左衛門幸左衛門が思案ごと、四郎三が憂いこと、ちんつ〳〵ちんちりつて、地日

●會津蠟燭　會津蠟燭は名物。會津の客なれば蠟燭と嘲弄したるなり。

本一の名人樣、やつちや〳〵と譽る歌より褒さする、フシ金ぞ諸藝の上手なる、地そりや〳〵來たぞと三人が、手ぐすね引たる顏色、小菊遠目にはつと驚ろき、詞申花車さん、同じ道計り氣が盡きる、地始の船に乘りたいと、裾かい取て立やすらふ、前に與兵衛帆柱立ち、跡に二王の張番立ち、詞與兵衛せくな、女郎と詰開いて男立い、會津蠟燭が光りだてしたら、こち二人が心切て踏消してくれると、地草履を腰に腕卷り、客は顚倒花車も下女も狼狽、フシ小菊を圍ふてうぞふるふ、詞小菊殿かつた、馴染の河與が借るからは動せぬと、地茶屋で床机に引ずりする、詞是賣女樣お山樣、野崎は方が惡い、どなたの御意でも參らぬと、此河與と連

●鬼門金神　與兵衛の眼玉の恐ろしさを譬へたるなり。

●そだてる　おだてるに同じ。嗾かけるは犬を跳發して人に吼えさせるをいふ。教唆することなり。

●ちよがらかす　ちやうらかすの約、上方にて小供をだまし賺すと

になるを嫌ひ、好た客と參れば方も搆はぬか、地其譯聞ふと理屈ばる、目玉の鬼門金神もなどやかに、詞河與樣角が取れぬの、小菊といふ名が一つ出れば、與兵衛といふ名は三つ出る程、深い〳〵と言立られた兩人の中、連立て參らぬも、皆なこな樣のいとしさゆゑ、人にそだてられ嗾けられ何んじやの、地私が心は誓文かうじやと、ひつたり抱き寄せ　フシ染々囁く、地色こそ見へね河與が悅び、エ忝けないと伸た顏付、客は堪らず傍にどうと腰かけ、詞小菊どのお身は聞へぬ、如何なる緣にか會津樣ほどいとしい人は、大坂中に無いと言つたぞよ、國元の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の樣に川遊び、ちよがらかされにや來申さない、

に用ゆ。こゝも欺されるの意。

●もさ　「倭訓栞」に、關東より上る旅人をモサと稱すと、又モサは猛者の音なりとあり。

●ぶい〳〵　黃金蟲をぶい〳〵といふ。蟲けらといふことか。次のけさい六と同じく人を罵る詞。

其男が聞くまへで、夕べの如く云はないけりや、どや〳〵通りのむや〳〵の關、二度と越し申さない、どうだ　地どうだと　フシ責せちがふ、地言ひ合せし二人の連つか〳〵と寄て、詞ヤイもさめ、此女郎此方へ貰ふ置て歸れ、地但し東土產に川の泥水振舞はふかと、兩方より立はさみ、投てくれんず面構、阪東者のどう强く、詞何さぶい〳〵共、人嚇の腕に色々の彫物して喧嘩に事よせ、懷中の物取ると聞及ぶ、貧乏と云ふ棒に脛を撲られ、腰膝も立ぬ遊女狂ひ、上方の泥水より、奧州者の泥足くらへと、地つゝと寄り蹴上る足首、刷毛が頤ひ蹴ちがへられ、どうとまろんでころ〳〵、小川へだんぶと撥落され、是はと取付皆朱が大事の命の

●ふら骨　顆骨と同じ。

玉縮み込む程蹴付られ、鳶がかけた南無三と、惘れて空をみち〳〵、腹ばい〳〵　フシ逃て行衛は無りけり、　地　友達投させ見て居ぬ男、逆様にうへてくれんと、むずと攫めば振放し、　詞　ヤちよこざいなげさい六、ゑら骨ひつかいてくれぺいと、　地　くらはす拳を請外して、は擲返し、敲き合ひ摑み合ふ、なふ氣の通らぬ是どうぞと、中へ小菊がかせに入り、ア、怪我さしやんすな大事の身と花車が圍へば、下女も手を引立隔つ、そりや喧嘩よと諸人の騒ぎ、茶屋は店を仕舞ふやら、二人は絶體絶命の、擲合ひ組合ひ、堤の片岸踏み崩し、小川にどう〳〵落ちわかれ、藻屑泥土まいごみ砂、互に投げかけ攫かけ、打あひ打付扱ひ手無き相手勝負、氣

●高槻の家の子　高槻は三萬六千石、城主永井飛彈守。家の子は家臣なり。

●皆具　馬具の鞍、鐙、障泥等凡てをいふ。

●沛艾　馬の勇み又は物に驚きて躍り上る狀。栗毛の馬が泥に塗れ驚いて跳ね上り鎭まらぬとなり。

根較べと　三重　見へにけり、　地　折こそあらめ島上郡高槻の家の子、お小姓達の出頭小栗八彌、馬上に上下御代參の徒若黨、揃羽織の濃柿に、智惠の輪の大紋、手振の先供はい〳〵　地　はい〳〵の聲をも聞かず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂、出合拍子に馬上の武士の袷上下皆具迄、ざつくと掛るも時の運、栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍も鎭まらず、與兵衛もはつと驚く所、それ逃すなと徒士の衆、ばら〳〵と取まく中、相手は川を渡越し、小菊も花車も手ばしかく、フシ　參りの諸人に紛れてのく、　地　徒士頭山本森右衛門、與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ、膝を背骨にひしぎ付る、　詞　ア、お侍樣、けがでござる御免成ませ、　地　お慈悲〳〵と泣

●二字　武士の二字なるべし。

面かく、詞ヤ此奴慮外者、お小袖馬具に泥をかけてけがと云ふては濟ぬ、面を上いと首ねぢ上げ、ヤア森右衛門殿伯父じや人、ム、與兵衛めかと、地互ひにはつと驚きしが、詞ヤイおのれは町人、如何やうの耻辱を取ても疵にならぬ、旦那より御扶持を蒙り、二字を首に懸たる森右衛門、慮外者を取て押へ、甥と見たれば猶助けられぬ、討て捨る　地立ちませいと、小腕を取て引立る、馬上の主人、ヤイ〳〵〳〵　詞森右衛門、見れば其方が大小の鞘口つめやうが緩さうな、ふと鞘走つてけがでもして、血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ、下向迄は隨分鞘口に心を付て、森右衛門供をせい〳〵、ハア　地はつとお詞忝なく、詞お

のれ下向には首を討、地暫の命と突きはなし、隨分伯父が目に懸るなと、云ひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振鶯はい〳〵〳〵、武家のいきかたなづまぬ御馬、フシ足を早めて急がるゝ、地與兵衛うつとり、夢か現か醉たるごとく、南無三伯父の下向に斬るゝ筈、切られたら死ふ、死だらどふしよと心は沈み氣はうはもり、遁てくれうと駈出で、詞ハアかう行ば野崎、大坂は何方やら方角がない、こつちは京の方、あの山はくらがりか但し比叡山か、どこへいたらば遁れうと、眼も迷ひ狼狽ア、どうかせう、何と加賀笠お吉と見るより地獄の地藏、詞ヤアお吉樣下向か、我や今切らるゝ助けて下され、フシ大坂へ連れてゐて下され、フシ後生でござ

●けん〳〵　慳貪に物をいふこと。但しこゝは苦なく斷りかねしこと。

ると泣きおがむ、詞イヤこちやまだ下向じや無いはいの、七八町往たれど、餘まり人ぜり、こちの人待合せに爰迄歸た、エ、けうとなげな、身も顏も泥だらけ、地氣が違ふたか與兵衞樣、詞尤〳〵喧嘩して泥を攫み合ひ、はね馬に乘た侍に、其泥が懸つて、それで下向に切らるゝ筈、地賴みます〳〵と立去らず、詞エ、呆れはてた親御達の病になるがいとしほい、地向ひどしのけん〳〵共ならず、茶屋の内借て振濯いで進ぜまし よ、詞顏も洗ひとつとゝ大坂へ歸つて、以後を嗜ましやんせ、又爰かりますお清よ、地父樣が見へたら、母に知らしやゝと、二人葦簀の奥長き、フシ日影も正午に傾けり、地さぞや妻子が待つらんと、辨當かたげかた

〳〵に、姉の手を引き手島屋の七左衞門、咽喉が乾けど呑間も急ぐ、茶屋の前にて中娘、アレ父樣がと縋り寄る、チヽ待兼たか、母は内處にと尋れば、詞母樣は爰の茶屋の内に、河内屋の與兵衞樣と二人、帶解てべゝも脫でゞござんする、ヤア河内屋與兵衞めと、帶といて裸體に成てじや、エ、口惜い目を拔れた、そうして跡はどうじや〳〵、そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたりと、地聞くよりせき立つ七左衞門、顏色變り目もすはり、門口に立はだかり、詞お吉も與兵衞も是へ出よ、地但し出ずば其處へ踏ごむと呼はる聲に、こちの人かし詞子供がお晝の時分も忘れ、何處に何していさしやんしたと、地出る跡から與兵衞が、詞七左衞門殿面目無い、

ふとした喧嘩に泥にはまり、色々お内義様のお世話、是も七左衞門殿のお蔭、地忝けないといふ小鬢さき、髪の髷も泥まぶれ、身は濡鼠腹立やら可笑いやら、挨拶もせず是お吉、詞人の世話もよい比に爲たがよい、若い女が若い男の帶といて、そうして跡で紙で拭ふとは尾籠至極疑はしい、餘所のことはほからかしてサア〳〵参らふ日がたける、地ヲ、〳〵待て居ました、委い事は道すがらと、姉が手を引おとは抱く、中は父親肩車に、のりの教も一ツは遊山、フシ群聚をわけてぞ急ぎける、地與兵衞一人茶屋の見世、とほんとして居る所に、亭主を始め邊り在所の者共五六人、詞先にから爰な人は参りか下向か、一ツ所にうろ〳〵と、合點い

かぬサア通つたと追立る、折からはい〳〵〳〵の、聲に交はる轡の音、小栗八彌下向の徒立、與兵衞うろたへ逃損い、押わる供先伯父の目に、懸るふしやうの出合頭、引捉へ捻する、詞最前は御參詣、今は御下向愼みなし地討て捨ると刀の柄に手をかくる、詞待て待て森右衞門、その者討て捨てんとは何故〳〵、彼奴は最前の慮外者、他人ならば少々は見遁しにも致し、御免なされ下し置るゝ樣の、取成をも申すべき所、彼奴が母は拙者が兄弟、現在の甥、地何とも助け難しと申しも敢ぬに、詞シテ其科といふは何ごと、御尋ねに及ばず、御服に泥を投かけ、御身を穢し汚したる科、いや〳〵此八彌が身を穢せしとは心得ず、是是よ着類の

何處に泥が付たるぞ、イヤ召換られぬ以前の御小袖、されば〳〵、着替れば泥をかゝらぬも同前では有まいか、御意とは申しながら、已に御馬の鞍鎧も泥に染み、

地お徒歩でお歸り成さるゝは、旦那に耻辱を與ゆる慮外者と、申上れば默れ〳〵、

詞馬の皆具には泥のかゝる物ゆへに、隔泥といふ字は、泥をへだつと書く、泥の懸らぬ物ならば、何しに隔るといふ字の入るべきぞ、耻辱も慮外も科も無し、武士たる者の耻辱とは、只一滴の濁水も、名字に懸るは洗ふにおちず、すゝぐに去らず、あれら體の雜人、身が目からは泥水、

地泥より出て泥に染ぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ、ハアはつと又有難き御意を大事に、振る手を揃へ足そろ

●揭諦〳〵云々　「般若心經」の終りにある呪文即ち「揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提薩婆訶」なり。唵呼魯々々、旋茶利摩登枳は藥師如來の呪文、唵阿毘羅吽欠は大日如來の呪文にて山上參りの講中が唱ふる所なり。

●山上講　山上參りの講中なり、下に行者講とあるに同じ。山上參りは大和國吉野郡金鋒山藏王權現に參詣するとにて、關東における大山、富士等へ登山すると同じ。此の山は宣化天皇の御宇、役優婆塞（役行者のこと）の開きし所なり。

●院號　先達も年功を經れば、修驗者の格に入り何々院と號するが故なり。

●金剛杖　修驗者の持つ杖。

へ行列立てゝぞ　三重

中之卷

詞揭諦〳〵、波羅揭諦、波羅僧揭諦揭諦〳〵、波羅揭諦波羅僧揭諦、唵呼魯呼魯、施茶利摩登枳、唵阿毘羅吽欠、

地おん油屋仲間の

フシ山上講、俗體乍ら數度のお山、院號請けたる若手の先達新きやくまじり、十二とう組吹出す法螺のかい〳〵しげなる金剛杖、腰に腰當首に珠數、巾着代の水のみ、河内屋德兵衞店前に立寄り、

詞何んと與兵衞内にか〳〵、講中何事なふ、お山勤めて有難い、今日の下向は知れた事、念比な友達は桑津まで迎ひにじや、お主一人見へぬは氣色でも

●小篠の坂　藏王權現より南に向ふは大峰の通路、西に行は天川の通路にして小篠は一里の所にあり

●どろ　どら息子のこと。

●行者講　山上講といふに同じ。

悪いか、忝けない御利生見て来た、是が土産先づ話さふ、西國者とやら、兩眼つぶれた十二三な盲が、大願かけて山上し、行者様を拜む中、兩方共にくはつと開き、小篠の坂を杖もつかずつゝつと下る、お山の衆が考へ、ア、有がたい、此秋から世の中直る御告、あれ合點いかぬか、ちいさい盲は小盲、則はち米藏開いて、やす〳〵と下り坂は、下り口とのおしへ、地手隙なら夕方おじや、色々お山の話で、旅の疲をはらそうぎやてい、フシぎやてい〳〵と罵めきける、親德兵衛走り出、若衆下向か殊勝にござる、詞こちのどろめは山上參りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近ひ錢取て、どれどこ

●どろく者　道樂者の轉訛。

●行者樣　役行者。

に迎ひにも出をらぬ、神佛の罰も思はぬどろく者、友達甲斐に引しめて、地異見賴みまするといふ所へ、奥より母親兩手に茶碗、なふ〳〵目出度下向、マア一ツつゝまいれ、こちの與兵衛が、山上樣へ虚言ついた其答が、妹娘のおかちが十日計り、風引て枕あがらず、地醫者も三人替て今に熱がさめ兼、節句は近付婿を入る談合極り、先からは急いで來る、何かに付て夫婦の苦勞、皆與兵衛ののらめが、行者樣へ嘘ついた祟り、お若衆お詫の祈禱賴みますと、しみ〳〵語れば講中の先達、詞いや〳〵お山の祟りなれば、與兵衛に罰が當る筈、役の行者ともいはるゝ佛が、若輩らしう何の脇がゝりなされう、娘御の熱病は又外のこと、そのやう

●貝吹く降伏悪魔　修験者の螺貝を吹き鳴らすは、悪魔降伏の爲といへばなり。

な煩ひには藥も醫者もいらぬ事、皆樣知らずか、あんまり奇妙で異名を、白稻荷法印と申す、今の世の流行り山伏、與兵衞も定めし知つていよ、此法印を賴めば本服はたつた一加持、詞是から直に立寄り、賴むに否は有まいと語れば悅びナフ〳〵忝ない、是も行者のおしらせ、私は醫者殿へ參ります、是で緩とお休み〳〵と立出れば、いや我々も面々の、親々妻子の顏も見たし、互に無事で悅びの、貝吹く降伏惡魔を拔ふ眞言の、聲も散り〳〵はら〳〵ぎやてい、フシおんころ〳〵に別れ歸りけり、地ぎやくな弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衞、用有げにも浮ぬ顏付、詞ヤ太兵衞來てか、おかぢが氣色見廻か、書出し何か忙しい時分、見廻に

●もつけ　思ひ設けぬこと。

は及ばぬ事と、いへば太兵衞傍近く寄り、母には道でお目に懸り、立ながら委う物語致せしが、高槻の伯父森右衞門樣から、たつた今飛脚の狀に、もつけな事が云ふて來ました見さつしやれ、跡の月御主人の供して野崎參りの折節、ごくどうの與兵衞めも參り合せ、友達喧嘩に摑み合ふひやうし、御主人へ段々の慮外、當座に與兵衞めを斬殺し、ぬしも腹切合點の所、御主人の御了見穩しく事相濟、歸つて後御家中町屋是れ沙汰、のめ〳〵と面さげて奉公ならず、暇を願ひ浪人し、四五日中に大坂へ下り、二度侍の立べき思案せずば、此ぶんで刀は差れぬとの　地文體なりと、いふよりはつと膝を打ち扨こそな、何處ぞで大事仕出さふと思ふつ

ぼ、かて〻加へておかぢが煩ひ伯父の難義、また此上に、どろめが何を仕出さふやら、分別にあたはぬと頭をかけば、イヤ分別も何もいらぬ、追出して退さつしやれ、ぢたい親父様が手ぬるい、私と與兵衛めは、お前の種でないとて、あまり御遠慮が過ぎまする、腹に宿つた母者人と、連添ふお前眞實の父と存ずる、地やがて婿を取程脊丈伸びた、おかぢは打叩き成されても、あんだめらには拳一ツ當ずほたゑさせ、萬事に遠慮が皆身の仇、叩き出して此方へこさつしやれ、どれぞ酷い主にかけ、矯直してくれませうと、云へば親仁は無念顔、詞エ、口惜い、尤も繼父なれば迚親は親、子を折檻するに遠慮は無い筈なれど、其方衆兄弟は身共が

親方の子、親旦那往生の時は、そなたが七ツのらめは四ツ、坊さま兄様、德兵衛どうせいこうせいと、云ふたを彼奴が屹度覺へて居る、母も始めはおか様の、内儀様のといふた人、伯父森右衛門殿が了見で、其方が家を見棄て〻は、後家も子供も路頭に立、兎角森右衛門次第に成てくれと、だん〳〵の賴みゆへ、地親方の内儀と此如く夫婦に成り、親方の子を我子として、守立し甲斐あつて、其方は自分の獨り稼ぎもめさるゝ、與兵衛めに商賣の手を擴げさせ手代も置き、藏の壹軒も立る樣にと、あがいても尻のほどけた錢さし、籠で水汲む如く跡からぬけ、壹匁儲ければ百匁遣ふ根性、異見一言云ひ出せば、千言で云ひ返す、エ、元が主筋

●釘こたへ　樽に釘などの諺あり締りのないを釘がきかぬなどゝともいふ。

下人筋の親と子、釘こたへせぬ筈、身の境界が口惜いと、齒を嚙ひしばれば、詞サアこなたの其正直を見拔て、どろく者めが仕度がひに踏付る、親仁樣の蔭でこそ、親子三人橋にも寐ず、人の門にもたゝず、名跡立てゝ下された、其恩德は本の親にも變らずと、毎度母も其の悔み、子共に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも氣兼が有るかと思はぬ心置かるゝ、因果さらしの物にならずに飽果てた、太兵衞賴む江戸長崎へも追下し、死をらば死に次第、二度面も見とふない、みちんも愛着殘らぬと、如來かけての母が言分からは何御遠慮、地勘當なされと評議の聲に目を醒し、アゝづゝ無い母樣〳〵、かゝ樣はまだ歸らずかと、おかちが苦

●者婆　天笠の名譽。

しむ屏風の內、門にはものもう河內屋德兵衞殿は此方か、山上講中賴みにつけ稻荷法印御見廻申すと案內す、扨はおかちが祈禱なさるゝか一だん〳〵、私は高槻の返事が急ぐ、お暇申すと表に出、德兵衞宿に罷ある早々御出忝けなし、あれへお通り遊ばせと、太兵衞歸れば法印は、チクリ端の〳〵間にこそ　フシ通りけれ、踏締も無く世の中を、滑り渡りの油屋與兵衞、賣溜錢は色狂ひ、絞り取れて元も利もかすも殘らぬ油桶、フシ重氣に見せる汗はなつ、中はすゞしき明樽を、擔ふて　フシ宿へ歸りしが、詞ヤ珍らしいお山ぶ、こなたは見知た白稻荷殿、妹が病氣禱の爲か、あの付物が、其方衆の禱でのいたら此與兵衞が首かけ、母者人は藥取にか、者

●引負ひ　負債のこと。

婆でもいかぬ死病いはれぬ氣骨おらるゝ、ヤこれ親仁殿、おかぢが煩ひより何より大事が有る、其當座に母者人には云ふたれど、夫よりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し商賣やめて歸つた、跡の月野崎で、伯父森右衞門樣に行合、わざ〳〵飛脚もやる所、幸ひの便親達へ云ふてくれ、主人の金四ツ寶三貫目餘り引負ひ、此季節にたてねば、切腹か縊首一生の無心、兄太兵衞は義理も法も知らぬ奴、沙汰なしに三貫目調へ、與兵衞に持せて下されと段々の傳言、地二貫目や三貫目で伯父に腹切せて、此方衆の外聞世間が立まい、今日は二日際といふて明日明後日、萬事を差置き今日の中、三貫目調へて渡さつしやれ、あす夜明にかけ出せ

ば、晝までに往て戻ると、たつた今直筆の伯父の文の裏表、憎く可笑く、詞如何な伯父でも、主の金引きあふ樣な侍、腹切らせたがまし、何じやごたくさんに三貫目、三匁もおじやらぬ、お主が商賣去年から一文も見せぬ、算用したら三貫目や四貫目は殘る筈、遣たくは其金やれ、地追付婿を呼び入るゝ大事の娘が病氣、どんな評定する隙が無い、ヤ法印樣お待遠、おかぢが樣體御覽なされ下されと、余のことい ふて取あはず、チ、〳〵、手柄に婚が呼れふば呼で見や、見物せうと親の前に足踏伸し、そろばん枕の胸算用、ヲシぐはらりと違ふて見へにけり、父がそろ〳〵抱起す、おかぢが顏の面やつれ、法印篤と見、詞ム、年はいくつ、十五、

●法藏比丘　天竺の世饒王といふ人、國位を棄て佛門に入る、これを法藏比丘といふ。淨るりに云くは出鱈目なり。

●阿閦佛　足をあしくにかけるまで。

●がいき　咳氣にて風を引きしと。

病付は跡の月十二日、ム、藥師如來の緣日、十五は阿彌陀と、懷中の書籍繰ひろげ指を折り、仔細らしき聲付、　詞そもく、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々、即ち此病は一時も早く婿殿を呼入れ、夫婦になりたいと思ふ氣病に、　地少し外の見入ありと、いふより德兵衞尤も顏、法印圖に乘り、稻荷大明神の使者、白狐の敎、髮筋程も違はぬ禱、加持も藥同前、神佛にもその役く、熱病さまし冷すには、ひえいざんの二十一社、溫むるにはフシ熱田明神、あたまの病は愛宕權現、足の病は阿閦佛、走り人盜人、動かせぬは、フシ不動の鐵縛、がいきを禱るは風の宮、老人達の老病には、白髭明神白髮藥師、若衆の病のナチシ

●かるたのゑの付など解しがたし。　以下相場のこと

●印を結ぶ　眞言宗にて指にて種々の形をなし、呪文を誦へ祈念すること。

禱には、大慈大悲の地藏菩薩、かるたのゑの付祈禱に、麻布の明神釋迦牟尼佛、どう取の禱は四三五六しや大明神、八ツごうなゝの社、　詞別して此法印が得物、錢小判俵物の相場商ひ、上げふと下げふと高下は自由、　地持のお方が價上したい祈りには、强氣に上り高天が原の八百萬神、旗下衆のさがりを禱るは、高きお山を時の間に、麓に下るさがの釋迦、フシやすいの天神、持ちと旗と兩方一度の禱には、高からず安からず中を取て、河内の國高安の大明神、法力のあらたなこと、たなな物取て來る如く、　詞禮物は大方三十兩、何時でも受取、　地いで一禱と錫杖振立いらたか珠數、フシさらりくと押もんだり、　地印をも未だ結ばぬに、病人重た

●急々如律令　修驗者が祈禱をする時唱ふる、呪文の終りに書ける詞。

き顔を上、なふ祈りもいらぬ祈禱もいや、おかちが病癒すには婿取りの談合止てたも、あの與兵衛が若氣ゆる、借錢に責らるゝ、其苦しみが冥土の苦患、是ぞ呵責の責めとなる、ながれ勤の女子なりとも、與兵衛が契約の思ひ人を請出し、嫁にして此所帶を渡してたも、是非に婿を取るならば、おかちが命は有まいぞ、思ひ知たか思ひしれと、あたりをきよろ〳〵睨め廻し、アゝづゝない苦しいと、悶へなわなきそゞろと、父は驚き色違へ、法印少しもおくせず、汝元來何處より來る、疾く去れ〳〵、行者の法力つくべきかと、鈴錫杖をちりゝんがら〳〵、急々如律令と責めかくる、地與兵衛むつくと起き、何を知つて去れ〳〵、どう山伏措お

●そゞろ言　とりとめもなき詞。

れと、落間にがばと突落せば、ヤ、山伏の法を知らぬか、印を見せずば置まじと、駈上りん〳〵鈴りん〳〵、引ずり下せば又駈上る、不動の眞言どたくたぐはつたりばつたりだ、引ずりおろされ山伏も、錫杖がら〳〵命からゞ〳〵歸りけり、地與兵衛親の傍に膝まくり、詞是れ親仁殿、今のそゞろ言耳に入つたか、死んだ人を迷はせ、地獄へ落しても、此與兵衛が好た女房持せ、所帶渡すことは否かならぬか、ヤイ姦しい、あたり隣もあるぞかし、餘程にほたへあがれ、此德兵衛は、死んだ人の跡式とらひでも、五人七人は、ゆるりと過る術しつたれど、年忌命日もとふらひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に、名跡ついで苦勞する、わごりよが好た

お山請出し、女房に持たせ、半年もたゝぬうち、所帶破つて親方の弔ひもならぬ樣には得せまひ、扨は是非婿取て、妹に所帶渡すな、地チ、渡す、ムウよう云ふた道知らずめと立ち上り、俯ぶけに踏のめらし、肩骨脊骨うん〳〵と踏付る、なふ悲しや淺ましい兄樣と、妹が縋れば、おかぢ構ふな、あいつが腹のゐる程存分に蹈ましや〳〵と、身も働かず座も去らず、妹堪へかねあんまりな兄樣、私は何も知らぬ者、死靈のついた顏して、此よに〳〵いふてくれ、其からは商賣も精出し、親達へ孝行盡し、逆らふまいとの誓文立、それが嬉い計りに、病ほうけた此姿で、こはい〳〵恐ろしい死人のまねして嘘吐せ、父樣を踏づ蹴つそれが親

●業さらし　此の世にて種々の惡業をなし、世間に耻を曝すは、前世に犯したる罪の報ひなり。下にある因果さらしといふも同意。

●提婆　＊

孝行か、年よつた父樣目でもまふたら、それは〳〵、聞事じやないぞと、縋り取付泣わめけば、詞いき女郎め、吐すまいと誓文立て〻口がため、地憎いほうげた死靈より此與兵衛といふ生靈の苦しみ、覺へておれと同じくがばと踏伏せたり、病疲れた妹を踏殺すか畜生めと、取付父親はつたと蹴とばし、腹のいる程踏といふたな、是で腹をいるわいと、顏も頭もわかちなく、さん〳〵に踏む最中母立歸り、はつと計り藥投げすて、與兵衛がたぶさ引摑んで、横投にどうとのめらせ乘り懸り、目鼻も云はせぬ握り拳、詞ヤイ業さらしめ提婆め、如何な下人下郎でも、踏の蹴るのはせぬこと、德兵衛殿は誰じや、おのれが親、地今の間に其脛が、腐

つて落ると知らぬか罰あたり、おとましや〳〵、腹の中から盲で生れ、手足かたわな者もあれど、魂ゐは人の魂ゐ、己れが五體何處を不足に生付た、人間の根性何故さげぬ、父親が違ひしゆゑ母の心がひがんで、悪性根入ると云はれまいと、さす手引手に病の種、おのれが心の劍で、母が壽命を フシ 削るわい、 詞 おのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金を引おひしと、よふも〳〵此母をぬく〳〵と瞞したなア、たつた今兄太兵衛に行合、おのれが野崎のあばれゆゑ、伯父は侍一分たゝず、涙人し大坂へ下るとの便、己れが虚言が顯れた、其の時母がづか〳〵と親仁殿へ咄し、跡で知れては扨は親子の言合せと疑はれ、夫婦の義理もかけはてる、

地内でも外でも己れが噂、碌なことは一度も聞かぬ、その度毎に母が身の肉を一寸づゝ、削で取様な因果曝しめ、半時も此内に置くことならぬ、勘當じや出てうせう、出され〳〵とぶつゝくはせつ、たゝく片手に押ぬぐふ、フシ 涙手のひまなかりけり、此與兵衛が爰を出て、どこへ行く所がない、チヽ己れが好たお山が所へ出てうせうと、小腕取て引出す、ナフ兄様追出し、私は此跡取こといや、堪へて進ぜて下されと取付けば、何知つてのいておれ、是れ德兵衛殿、きよろりと見て居て誰れに遠慮、エヽはがいひ、毆き出して吳れんと、拐追取振り上ぐれば、ひらりと外しひつたくり、此拐でわごりよを打と、はた〳〵と打ちつくる、德兵衛飛

かゝり、拐捩とり、つゞけ打に七ツ八ツ、息もさせず擲ちする爲、はつたと睨む目に涙、詞ヤイ木で造り、土をつくねた人形でも、魂入れゝば性根がある、耳あらばよう聞け、此德兵衞は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏れた、腹を借た生みの母に今の樣、脇から見る目も勿體なふて身が震ふ、今打たも德兵衞は打たぬ、先德兵衞殿冥土より、手を出してお打なさるゝと知らぬかやい、おかぢに入婿取といふは跡方もないこと、エ、無念な、妹に名跡繼せては口惜と恥入り、根性も直るかと一思案しての方便、あの子は餘所へ嫁入さする氣遣ひすな、他人どし親子と成るは、よく〳〵他生の重緣と、可愛さは實子一倍、疱瘡したとき

●日親樣　＊
●百日法華　日蓮宗ならぬもの、病などを祈る爲に一時日蓮宗になるをいふ。

日親樣へ願かけ、詞代々の念佛捨て地百日法華に成是程萬面倒見て大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひほつく、己れ今の若盛り、一働きかせぎ、五間口七間口のかど柱の主にと、念願を立てこそ商人なれ、たつた一間まなかの門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏、行さき僞り騙ごと、其根性がつゞいたら門柱は思ひもよらず、獄門柱の主にならふ、親は是が悲しいとわつと叫び、入ければ、地エ、もどかしい德兵衞殿、石に謎かける樣に口でいふて聞く奴か、出てうせ〳〵、うちぐ〳〵ひろがば町中よせて追ひ出すと、又追取て母がつゝはる拐の先、怖いめ知らぬ無法者、町中と云ふにぎよつとして、と胸つきたるけでん顏、

なふ兄様出して我は跡に殘らぬと、縋る妹を押留め、きり〳〵うせう、拐が喰ひたらぬかと、振上こすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、本フシ親子別れの涙川、徳兵衛つく〳〵と後姿を見送りて、わつと叫び聲を上げ、あいつが顔つき背格恰成人するに從ひ、死なれた旦那に生寫、あれあの辻に立たる姿を見るに付け、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして、勿體ない悲いわいのとどうど伏し、人目も恥ず泣聲に、憎い〳〵も母の親、嗜む涙堪へ兼ね、見ぬ顔ながら伸上がり、見れども餘所の繪幟に影も、かくれて　三重

下之卷

●櫛笥　櫛箱のこと。

櫛笥（女用訓蒙圖彙所收）

●梅花の油　匂のよき水油。

●女は髪より形より　流行歌。

●ゆづ妻櫛云々　『古事記』上、伊邪那岐命の黄泉醜女に追はれ給ふ條に、ゆつ妻櫛を引缺きて投棄給ふとあり、是より世俗櫛の齒の折れるを忌み、又投櫛を別れ櫛といふ、伊邪那岐命が伊邪那美命に永訣し給ひし故事に據れるなるべし

吹きなれし、フシ年もひさしの、蓬菖蒲は家ごとに、幟の音のざはめくは　フシ男子持の印かや、地娘計りの手島屋は、亭主は外の掛一まき、内のしまひと小拂ひと油賣たり舞たりに、三人の娘の世話、まあ姉からと、櫛笥取出しときぐしに、色香揉込む梅花の油、歌女は髪より形より、心の垢を漉櫛や、嫁入先は地夫の家里の住かも親の家、かがみの家の家ならで、家といふ物なけれども、誰世に許し定めけん、長地五月五日の一夜を、女の家といふぞかし、身の祝ひ月祝ひ日に、何事なかれ撫つけて、髪引ゆづの妻櫛の齒のハア悲し、一枚折れた、地呆れてとんと投櫛は、別れの櫛とて忌ことをと、口には言はず氣にかゝる、フシ何ぞのつげの

●十をに　疾うになり、七左衛門に對して十をの字を用ひしなるべし。

●打違ひ　※

●新銀五百八十目　新銀は寶永三、同七年及び正德元、同四年等に鑄造したる丁銀をいふ。五百八十目は約十兩なり。

お櫛かや、地掛も十をに七左衛門、大かた集て中戻り、

詞ア、思ひの外早い仕舞、内の拂ひもさらりとしまひ、兩替町の錢屋から、燈油二升梅花壹合、今橋の紙屋から通ひ持て燈油一升、當座帳に付て置く、まあ洗足して早うお休み、明日はとふから禮に出さしやんせ、いや〳〵早う休まれぬ、天滿の池田町へ往ねばならぬ、フウきやうといもう宜わいの、池田町は北の端、近所の掛さへ寄たらば過てのこと、こな人何いやる、節季に寄らぬ金の過て寄た例は無い、今日暮てから渡さふと詞つがふた、つい一走り往てこふ、此うちがひに新銀五百八十目、地財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや、やがて歸ろと立出る、申々　詞そんなら酒一ツ姉、そ

●といし　不明。

●立酒　出立といひて葬式の時、立ながら飲食する故忌むなり。

●夜の衾　寢る時身の上に被ふもの。ふすまは臥裳の轉か又は臥間の物の意かと。

れ爛して進じやと、地立て戸棚へ德利から銚子へうつせば、ア、こりや〳〵　詞爛せいでも大事ない、肴も盃も入らぬ、中がさ添て持て來い、夜が短かい氣がせくそこからつげ、地あいとは云へどとゝしでは、手もとゞかねば立上り、つぐも受るも立酒を、お吉見付てそりや何ぞ、詞忌々しい子供は頑是がないにもせい、立酒のんで誰を野送り、ア、氣味わると、地云はれて夫もちやつと腰掛取直し、掛乞に行門出にはか行きの立酒、此世に殘らぬ〳〵と、祝ふ程なを哀れ世の、フシ永き別れと出て行く、フシ母を見習ふ姉娘、地夜るの衾をしき〳〵に、歌御座よ枕よ、蚊帳の釣手は長けれど、地居かぬ足の短か夜や、地おでんをろくに寢させて、

母様もちとおやすみと云ひければ、詞ヲ、でかしやつた、父様もまだ遲かろ、蚊帳の内から表は母が氣を付る、我身もねゝしや、いへ〳〵、地わたしは眠たうござらぬと、フシ云ひつゝ眠るもおとなしゝ、地此節季越すにこされぬ河内屋與兵衛、手筈の合ぬ古袷、心計りが廣袖に、提たる油の二升入、一しやう差ぬ脇指も、今宵こじりの詰りの分別、勝手知つたる手島屋の、門の口覗く後より、與兵衛殿じやないか、ヲ與兵衛じやが誰じやと振返れば、上町の口人綿屋小兵衛、アこなたは順慶町へ行けば、本天滿町親御の所へと云はるゝ親御へゆけば追出した爰にはいぬと有、貴樣は留主でも判は親仁の判、新銀壹貫目、今宵延ると明日町へ斷

る、ハテ爰な人はいきかたの惡い、手形の表こそ壹貫匁正味は二百目、今夜中に濟せば別條ない約束では無いかいの、されば明日の明六迄に濟ば二百匁、五日の日がによつと出ると壹貫匁、元二百匁を壹貫匁にしてとれば、こつちの德の樣なれど、親仁殿にひごうの金を出さするが笑止さに、こなた贔負でせつくぞや、今夜屹度濟しやゝ、小兵衛こりや念いるゝな、河内屋與兵衛男じやゝ〳〵あてが有る、鷄の鳴く迄には持て行く、眠たくと待てもらを、はて今宵すまして入用なれば、明日又直に貸はいの、地此方も商賣一貫目や二貫目は何時でも、其男氣を見屆けたと、詞で與兵衛が首しめる、フシ綿屋小兵衛は歸りける、地與兵衛見事に請合は

請合しが、一錢のあてもなし、茶屋の拂ひは一寸遁れ、拔差ならぬ此二百匁、有所にはあらふがな、世界は廣し二百匁などは、誰ぞ落しそふな物じやと、後を見れば小提灯、河といふ小文字は、此方の親仁南無三寶と、差たる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付身を忍ぶ、

地 徳兵衞は氣も付ず、手島屋のくゞりそツと明け、七左衞門殿お仕舞かとつゝといれば、是は〳〵徳兵衞樣、

詞 こちのはまだ仕舞ず、天滿の端まで行かれます、私は取紛れお見舞も申さぬに、よふこそ〳〵、此極は與兵衞樣の事に付、いかいお世話でござんしよと、蚊帳より出れば、されば〳〵、

詞 こなたは稚い娘御達の世話、我等は成人の與兵衞に世話を燒く、何れの道にも

子に世話やむは親の役、苦勞共存ぜね共、引付て一所に有中は氣も落付、あの樣な無法者を勘當すれば、やけを起し明日火に入も構はず、謀判似せ判、壹貫匁の銀に十貫匁の手形して、一生の首繋がるゝ例もある事と思ひながら、

地 産の母の追出すを、繼父の我等輕薄らしう留られず、

詞 聞ば順慶町兄が方に居るとやら、もし此あたりへ狼狽て見へましたら、七左衞門殿御夫婦言合せ、父親はがつてん、隨分母に詫言いたしどしやう骨入替、二たび内へ戻る樣に、御異見偏に賴み入、こちの女房お澤が一家一門皆侍、其習はかしか思ひ切ては見返らず、義理がたい生れ付其に似ぬ道樂者、

地 本親の旦那も行儀つよく、義理も情も知つたる人、

二人の子供に心をつくすは皆故旦那への奉公、今與兵衛めを追出し、一生荒ひ詞も聞ぬ親方に、草葉の蔭より恨を受くる、無果報は此徳兵衛一人、推量なされお吉様と、烟草に（フシ）涙まぎらして、むせ返るこそ道理なれ、（詞）ムウ思ひやりました、こちのも追付歸られう逢てお話しなされませ、いや〳〵何方も今宵のこと萬事のお邪魔、是此錢三百女房が目顔を忍び、つい懷へ入て出た、與兵衛めがうせたらば追付暑氣に赴く、さつぱりと肌の物でも買ひおれと、ゆめ〳〵我等の名を出さず、七左殿の心付か、如何なりとも御機轉賴入ると差し出す、（地）後の門口、お吉様お仕舞かと、おとづるゝは女房お澤が聲徳兵衛びつくり、ハツ逢ふては氣

の毒隱れたい、卒爾ながら御免なれと、かくるゝ蚊帳のうしろ影、（詞）是々徳兵衛殿、我女房に隱るゝとは何事と、（地）聲かけられて夫も敗亡、お吉もどまぐれ挨拶なく、そとには與兵衛サア母のかまがわせた、何いはるゝとくるゝの穴、（フシ）耳を付てぞ聞いたる、（地）女房お澤腰打かけ、（詞）エ、徳兵衛殿、七左衛門様もお留主といひ、内のことはそこ〳〵に、何時あはふと儘の向ひどし、互に忙しいきはの夜さ、爰へは何の用が有、悪性する年でもなし、ムウ又與兵衛めが事くやみにか、如何に繼しい子なればとて餘りに義理過た、眞實の母が追出すからは、こなたの名の立ことはない、此三百の錢のらめに遣るのか、つね〳〵に身をひづめ、しま

●かまべし。曲つてなるといふとなる

●ひづめ　火爪にや。吝嗇のとな、お爪に火をともすなどいふ。但しこゝは唯つめるといふことか。

●うぬが三昧　うぬがしたい三昧の暑。三昧はまゝの意。

●先輿跡輿　＊

つしてあいつに遣るは淵へ捨るも同前、　地其あまやかしが皆毒害、此母はさうでない、サア勘當といふ一言口を出るが其限り、紙子着て川へはまらふが、油ぬつて火にくばらふが、うぬが三昧悪人めに氣を奪れ、女房や娘は何になれ、サア〳〵さきへいなしやれと、引立る袖をふりはなし、　詞エ、女房むごいぞやそうで無い、生れ立から親は無い、子が年よつては親と成、親の始は皆人の子、子は親の慈悲で立、親は我子の孝で立、此德兵衛は果報少なく、今生で人は使はずとも、　詞いつでも相果し時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先輿跡輿舁れて、あつぱれ死光りやらふと思ふたに、　地子は有ながらその甲斐なく、無縁

●しやかにない　釋迦荷ひか。行倒れの死人を片付ける法なるべけれど詳ならず。

●殊利槃特の阿房　佛弟子の中に殊利槃特といふ人あり。兄は聰明の人なれども彼は大の愚鈍にて一偈の文を暗記するに四ヶ月かゝり

の手にかゝらふより、いつそ往倒れのしやかになひがましで　フシおじやるはと、又むせ返るぞあはれ成る、　詞ア、與兵衛め計りが子では無い、兄の太兵衛、娘なれどもおかちはこなたの子でないか、　地サア〳〵早ふ先へと押出す、　詞ハア去るなら連立ふこなたもおじやと引立る、　地母の袷の懐中より、板間へぐはらりと落たは何ぞ、粽一わに錢五百、なふ情なや恥しと我身を蔽ひ押隱し聲を上、德兵衛殿眞平許して下され、是は内の掛の寄、與兵衛めに遣りたい計り、私が五百盜んだ、二十年添ふ中隔心隔ての有やうに情けない、　詞たとへあの悪人めお談義に聞樣な、　地殊利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身でなんの憎からふ、

なほ記憶すること能はず、遂に兄の爲に門外に放逐され釋尊に遭ひて佛門に入る事を得たりといふ。

●阿闍世　天竺瓶沙王の子にして母を毘提夫人といふ、調達といふ者の教唆によりて父を殺し母を幽閉し佛を害せんと謀りし惡人。

いかなる惡業惡緣が胎内に宿つて、あの通りと思へば、ふびんさ可愛さは、父親の一倍なれ共、詞母が可愛い顏してはへだてた心に、餘り母があいたてないかうばりが強ふて、いよ〳〵心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、地態と憎い顏してぶつゝたゝいつ追出すの勘當のと、むごふつらふあたりしは繼父のこなたに、可愛がつてもらひたさ、是も女の廻り智惠許て下され德兵衞殿、私に隱してあの錢を遣て下さる心ざし、詞ではけん〳〵と慳貪に云ふたれど、心で三度戴きし、何を隱そふあいつは立派好もする奴、取わけ祝月鬢付元結を調へ、人交りもしたからふ、生れて此かた節句〳〵祝儀缺ぬに此月計り、身祝ひもしてやりたさ、見

苦い此恥辱をさらすも、お吉樣賴んで屆けん爲、地まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば、身を八裂も厭はね共、一生夫の錢金、もじひらなかちがへぬ身が、子ゆへの闇に迷され、盜みして顯れた、恥しゆござると計りにて、わつと叫び入ければ、道理〳〵と夫の歎き、子を持つものは身にこたへ、行末思ふお吉の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとゞ涙を添へにけり、詞ヤ祝日に心もない泣わめき不調法、其錢もお吉樣賴み、與兵衞にやつてお暇申しやと、地いへ共女房涙にくれ、詞こな樣の遣て下さる其深い心ざしに、盜だ錢がなんと遣りよ、ハテ大事無いひらに遣や、地いや許して下されと、夫婦が義理の

フシ遣るかた無さ、お吉も涙とゞめかね、詞アヽお澤様の心推量した遣憎い筈、爰に捨て置しやんせ、我が誰ぞよさそな人に拾はせましよ、アヽ忝ない迚ものお情、此粽も誰ぞよさそな犬に、地喰せて下さんせと、又泣出す兩親の、心隔てぬくゞり戸も、子の不孝より落ちたるくろゝ、開て夫婦は歸りけり、父母の歸るを見て、地心一に打うなづき、脇差拔て懷に、さいたるくゞりさらりと開け、つゝと入より胸もくろゝも落付、詞七左衞門殿は何方へ、定めて掛も寄りましよと、地餘所の方から裏問ける、詞誰かとこそ思ふたれ與兵衞樣か、こな樣は仕合な、後共云はずよい所へござんした、是此錢八百此粽、こな樣へやれと天道から降ま

●男でもくゞでもない　詳ならず。

した、戴かしやんせ、地なんぼ浪人でも極の日の寶、まんがなをろと差出せば、與兵衞ちつ共驚かず、是が親達の合力か、ハテ早合點な追出した親達が、なんのこな樣へ錢金を遣しやんしよ、いや隱さしやるな、先にから門口に蚊に喰れ、長々しい親達の愁歎聞て、涙をこぼしました、ムヽそんなら皆聞てかよう合點參りし、か、他人でさへ目を泣きはらした、此錢一文も仇には成まい、地肌身に付て一稼、お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せうといふ氣が無ければ、男でもくゞでも無い、夫を御背なされたら、天道の罰佛の罰、日本の神々のさか罰が當つて、將來が能ふ有まい、先戴いて と差出せば、詞如何にもくよう合點しました、只今

●奥を聞ふより口開け　古諺。深く理由をたゞすに及ばず、其の人の口氣を察すれば、意おのづから判明すとの意。

●悪性所　悪所といふべきを、悪しやうどころとは念入なり、婦女子などの重言を用ひるを寫したるなり。

より眞人間に成て孝行盡す合點なれ共、肝心お慈悲の錢が足らぬ、といふて親兄には云はれぬ首尾、爰には賣溜掛の寄金も有筈、新でたつた二百匁計り、勘當の許る迄貸て下され、それ〳〵それ、奥を聞ふより口聞け、どこに心が直つた、虚言にも金貸て呉とはいはれぬ義理　世間の義理を缺いても、金借て悪性所の拂ひして、跡から段々行ふでな、成程金は奥の戸棚に、上銀が五百目餘り、錢も有は有ながら、夫の留主に一錢でも貸ことはいかな〳〵、　地いつぞやの野崎參り、着物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら、なふうとましや〳〵、歸られぬ内其錢持て、早ういんで下さんせと、いふ程傍へにじり寄、

詞不義に成て貸て下され、ハテならぬと云ふにくどに〳〵、くどふ云ふまい貸て下され、イヤ女子と思ふて弄しやると、聲立て叫くぞや、ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が、心根に浸こんで悲い物、弄るの侮るのといふ所へ行くことか、何を匿しませう、跡の月の二十日に、親仁の謀判して上銀二百匁、今晩切に借りました、ヤまあ跡を聞て下され、手形の表は上銀壹貫匁、借た金は二百匁、　地明日になれば、手形の通り、壹貫匁で返す約束、夫よりも悲いは親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先様からことはる筈、今に成て此金の才覺、泣ても笑ふても叶はぬこと、自害して死ふと覺悟し、是懐に此脇差さしは差いて出たれども、

●奥を聞ふより口聞け　古諺。深く理由をたゞすに及ばず、其の人の口氣を察すれば、意おのづから判明すとの意。

●悪性所　悪所といふべきを、悪しやうどころとは念入なり、婦女子などの重言を用ひるを寓したるなり。

より眞人間に成て孝行盡す合點なれ共、肝心お慈悲の錢が足らぬ、といふて親兄には云はれぬ首尾、爰には賣溜掛の寄金も有筈、新でたつた二百匁計り、勘當の許る迄貸て下され、それ〳〵それ、奥を聞ふより口聞け、どこに心が直つた、虚言にも金貸て呉とはいはれぬ義理　世間の義理を缺いても、金借て悪性所の拂ひして、跡から段々行ふでな、成程金は奥の戸棚に、上銀が五百目餘り、錢も有は有ながら、夫の留主に一錢でも貸ことはいかな〳〵、　地いつぞやの野崎參り、着物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら、なふうとましや〳〵、歸られぬ内其錢持て、早ういんで下さんせと、いふ程傍へにじり寄、

詞不義に成て貸て下され、ハテならぬと云ふにくどく〳〵、くどふ云ふまい貸て下され、イヤ女子と思ふて弄しやると、聲立て叫くぞや、ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が、心根に浸こんで悲い物、弄るの侮るのといふ所へ行くことか、何を匿しませう、跡の月の二十日に、親仁の謀判して上銀二百匁、今晩切に借りまして、ヤまあ跡を聞て下され、手形の表は上銀壹貫匁、借た金は二百匁、　地明日になれば、手形の通り、壹貫匁で返す約束、夫よりも悲いは親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先様からことはる筈、今に成て此金の才覺、泣ても笑ふても叶はぬこと、自害して死ふと覺悟し、是懐に此脇差さしは差いて出たれども、

●まが〳〵しい　忌はしき事なれど、こゝはしら〳〵しといふ意。

只今兩親の歎き御不便がりを聞ては、死で此金仁親の難義に掛ること、不孝のぬり上身上の破滅、思ひ廻せば死るにも死なれず、生ては居れず、詮方なさに見掛ての御無心ぞや、無ければ是非もなし有金、たつた二百匁で、與兵衛が命を繼で下さるゝ御恩德、黄泉の底迄忘れうかお吉樣、どうぞ貸て下されといふ目の色も誠らしく、そうした事もと思ひながら、兼ての僞り是も又、其手よと思ひ返して、詞フウ、まが〳〵しいあの虚言はいの、まだ尾鰭付ていはしやんせ、ならぬと云ふてはきつうならぬ、是程男の冥利に掛け、誓言立ても成ませぬか、ハアはあ何とせう借ますまいと、地いふより心の一分別、詞そんなら此樽に油二升取奉

て下さりませ、地夫は互の商ひ内貸借せいでは世がたゝぬ、成程つめてと賣場にかゝり、消る命の燈火は、油量るも夢の間と、知らで升取柄杓取る、後に與兵衛が邪見の刀、拔て待ども見ず知らず、詞祝ふて節句もお仕舞なされ、こちの人共割入て相談、有金なれば役に立まい物でなし、地五十年六十年の夫婦の中も、儘にならぬは女のならひ、必らず私を怨んでばし下さるなといふ内に、燈油に映る刄の光お吉びつくり、詞今のは何ぞ與兵衛樣、地イヤ何でも御座らぬと、脇差後に押隱す、それ〳〵屹度目もすはつて、なふ恐ろしい顔色、其右の手爰へ出さしやんせ、地おつと脇差持かへて是見さしやれ、詞何も無い〳〵と地云へ共お吉

身もわな〳〵、　詞　アヽこな様は小氣味の悪い、必らず傍へ寄まいと、　地　跡退りして寄る門の口、明て逃んと氣を配れど、　詞　ハテきよろ〳〵何おそろしいと　地　付廻し〳〵出合へとわめく一聲、二聲待ず飛懸り取て引絞め、音ぼね立つるな女めと、笛の鎖をぐつと刺す、刺〻れて惱亂手足をもがき、　詞　そんなら聲立まい、今死んでは年はもいかぬ、三人の子が流浪する、其が可愛ひ死とも無い、金も入る程持て御座れ、助けて下されと與兵衛様、チヽ、死に共ない筈尤も〳〵、こなたの娘が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい、金拂ふて男立ねばならぬ、諦らめて死んで下され、口で申せば人が聞く、心でお念佛南無阿彌陀、　地　南無阿彌陀佛

●鋸の山　等活地獄の中にあり、其の刃の利ことは髮筋卯の毛を吹きかけてもたまらずして微塵になるといふ。

と引寄て、右手より左手のふと腹へ、刺てはゑぐり拔ては切る、お吉を迎ひの冥土の夜風、はためく門の幟の音、あおちに賣場の火も消えて、庭も心も闇みに打まく油流るゝ血、踏のめらかし踏すべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振立て、お吉が身をさく劍の山、目前油の地獄の苦痛、軒の菖蒲のさしもげに、ちゞの病はよくれ共、過去の業病遁れえぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて　三重　いき絶たり、　地　日比の强き死顔見て、ぞつと我から心もおくれ、膝節がたくがたつく胸を押しさげ〳〵、さげたる鍵を追取て、窺けば蚊帳の打ちとけて、寢たる子供の顏付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがちつく鍵の音、頭の上に

●旗檀の木橋　淀屋橋の上に、昔し栴檀の木橋あり。中の島の鰻先より船場に架する橋。

●おしてるや　難波の枕詞。

●廓四筋　新町廓は佐渡屋町、瓢簞町、越後町、吉原町の四筋より成るゆゑ四筋といふ。

●よれの風俗揚屋のかゝり　特に揚屋のとゝいへるは、新町の揚屋は諸國無双と稱せられたればなり。古諺に「京島原の女郎に江戸吉原の張を持たせ長崎丸山の衣裳を着せて大坂新町の揚屋にて遊びたし」と。いづれも諸國に冠たるものを擧げしなり。

●紋日が三日足らぬ　新町は殊に

鳴雷の、落かゝるかと肝にこたへ、戸棚にひつたり引出すうちがい、上銀五百八十匁、宵に聞たる心當、ねぢ込ねぢ込ふところの、重さよ足もおもくれて、薄氷を履火焔踏、此脇差は栴檀の木の橋から川へ、沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の付時と、内をぬけ出で一さんに、足に任せて　三重〳〵おしてるや、フシ浪華の春は　地京にまけ、京は浪華の景色より、おとるみな月なつかぐら、本フシ遊廓四筋は四季共に、散こと知らぬ花擶、　地よれの風俗揚屋のかかり、小チクリ富士も〳〵及ばぬ戀の山、第一日本の名所なり、一年三百六十日、紋日が三日足らぬとて、くつわはなげく、女郎は其程客に厄介を、へんがへに行く客も有、好んで賴み賴ま

紋日の多き所なれば、しかいへるなるべし。「みをつくし」に擧げたる紋日の數のみにても、一年の内約百五十日の紋日あり。

●女方　女形か女房か、原文の意詳ならず。

●位を問ふ　太夫か天神か鹿子位か端かと、女郎の位を一々問ふは野暮の骨頂にして、田舍客の常となり。

●大鼓過ぎ　限りの大鼓後のこと。

●手もめ　手盛りといふに同じ。

●めつきやく、いきやく　たゞ客といふ字の音を持ち來りしのみ。

●衆目の視るところ與兵衛に指す云々　「大學」に「十目所レ視、十手所レ指、其嚴乎」とあり、十は多きことをいへれば、こゝに解り易く衆目

る丶、客は一際いかつげに、フシ籠を飛する揚屋客、扇で忍ぶ茶屋の客、一座あそびは女方めく、肩で風切るからぞめき、位を問ふは田舍客、寢て物語る馴染客、太皷過てと囁くは、女郎の手もめの振舞客、親おや方の持客有り、我身上のめつきやく有、いきやく交り行通ふ、道の間をしばらくも、口たゞ置くは恥らしく、役者物まね地の物まね、小歌淨璃瑠口てんがう、西口東口々に、行くも歸るもさはり無き、夕べ〳〵の大寄は、フシ豐なる世の勳なり、　地されば山本森右衞門、與兵衛が身持の知せに驚き、暫く主人に暇請ひ大阪へ立越しが、女殺て金取しも、慥に夫とは知れね共、衆目の視る所與兵衛に指さす身の放埒、若やと詮議も寄付

としたるなり。いかに包み隠しても其の善惡の蔽ふべからざるを斯くの如し、畏るべきなりと。

●そんじよ其所　＊

ねば、先き〳〵尋ね廓の内、東口にて尋しに、そんじよ其處とは敎へしかど、何れも同局のかゝり、爰や備前屋、是や敎し備前屋かと、見まがひたゝずみ居る折ふし、手にかさ高な文持て、西の方からくる禿、是々物問ふ　詞備前屋と申す傾城屋はいづかた、其御内に松風殿と申す傾城、御存じならば敎へてたべ、我等當所不知案内、賴入とぞかたくろし、フウしさいらしい物の言ひ樣、備前屋は此家、西の端に戸のさいた、客の有る局が松風樣でござんす、コレお侍樣、左の足あげさんせ、ソレ〳〵又右の足も上さんせ、ヲヽよふ上さんしたいかい世話のと、地弄つてびんしやん行過る、所柄とて人に馴れ、氣輕い奴と打笑ひ、敎し局に立寄

れば、内に火影は有ながら、戸口ひつしと立詰たり、扨こそ客は與兵衛に極る、出るを捕へ逢はん物と、待間程なく戸を開さ、編笠かつぎ立出る、すかさずむずとひん抱かゆる、女郎も次いてこりや誰ぞ、卒爾せまいと引別る、詞苦しからず卒爾で無い、己れ與兵衛め匿れたらば逢ふまいかと、笠引ちぎり顏見合せ、ヤアこりや與兵衛で無い人違、まつぴら〳〵面目なやと腰折て手をすれば、地きやつも忍びの戀やらん、うなづく計り顏かくし、フシ東の方へ走り行、詞河内屋與兵衛に深い中と音に聞く松風殿、昨日にも今日にも與兵衛は爰元へ參らずか、氣遣の無い用事有て尋る者、隱されては彼が爲ならず、サアまつ直が聞たい〳〵、まち

つと先に見へまして、是から直に曾根崎へ、叶はぬ用とてござりんした、何じや曾根崎へ、南無三寶遲つた、拙者も跡から參らずば成まい、次手にも一つ尋ませう、五月の節句前か、後か、六月へ入ては漸々六日、其間に爰元で金銀の拂ひ、金澤山に使ふたとはござらぬか、是も隱さずお知らせなされ、どうござんすぞ金のことは存じやせぬ、やり手にお問なさりんせと、地いひすて局についと入る、詞是は我等不調法、地よしそれとても與兵衛に逢へば知るゝこと、道も知つたる曾根崎へ、たつた一飛一走と、尻三のづ迄ひつからげ、もみにもふでぞ　三重　歌君を待夜はよやよや、西も東も南もいやよ、とかく待夜は北がよい、ッシさきにも待は

●三のづ　＊

●君を待夜は　「松の落葉」卷七、「君を待夜は、のほんほんに〳〵さ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜は北がよい、のほんほんにほんにさ」。此の歌を引けり。

●幸左衛門　竹島幸左衛門のこと。

●文藏　未詳。

●べり立つ　しやべり立るの畧。

待ながら、こちからいたと行通ふ、長地道の犬さへ見知る程、うつゝ拔せし河内屋與兵衛、小菊にあふせを田面のかりよ、新町の花を見棄て蜆川、爰の花屋にたどり寄る、後家のお龜出迎ひ、たま〳〵見へるお客にこそ、よふお出がさうあうなれ、與兵衛樣は爰が家、ちと風變り御出を止て、詞戻らしやんしたか、小菊樣呼びましや、内は上下座敷もつまる、濱の床几で大く酒盛、きり〳〵と呑かけましよ、地小菊樣サア爰へ行燈に油さしや、詞油の次手に油屋の女房殺、酒屋に仕替て幸左衛門がするげな、殺手は文藏憎くいげな、與兵衛樣まだ見ずか、小菊樣連ましてちとお出、地やれお盃持てこいと、ッシたつた獨でべり立る、詞後家たしな

めちと人にも物言せい、生れて與兵衛こんなむさい床几の上で、酒飲だ事なけれど今日は許す、東隣借り足して、與兵衛が座敷分に一つこしらや、材木大工諸色諸入め見事に我等仕つる、きつい物か〳〵、エげびた

地 此蒲鉾の薄い切様はと、潜上たら〴〵暴酒、チクリしばらく〳〵時をぞ移しける、

詞 與兵衛爰に居るか、知らす事が有つて來たと、

地 刷毛の彌五郎床几に腰かけ、

詞 我を侍がさがすぞよ、ヤしてそりやどんな侍がと、

地 胸にぎつくり横たはるも、心に包む悪事の塊、俄に顚倒うろ〳〵眼、

詞 ハテきよろ〳〵すないやい、昨日から兄が所へ來て居る侍じやとやい、ア、夫で落付た高槻の伯父森右衛門、

地 逢ては難義爰へ尋て來ふもし

れぬ、早ふはづして逢ひとも無いと、思へど急にも立れねば、何がなしほにと見廻し〳〵、

詞 アヽ、思ひ出した、新町に紙入忘れて來た、中にうめく程金入て置た、つい一走り取てこふ、

地 刷毛も來いと立出る小菊引留、

詞 アざは〳〵と何じやの、有所の知れた紙入明日なとらんせ、イヤそうで無い〳〵、ふところが重とふ無ければづんと遊ぶ心がせぬと、

地 袖引放し二人連、根から忘れぬ紙入の、フシからぜい吐て急ぎける、

地 熟い茶四五服飲程の、間もすかさず森右衛門、行燈目的に花屋の門口、花車に逢ふ爰へ〳〵と呼出し、河内屋與兵衛が跡追て參つた、二階に居るか下座敷か、

地 罷通るとつヽと入る、

詞 是々申し、新町に紙入忘れたとて、

●變生男子の願を立て　お吉が非業の最期を遂げたるより、來世は男子と生るゝ事を立願したるなり

●願以此功德云々　淨土宗眞言宗等にて讀經の後に讀む偈文。

たつた今お歸り、何だ歸た、まだ梅田橋越か越さずか、是はしたり又跡へん、然らば明日にも與兵衛が參次第、酒でも飲せ爰に留置き、早々本天滿町河内屋德兵衛方迄屹度知らせ、只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄り、吟味致せば五月四日の夜、大金三兩錢八百請取たと有、爰元へは何程拂つた、隱しては其方が爲にならぬ、直すぐに言へ〳〵、私方へも五月四日の夜に入て、大金三兩錢壹貫文、シテ其夜は何を着て參つた、廣袖の木綿袷、色は慥花色か、しつかりとは覺をせぬ、ムウよい〳〵、はいれ〳〵と　地言ひすてゝ、元來し道を引返し又新町へと　三重〳〵和讃變生男子の願を立、女人成佛誓たり、願以此功德平等施一切、同發菩提心往生安樂

●釋妙意　お吉の戒名。

●逮夜　忌日の前夜。

●不慮の横死　不慮は思ひはからざると、横死は殺されたり又は天災等にて非業の死を遂しをいふ。

●唱名　佛名を唱ふると。念佛に同し。

國、詞釋の妙意、三十五日お逮夜の心ざし、お同行衆寄集り　フシ勤も既に終りける、中にも同行中の老體、帳紙屋五郎九郎、詞昨日今日の樣に思ひしが、早三十五日の逮夜に罷成、二十七を一期として不慮の横死、地平生の心立人に優れ、上人の御恩德報謝の心も深かりし、此世こそ劍難の苦はありとも、未來は諸々の業苦を除き、本願往生疑ひはよも有まじ、詞此御さいそくに心驚き、彌一遍の唱名も悅んでお勤なされ、必ず歎せらるな七左殿、殺手も其内知ませう、地たゞ御息女の介抱が第一、先き立つ人も夫をこそ滿足と、しめせば有がた涙ぐみ、左樣とも〳〵、お吉がことは思ひ忘れ是も如來のお蔭と、信心堅固に悅びを重ね、地行

住座臥に唱名は缺かしませぬ、去りながら乙のおでんめは二つ子、乳が無ふてはと不便に存じ、死だ翌日金付て餘所へもらわします、姉はよふいひ聞せたれば合點して、香花の切ぬ樣に佛壇について計りいますが、なふ中娘めが朝から晩迄、母樣〳〵といふて泣居ります、是には困果ましたと、ちやつと後の壁向て、聲を呑だる啜泣、尤もさこそと同行衆も、濡さぬ袖は無りけり、折節居間の桁梁、通る鼠の怪しからず、蹴立蹴かくる煤埃、故紙をちらりと蹴落して、鼠の荒は靜りぬ、詞ソレ何やら落た七左殿、誠に是はと取上げ見れば、半切紙に一ツがぎ、十匁壹分五厘、野崎の割り付、地五月三日と計りにて、誰から誰への名宛もなく、色

こそ變れ所々血に染つたる書出し一通、不思議の物と手と取廻し、是は誰やら見た手じやはいの、我等もどうやら見た手の風、ア、河内屋の與兵衛〳〵、地それよ〳〵と四五人の、口も與兵衛に極れば、思ひ出して七左衛門、誠に死だ亡者が物語、四月十一日我等夫婦、野崎參致せし日、皆朱の善兵衛、刷毛の彌五郎、河内屋與兵衛三人連で參りしと咄せしが、其割付に極た、お吉を殺手も大方是で知ました、地三十五日の逮夜に當り、鼠が是を落すといふも、亡者が知せに疑ひ無い、是も佛の御恩德、ア、南無阿彌陀とひれ伏て、フシ悅ぶ心ぞ道理なる、地氣味惡乍らをり〳〵の、訪音づれも我したと、人に言れじ覺られじと、一倍大柄そらさぬ

顔、詞河内屋の與兵衛でやすとつゝと入、つい三十五日の逮夜に成りましたの、殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬、したが追付地知れましよと、我と口からむかふの吉左右、七左衛門尻ひつからげ棒追取、詞ヤイ與兵衛、女房お吉を殺したな、おのれは爰へ縛れに來たか、遁れはないと棒振上る、ア、七左衛門聊爾するな、シテ己が殺した其證據は、いふな〳〵、野崎參りの割付、十夘一分五りんといふ書付、所々に血も付て己が手に紛い無い、此外に證據が入るか、同行衆捕へて下されと、地つかみつかん其勢ひ、南無三寶現れしと、突上る胸の動氣じつと押へて苦笑、詞此廣い世間幾人も似た手が有まい物でなし、野崎參の入用はおれ

●大り　朝廷のことを内裡といへるなるべし。幕府の奉行なれども憚りて檢非違候使別當といへるなり。

がもめ、割付も何にも知らぬ、よい年をして馬鹿ひろぐな、己等迄も同じ樣に立騒いで何としをる、地まづこうすると攫み付を取て投げ、寄ば蹴倒し踏こかし、一世一度の力の出し場、棒ねぢたくり一振ふればわつと逃る、隙を伺ひ逃んとすれば、ソリヤ逃すなと追取まく、小庭の内を追つ返しつ、二三ど四五ど隙も見合せ、ぐらりぐはらりと逃出る、門の前に兩三人どつこい捕たと、胸がい攫んで捻すゆれば、檢非違使の別當大りの廳の官人なり、跡に續いて伯父森右衛門聲をかけ、詞最前より各表に立玉ひ、家内の一々殘らず聞屆けられしぞ、必ず未練に陳ずるな、エ、是非も無やナ、世間の風説、十人が九人おのれを名ざす、聞く度に此

伯父が心の中を推量せよ、地事顯れぬ先遠國へも落すか、さなくば自害をすゝめ、恥を隱しくれんと、新町曾根崎行く先〳〵を尋ても、跡へ廻り跡へまはり、出合ぬは已が運の極め、詞それ太兵衞其袷是へ〳〵、則ち五月四日の夜着し出たる已が袷、所々のきは付きこはゞり、大りの廳より御不審、地只今證跡の實否、已が命生死二ツの境成るぞ、誰か有る酒々あつと云ふよりちろり燗鍋、手々に引提げさら〳〵さつとこぼしかけ、かゝる甥持ち弟持心を碎く涙の色、酒鹽變じて紅の血汐、伯父甥顏を見合て、あつとより外詞なく、呆れ果たる計りなり、與兵衞覺悟の大音上、詞一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盜といふ事遂にせず、茶

●果は千日　此の一語、與兵衞が千日の刑場に屍を曝したるをいふ。

屋傾城屋の拂は、一年半年遲なはるも苦にならず、新銀壹貫匁の手形借り一夜過れば親の難義、不孝の科勿體なしと、思ふ計りに眼付、人を殺せば人の歎き、人の難義といふことに、ふつゝと眼付かざりし、思へば二十年來の不孝無法の惡業が、魔王と成て與兵衞が一心の眼を眩まし、お吉殿殺し金を取しは河內屋與兵衞、讎も敵も一ツ彼岸、南無阿彌陀佛と云はせもあへず、取て引つ數繩三寸に縛上れば、早や町中が駈付け〳〵、すぐに引立引出す、果は千日千人聞き、萬人聞けば十萬人、殘る方なく世のかゞみ、傳へて君が長き世に、清からぬ名や殘すらん

心中宵庚申

解題

此の淨瑠璃は『外題年鑑』に、享保七年四月廿二日初日の由を記せり。作者近近門左衞門此の時七十歳、是より後二年享保九年十一月廿二日七十二歳にして歿し、其の間に世話物の作なければ、門左衞門が世話淨瑠璃の筆納めなり。其の實説は淨瑠璃にあるとは稍異なる所あり。即ちお千代の姑の意地の惡き婆は、實際は蟲も殺さぬ佛性にて、これに反し舅伊右衞門は年にも耻ぢぬ好色漢にて、下女雇女に手を附け評判あしき男なれば、嫁お千代に對しても猥がはしきこと度々ありてお千代は體よくはね付けしより、伊衞右門はこれを含みて半兵衞夫婦を敵の如く思ひ、家内に風波の絶ゆる時なし。然るに半兵衞の不在中、伊右衞門は懲りもせでお千代を口説くこと切りなりしかば、お千代も堪忍しかねてこれを姑に訴へ保護を乞ひぬ。姑は氣の毒に思ひたれど、事を荒立世間へ洩れ聞えては外聞惡るしと穩便

に事を計はんとし、お千代をば一時常盤町なる伯母が許へ預けぬ。附近のものは不審に思ひ、其の理由を尋ぬれは、姑は實を語らず、たゞ家風に合はざるより預けたりといひ拵へおけり。其のうち半兵衛歸宅しければ、嫁も以前の如く呼戻したれど、伊右衛門はお千代が自分に對し難面くするのみならず、姑にまで訴へて我に耻を與へたるを意恨に思ひ、ます〳〵夫婦のものに辛く當り、遂に種々の口實を設けて夫婦離別をなすに至りしかば、二人は自殺し、世間にてはひたすらに姑が苛り殺したる如く噂せり。淨瑠璃に姑を惡婆に作り、伊右衛門を善人としたるは、此の噂に基きしものなるべく、全く正邪を轉倒するに至れり。

此の心中は最初豐竹座にて、紀海音新作し『心中二つ腹帶』と外題し、享保七年四月六日より興行せし所、大當りなりしより、竹本座にても同月廿二日より同じ心中を門左衛門作にて『宵庚申』と外題し、兩座競爭にて非常の大入なりき。但し此の淨瑠璃は、豐竹の勝利にて竹本は負けなりしといふ。萬象亭の『反古籠』といふ隨筆に此の事を記したり。曰く

近松は西の作者、海音は東の作者なれば、敵同士の如く立別れ、新淨瑠璃の趣向な

ど一言半句を通ずべきにあらず、然るに西の宵庚申と心中二つ腹帶とを見ればいづれも八百屋の女房は善人なるを惡人、仁右衛門は惡人なるを後生願ひに振替て書たること、孔明と周瑜が手の內に伏といふ字を書たるが如し、蓬田辨二云（安永頃の人淨るり作者）海音勝利にて豐竹座大當なりければ、芝居より千日（法善寺のこと）へ石碑を建て供養しければ、彼の八百屋にて大に怒り、夜分石碑を芝居木戸前へ建させるを、翌朝表方の者取退んと云けるを、却て景氣になるべき故其の儘に置べしと、座本越前の差圖に依て取のけずして建置ける、此事どつと評判になり大入なりしと。

八百屋の老婆を惡人に拵へたることは前に述べたる世間の取沙汰に依りたるものなるべく、遠州濱松の武士の子といふ事も、死狀の立派なるより當時いひ觸らしたる事なるべし。年齡は二作とも半兵衛は三十八とあれど、お千代は『二腹帶』に二十四『宵庚申』に二十七とあり、これ等は當時其の噂の區々なりしを窺ふに足るべし。又情死の年月については、四月五日宵庚申の夜なる事はいふまでもなけれど、享保七年四月六日朝發見したる出來事を、豐竹座にて其の日より興行したりといふは

受け取れず、或は其の事あるや直ちに心中淨るりの看版でも掲げ、なほ餘日ありて興行を始めしものか頗る疑はし。『脚色餘錄』(初、中)には左の如くあり。

谷町寺町大佛勸化所の門前にて心中せしは、丑年四月五日宵庚申の夜、六日の朝の事なり、寅年四月六日より豐竹座紀海音作にて心中二腹帶を出す、同四月二十二日より竹本座近松作にて宵庚申を出す然れば同年四月に淨るり出て十六日違ひ竹豐兩座張合に出せし也。

これによりて見れば、享保六丑年の出來事を、一年後即ち同七寅年の庚申の日に當込みて、豐竹にて出しゝ淨るりが大當りなりしより、竹本にても其の二十二日より同じ心中を出したるものゝ如し。豐竹座にて既に出したるものを、竹本にて出すとは近松に不似合なる事なれども、これは東の大入りを羨みて、座元が作者に强ひたるものと見るべし。さればにや此の淨るり一向に振はず、流石の近松も立後れては勝目なきも亦已を得ざるなり。但し此の淨るりは、竹豐兩座にて競爭し、いたく評判となりしかば、後ち改作外題替等數番あり、又歌舞伎狂言にも仕組みて、お千代半兵衛の名は、洽く人口に膾炙するに至れり。

●花のお江戸へ云々　初段は八百屋半兵衛が亡父の十七回忌を營まんが爲、遠州濱松へ暇省したる所なれば、「花のお江戸へ六十里、梅の難波へ六十里」と書きたるなり。

●御在國　大名は隔年江戸に參覲す、此の年は淺山殿濱松へ暇り在國せらるゝをいふ。

●弓馬　兵馬といふも同じ。武備のこと。

●日まぜ　日交にて一日置き即ち隔日のこと。

●鷹狩　鷹を野に放ちて鳥類を捕ふるをいふ。封建時代の風習として、放鷹山獵等は武を練るの一助としたるなり。

●弓頭　弓鐵砲いづれも組あり、坂部は其の弓組の頭なり。

●野出頭　弓頭なれば殿の郊外へ

心中宵庚申

上之卷

近松門左衛門作

地花のお江戸へ六十里、梅の難波へ六十里、百二十里の相の宿、都離れて遠江、濱松の一城主淺山殿の御在國、町家〳〵の賑ひ商ひにたゆみなく、武士は弓馬に怠らず、日まぜ〳〵のお鷹狩、上一人の勵より、フシ犬も油斷はならざりし、お家相傳の弓頭、坂部鄕左衛門六十の雛の夜晝なく、お側去ずの野出頭、今日も鷹野のお供にて、留守の邸は大手の見付、お鷹歸りの御入とて、晝當場より先案内給人若黨お出入の町人迄、降

出らるゝ時は、いつも召連らるゝ、お氣に入りとなり。

●大手の見附　大手は城の前門にして、見附は城門にある番兵の見張所なり。

●書當場　書其場のこと。

●臺子

●茶道　『男重寶記』に曰く、「茶に德あるを茶道といふ、しかれども今は樂とするものをさして茶道といふ、但し茶をたつる道を知りたる人といふ義なるべし、諸大名いづれも此の役あり」。

●門の盛砂　殿のお成りなれば、門には盛砂し幕目を新たにして歡迎の意を表するをいふ。

●板元　板場といふに同じ。料理番をいふ。

●おちた肴　死んだ肴のこと。殿には鮮魚をさし上るより、惡い死んだ魚などは吟味し除るなり。

●目出たいな三枚におろし　目出たいといふに鯛をかけ、三枚に下すは料理をするに當り、先づ兩面の身を骨より取去り、三枚に分つこと。

●南京の皿蒔繪の家具　南京は支那渡をいふ。たゞ寞然と膳椀家具の結構なるをいへり。

つて湧いたる忙しさ、御成座敷のかへ疊、床に掛物臺子の埃はいつ拭ひつ、お庭の掃除どつさ草引薄茶挽、茶道は引木にもまるゝ、實に誠忘れたりとよ、門の盛砂小者は箒にもまるゝ、臺所の板元には、青物の淵魚鳥の山、獻立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人、こりや目出鯛を三枚におろし、山葵は八百屋が請取り、南京の皿蒔繪の家具、善盡くしたる饗應なり、地組下の二ばんばへ、金田甚藏岡軍右衞門大橋逸平、打揃ふたる血氣ざかり、立ちかけのんこのあたまがち、裾はおるすの勝手見廻、詞いづれも御苦勞〳〵、今日はお鷹野より直にお腰掛けらるゝとな、急なお成で嘸取込み、お料理組もう、出來たか早し〳〵、我々も幸ひ非

●二ばんばへ　次男のこと。惣領はそれ〳〵家督を繼ぐ。次男以下は弓鉄砲の組下となり、祿を得て一家を立るをいふ。

●立かけのんこの頭がち　立かけは立かけ元結のことなるべし。のんこは髮の風なり、「抑亭筆記」卷四、のんこについての證言を集めたるうち「後室色縮緬」に「絲びん作りのんこのあたま云々」とあり。伊達なる結ひ風なるべし。即ち家中の次男達が、頭ばかり立派にしてなるをいふ。

●輕いお身持　お手輕主義なり。

●壁に馬　壁に馬乘りかけるといふ俚諺あり、出し拔けの譬へ。

●手筒　不調法といふに同じ。

●去りながら人に心を盡させ云々　この次に男色の立引ある前提なり。金田等が日頃小七郎を口説けども少しも應ぜざるを怨みていふ詞なり。

番、用あらば遠慮無用と挨拶口々、地座敷口より小姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露うく前髮ざかりする〳〵と立出で、詞是は〳〵日比の御懇意、お揃ひなされての御出で、主人鄕左衞門嘸滿足、唯今の殿樣前代と違ひ、何角に付けて輕いお身持、壁に馬乘りかけし今日のお成、主人は御供我々が當惑、掃除等もそこ〳〵、書院の筆架かざり石、活花も手筒ながら、間に合はするも奉公、地御内見の上御直し下されと、詞も風も出過ぎざる、若衆とぬか味噌のフシ味は屋敷に極まりし、詞金田甚藏岡大橋、何か〳〵君のお手際僻事が有らふか、去りながら人に心を盡くさせ、無下ない心が一ツの疵と、地目面も明かぬ取込に、額で睨み

●衣服の綺羅　衣服の立派にしてきらびやかなること。

●お見舞過分　過分は文字通り分に過ぎたるもにて、喜悦の意を表したる詞。お見舞有難しといふに同じ。

●岩松村岩水寺　眞宗。

●一こぶし　一拳にて放鷹の通語なるべし。

●あらない　無用の意。國訛りなり。

●たまげ　魂消るの約にて肝を潰すといふに同じ。

つ袖引きつ、手の中つまむも一むかし、古い仕掛が田舎なり、坂部郷左衛門衣服の綺羅も世につれて、戒むるとはなけれ共、上に從ふ木綿羽織に紺股引、鷹野出立のりゝしげに、すたすたと立歸り、詞家來共掃除は出來たか、ヤ、いづれもお見舞過分、いやさ〳〵年はよるまい物、岩松村岩水寺の門前よりお暇受け、たつた一飛と思へども、氣情も足も心計り、去り乍ら殿には今一こぶし遊ばしお入り有るぞ、急く事はあらない、地先お獻立を一見と長々と書付けたる、半讀みさし大きにたまげ是やなんじや、詞殿の御膳は一汁三菜と先達て云ひ越す所、三汁九菜の魚鳥づくし、身が身上を板元で切叩くか、此獻立は誰が指圖と、以ての

●靱油掛町　今の西區靱南通の古名。

●五歳の時云々　これは半兵衛が大坂へ出し歳にして、八百屋の養子となりしは、下卷半兵衛の詞に「二十二の年から御面倒に預り」の詞あれば、それまでは商家に奉公したるものなるべし。「二ツ腹帶」にては、濱松にて山脇半六と稱し既に武藝一通り修めたる者とせり。

●山脇三右衛門　半兵衛の實父にて十七年前死去。「二ツ腹帶」にては父を十藏と稱しなほ存命のもに作れり。但し山脇の本姓は二作とも同じ、事實に據りしなるべし。

外の不機嫌に、フシ頭も光りちらかせり、小七郎しとやかに、詞憚りながら此義はお侍中の差圖ならず、二三日以前より、お長屋に逗留致し罷りある、大阪の住人靭、油掛町八百屋半兵衛と申して、元は御當地遠州生れ、私とは腹がはりの兄、樣子あつて五歳の時大阪へ立ちこへ、町人に奉公し、商人の養子と成り、今の親は八百屋伊右衛門、實父山脇三左衛門は、私が生れし年相果て、當年十七年親の墓への年忌まゐり、私事も懷しく、召使はるゝ御主人へ御禮も申したしと、逗留致せし兄半兵衛、商賣は八百屋殊更料理きゝ、幸ひと今日の御獻立を致させし不調法は私、地お目出度き折から御機嫌を直され、兄へもお逢ひ下されかしと恐れ

●朝鮮人の饗應　享保四年朝鮮人來朝。九月四日大坂着岸の時、御堂を旅館に宛てしとをいふ。

●七五三五々三　饗膳の方式なり。

●山陰中納言　禁中料理の作法を司る家。

入つたるあやまりに、主人の顔も打ちとくれば、是半兵衛殿能き折のお目見へ、お獻立も仕直すため早う〳〵と呼立つる、聲を力に兄半兵衛魂は武士なれど、三十餘年町人に、業も姿も染付きし、料理袴をかりそめに、御前と云へば氣もおくれ、臺所の板敷けつまづくやら滑るやら、はふ〳〵這出で手をつかへ、詞お國の御家風も存ぜず、お獻立を致せしは無調法、先達てお使に一汁三菜との御意なれども、大坂藏屋敷留主居方の振舞でも、隨分輕いが二汁五菜、結構にはだんん、朝鮮人の響應御堂へも雇はれ、七五三五々三、山蔭中納言の家の切かた、料理一通りは承り傳へしゆへ、申してもお大名の膳部、よもや一汁三菜とはお使の聞

●高師山　二川の宿と白須賀との間にありて、北は山南は海なり。

●しぶく　繁く吹くこと、風にしぶきは縮緬は風に揉まれてヒラ〳〵するをいふ。

あやまりと、云はれぬ念を入過ぎしは猶無調法、お好みの一汁三菜　地我らが手際で、きり〳〵しやんと切立て焚立て、鹽梅よしの御機嫌よき御意を松茸つけ竹の子なまにかはらぬ仕樣が秘密と、口も料理の鹽梅加減、郷左衞門打笑ひ、詞ム、山脇三左衞門が悴なれば、身が爲にも家來筋、親の廟參奇特〳〵、幼少より他國に育ち、當御代の御風儀知らぬは道理、料理は勿論衣類諸道具、凡て無益の費お嫌ひ、上方でも風聞はないか、去年十月高師山のお狩場、身が相役佐野文太左、始めての御供に縮緬の羽織着召されたを、殿がじろじろと御覽なされ、縮緬は風にしぶき面倒な、重ねておけろ是を吳ると御意なされ、お手づから下された召換

●齋藤別當實盛　實盛は其の始源義朝に從ひしも、義朝歿後は平家に心を寄せ、宗盛に仕へ、源義仲の義兵を擧ぐるや、維盛に從つて義仲を北陸に擊つ、此の時實盛緣め戰死を覺悟し、宗盛に請ひて曰く、越前は臣が鄕里なれば親姻皆あり、古に錦を衣て鄕に歸るといふ事あれば、願くは錦の直衣を着て身後の榮となさんと、宗盛其の情を憐んでこれを許す、實盛果して篠原に戰死せり。

●佐々木源三　佐々木三郎秀義のこと、源三は始め義朝に從ふ、義朝歿後平家に從ふことを肯ぜず、節を守りて相摸の澁谷に貧苦と戰ふこと實に二十年、源頼朝の起るや、兵を擧げて之を助く、源家無二の忠臣なり。即ち齋藤別當と其の忠節を比したるなり。

●おもうし　もてなしの意。

●貪　飯のこと。赤まじり、赤米は太唐米と稱し、米質の粗なるもの、又古米となりて色の赤くなるもあり、いづれにしても大名の食には粗末なればなり。古臭きは古米などの蟲臭きをいふ。

●むろ　室鰺のこと。此の魚播州室の海にて多く漁れるよりむろあぢといふ。今訛りてもろあぢ。

の木綿羽織、さしもの文太左はつと赤面、其後此事を工夫すれば、お供に參る文太左、縮緬の羽織着めされふ樣がおりない、兼て文太左にお示し合せ、諸家中の見るまへ木綿羽織を下されしは、美麗御停止とはなく、自ら奢を止むる一家中への御意見、夫を察せぬ御家中の二番ばへ達のざまを見よ、木挽町堺町の役者からつりをとる衣紋付、おのが身の分限も知らず、一がいに殿がお咨い〳〵と勿體ない蔭言、綾錦を召されてもお大名、綿服を召されてもお大名、齋藤別當實盛が最後に、錦の直垂は着たれども、源氏を捨て平家へ返忠の武士、心は汚れし襤褸同前、又佐々木源藏は二君にも仕へず、襤褸の肩を裙に結び、賴朝の御代を待ちしは

心の錦、今の武士の美麗を好むは實盛、佐々木が遺風を芳しと思召す、此殿の御行跡は、下を寛げ世を豐に、賣買を安くせん爲の御儉約、武士は元より町人の、其方等迄此恩を忘るゝな、朝夕の御膳部も一汁三菜、酒も數を定められ三盃限、今日のおもうしも麁相程御意に入る、獻立も書くに及ばず、コリヤ食は赤まじりの古臭いをすつくりと焚かせ、かき立汁に小菜の浮し、向漬はおろし大根鰯鱠、燒物はむろの酢いり夫も二ツ切、引いて古茄子の香の物、扨ひらにはチヽ、それよ、家來に持たせし山の芋、地是へ〳〵と呼出せば、五尺計りの山の芋、仲間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ、フジ菰を放して昇きあぐれば、半兵衞横手を打ち扨も

●圖なしきと。　例のなきこと、又上のなき。

●山の芋から鰻　蛤化して雀となるの類、古諺なり。

●打たり舞ふたり　色々の事を一人でする譬。鼓を打つたり舞をまひたり、八人藝の類なり。

圖なし、御當地は芋所か一生の見始め、詞大阪で見世物に致したら、錢銀の摑取り、第一お家の吉相なぜと申すに、今日は殿のお成旦那の御出世追付、地山の芋から鰻にお成りなされふと、輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乘掛くれば、詞されば〳〵今日の仕合せ、手下の百姓殿のお成を聞付け、身が歸るさの道料理にせよとてくれしは幸ひ、今日の御馳走これ一種、お身が自慢の庖丁隨分切形を出かしてくれ、地賴む〳〵と詞の下、お成門の貫の木の音、すは殿の御入りと犇けば鄕左衞門も次の間に、袴改めお迎とて出ければ、山脇小七岡大橋　フシ金田も續いて急ぎゆく、半兵衞料理に心は忙く、うつたり舞ふたり身は一ツ、薄刄追取り五

●葛醬油　葛粉又はわらび粉に、酒醬油等を和して煮、これを食物にかけて食ふ。葛溜り又餡かけともいふ。

●御膳目八分　貴人へ捧げる膳部なれば、呼吸のかゝらぬやうに高く捧げて持出るなり。

●臺引物　膳部に添へて出す肴菓子の類、客の持帰るものなれど、こゝは略式なれば臺に盛り挾み廻りなるべし。

●から蜆　剝き身に對していふ。殼附きの蜆ないふ。

尺の大芋三寸計り切調へ、つい皮むいてちよき〳〵、葛醬油の出鹽梅、煮かたは急ぐ、殿のお顏も拜みたし、座敷口より指覗けば、御城主も股引がけ上段に着き給ふ、一間隔てゝ近習の人々、鷹匠犬引勢子足輕、玄關の小庭に居餘り、臺所口を押通り、長屋〳〵を休息場、奥には料理の勝手を急ぎ、主鄕左衞門殿の御膳目八分に持出れば、思ひ〳〵に給仕の作法、詞お汁がかはるかへ食繼、初獻の肴は鮪の足、一きれ當の引重箱、二獻めも御機嫌よく、お盃がかはつて平の蓋有りがたがための臺引物、定めの通り御酒三獻、吸物は殼蜆、思ひの外の無馳走に、上には御悅喜納の盃、坂部もてうど下されて、フシ首尾よく、御膳はとれにけ

●無馳走となり。　決して御馳走にあらず

り、地郷左衛門板元に立ちはだかり、半兵衛を睨付け、詞今日の料理は芋一種、太い所をお目に懸くるが御馳走、どのやうに切ればとて、五尺餘りの大芋、一寸足ずに、切碎く言語同斷、手打にする奴なれども他國者と云ひ御成の時節、地屋敷に叶はぬ出てうせべいと、息詰つたる腹立は、フシ詞少に凄じし、詞半兵衛膝も動かさず、是は旦那の御意とも覺へず、今日のお料理、隨分切形に氣を付つ、心一ばい出かせしと一分自慢、御褒美はなされいで存じの外の御叱り、惣じて貴人大人へは、何に限らず、斯樣の珍しき物お目に懸ぬは料理のならひ、大名高家は鷹揚にて、一度お目に觸れられては、澤山に有る物と思召し、隣國のお出合にも、

●山の芋で足ついた　長芋で足をつくともいふ。これも古諺

●蓙笠立傘大鳥毛　蓙笠は被り笠を袋に入れ棒の先に附けて持つをいふ。立傘は雨傘。大鳥毛は槍の鞘に、鳥の毛の飾りしたるもの、いづれも大名行列の表道具なり。

身が領内には、珍き山の芋有りなどと、お國自慢のお咄の上、ふと餘國より御所望の時、跡へも先へもいかず、國中を尋ねても有合はせず、自ら殿樣を虛つきにしてのける、そこを存じて常の如くの調味は、旦那へお奉公と存ぜしに、地御機嫌に違ひしは身の不仕合せ、如何やう共御存分に遊ばせと、どこやら詞のひつはなし、殘る所が武士氣質、郷左衛門口あんごり、詞ム、こりや尤も、イヤ尤も、あやまり申した〳〵、其方が云分眞直に、地御前へ申すが又御馳走、やれ〳〵〳〵山の芋で足突いたと、フシどつと笑へば、早お立とお供廻が振出す毛鎗、臺笠立傘大鳥毛、乘物引馬嘶き立ち、御城内迄お禮の御供、郷左衛門もお輿にそひ、暮ぬ間

●鐵拐　鐵拐仙人は虚空に向て、己れが形をはき出す術を得たる仙人なり。即ち「煙管くはへて吹く息の」といへる前の文句にかけたるなり。

●しづ心　靜なる心。しづ心なきといへば、其の打消にてそは〳〵したるを。

●れまり　れだりの訛なるべし。

の御歸城と、氣も夕陽の　三重　入日影、座敷の仕舞は

地　侍がた庭の締は中間小者、役め〳〵に立別るゝ、臺所には半兵衞一人、庖丁生箸薄刄俎板取片付け、煙管くはへて吹く息に、フシ鐵拐が皺を延ばしけり、　地　二番ばへ共はら〳〵と立寄り、　詞　拙者らは鄕左衞門組下の弓役共、御身は山脇小七郎の舍兄とな、早速の無心、弟の事を賴むも馬鹿らしけれど、前髮姿に神ぞ爪先よりぎり〳〵迄打込み、毎日〳〵しづ心なき玉章、奉書の代も五百目計り、身上を紙に打ちこんでも、つれない小七郎、兄き是非所望申した是、軍右衞門がねまり申して手をつかへるこりやさ、拜み申す吳れ申せと、

地　たぐりかゝれば甚藏逸平コリヤ半兵衞、　詞　おゝと云

●外郎　うゐらう餅のこと。

●惡風吹かけ云々　「用明天皇」に出たる惡臣まするが毒氣を吹きかけるとなん、こゝに口中の臭氣に利せたるなり。

●衆道　男色の道なり。

つたらむつかしいぞ、外方にも惚人が有る、奉書代は愚な事、君に掛つて壹貫五百が外郎積んだ此甚藏、弓矢八幡身にくれろ、　地　イヤサ此逸平にくれろふと、耳際に嚙付くごとく惡風吹きかけ眼もくらみ、フシ前後忘ずる計りなり、煙管も放さず半兵衞大あぐら、　詞　御城下のならひ衆道御法度、おゝと云へば弟が首がござらぬはいの、イヤサ當國は女のみだらは、下々迄御せい道、衆道にはお構なし、三人の内どれへなりと、　地　魂すへて返事せろと、フシもやつく後に小七郎、是まで請けし文一抱へ、半兵衞が前におき、　詞　兄者人の手前も恥しながら、　地　斯うなる上は隱されず、數ならぬ私にお執心とは振袖の身の思ひ出、忝いは山々なれど、獨

●いき方 打込むと。心意氣なり。なづむは

ならず彼方此方の文の數、無下に返すも情しらずと請取つては置きながら、一通も封を切らぬがいづれも樣への立分、どなたに隨ふ心もなし、詞兄半兵衛の存じられし事でなし、地此文封の儘に御返辨、覺し切て下されと、男色たてぬく フシ詞の優さ、地其いき方に猶なづむとしみしたゝるふ取廻せば、詞半兵衛見かね、ハテサテ聞分もないかたゞ、形こそ町人心は侍、拙者が目利で惚人の内へ遣りやせう、コリヤ小七郎、地裝束せいと心を目にて知らすれば、あつと心得點頭て チクリ部屋に入れば、半兵衛多くの文の上書讀み、詞ハヽア皆おの〳〵の名書、此一括の上書に、小一兵衛とは誰事御存じないかと問ひければ、三人共口を揃

●白小袖に淺黄上下 武士の切腹する時の服裝。

へ、其小一めは此邸の中間、へヽエ慮外な下司めが、地遣りおつたはとえせわらふ、詞イヤそうでござらぬ、此道に高下はない、其小一兵衛も呼出し、並べて置いて念者に賴む、イヤ〳〵下司め、身などと同座に置く奴でない、殊に留主やら面も見ず、無用〳〵と云ふ所へ、山脇小七郎白小袖に淺黄上下、覺悟極めて座につけば、半兵衛は取敢ず、肴だいの三方に拔身二口弟の前に置き、詞惚手は四人ほれられては弟一人、何方へ進ぜても殘る三人の恨、此兄は他國住居行末も氣づかひ、いやと云はさぬ御所望、歴々のお侍町人風情に手を下げてのお賴みのつびきならず、弟に覺悟させての死裝束、表面計りの戀慕でなく、未來までも小七郎不

●紺のだいなし　＊

●裾七のづ　づは隨にて脛の古名なり、脛をあらはに高端折したるをいふ。

●一ふり　奴が尻を振つて出るをいふ。

●おたい　飯のことを婦人詞におたいといふ。二合半は奴の切米なり。以下奴詞と國訛りとを交へたる詞多し。

便と思召すならば、此場にて差違へ、人の構はぬ未來での念者若衆、サア弟をやる、地何方なり共兄弟の契約〳〵と三人を睨付くる、思ひがけなき拔身の盃、死裝束に吃驚して、へゝん〳〵と咳に紛らし、身せゝりし フシぐつと云ひ手もなかりけり、御門脇の長屋より、紺のだいなし、裾七のづまで引からげ一ふり、ふつて振出すは、戀にこひとや小一兵衞、三人の鼻の先尻つき出して フシかつつくばひ、詞兄御半兵衞樣のお手前も、シヤお恥しいべいながら、小七樣にとんと打込み、二合半のもり切おたい、咽につまつてぎつち〳〵てきないこんでごはりまする、今日君がお情をつん出して、未來では拙者めを、お念者になさるべいとは、難有い

やら悲しいやら、セ、〳〵〳〵、唐がらし五ツ六ツかふつても、こんな熱い涙は出ませぬでごはりまするで、ごはりますると、地白刄を取つて立ちよれば、小七郎も引きよせて、すはやと見へし刀の中、半兵衞飛入りコリヤ、狂氣したか小一兵衞と、二人を左右へ引分くる、詞コレサ上方のお旦那、糟味噌汁の御恩にかへたお若衆、爰で死なねば心中が見へまらせぬ、是非に死なせて下されと立上るを引伏せ、詞男氣見へた、小七郎に誠の惚人はそち一人、爭ふ者が有つてこそ大事の弟を地殺そふづれ、爭ひ手のない若衆山脇半兵衞が挨拶、向後兄ぶんに賴んだぞ、ハゝはつと悅び小一兵衞、詞お侍方と同座のならぬ奴めが、武士に劣ら

●推　粋に同じ。

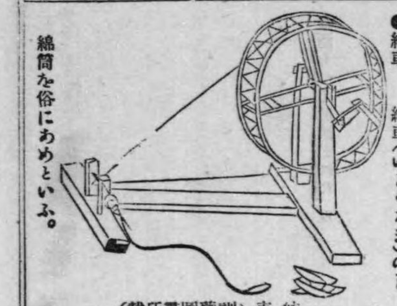
●そんさい　粗雑のこと。

ぬ魂故、結構なお若衆様の兄様とは忝けない〳〵冥加ない、手付に一寸ほてくろしい事御めん〳〵、半兵衛様も氣をお通しとべつたり抱きつき、紺のだいなし白むくに、黒白推の兄弟なり、岡軍右衛門ほうかい恪氣くわつとせき、コリヤ下郎め、地見苦い置きおれと肩を取つて引退くれば、詞コリヤ何なさるゝ、ムヽ聞へたお取持の御酒が過ぎたか、ムヽ合點〳〵、流石二腰のお心がけは格別、柔術の稽古遊ばすな、無調法ながら地お相手と座興にもてなし、ずつと寄つて一當あて引かづいてうんと投げ、ハヽ〳〵〳〵、こりや麁相でごはりまするで フシごはりますると空とぼけ、甚藏逸平堪られず、一度に寄つて胸ぐら摑み、そんさ

●酒もつて尻踏まれた　※

いなる小丁稚め朋輩をなぜ投げた、返報に砂かぢらせんと引立る、詞扨々お心がけのよい、お前方もこりや柔術か、どりや地お相手と立つ拍子、二人が息合ひはつた〳〵と蹴かへせば、板敷より眞逆樣、詞ハヽハヽ〳〵〳〵こりや又麁相地御めん〳〵と云ふをしほ三人ぐず〳〵起上り、エヽどんな所へ給仕に來て、酒もつて尻踏まれたと、地袴の腰の痛い顏、フシ耐へてこそは歸りけれ、地半兵衛ぞく〳〵小氣味よく、扨も手際小一兵衛、我は他國便なき弟が事賴む〳〵、詞今日の料理の御褒美に、二人が事を旦那へ訴訟、地權柄晴れて念比さする其中立は半兵衛が、歌八百萬代の神かけて結ぶ、契ぞ　三重

●五月雨ほど戀慕はれて　流行歌。
●玉水の里　伏見の南、奈良街道の傍ら井出の里の北にあり。山城國綴喜郡に屬す。
●上田村　山城の地名。
●庄屋　德川時代、一村の長を庄屋といふ今の村長の如し。
●綿車　紡車（いとぐるま）のこと。



紡車（訓蒙圖彙所載）

綿筒を俗にあめといふ。

中之巻

歌　五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田のをとし水、軒の玉水とく〳〵、ござれ繁く、ござれば、名の立つに、

ナチス　玉水近き山城の、村は上田に家富みて、庄屋に並ぶ茅屋根も内溫に下女、並んでつむぐ　フシ　綿車、　地　手廻りもよくいくはへか庭に五つのたなつ物、積む蓬萊の島田氏、平右衞門と云ふ大百姓、妻は去年の秋霧ときへても殘る娘二人、惣領輕に入婿を鳥飼より呼迎へ、妹千代も大阪にれつきとしたる婿とつて、身の入まひは上田の田畠の世話をやきやめば、萬事限りの俄病ひ、姉のお輕は側離れず、臺所には女子共、なんと今朝か

●たなつ物　田に成る物の意。即ち重に米のことをいへど、五つのたなつものと五穀に應用していふ。
●蓬萊の島田氏　入婿を鳥飼といへると同じく、蓬萊島臺を島田氏ともじりたるまでのことなり。
●世話をやきやむ　上田の田畑の世話をしてゐるうちは健康なりしも、姉に聟を取り身代を讓り、妹を大坂に緣付けやれ嬉しやと思へば、急に病氣となりし也。
●ちよびかは　豆々しく立働く風なるべし。
●圍爐裏　爐の一種。田舍家にて土間に爐を切り、焚火して湯茶を沸し暖を取る、これを圍爐裏といふ。

ら仕事のはかもいたではないか、些休まふ、お竹お鍋と呼びつれて、フシ思ひ〳〵に立出る、　地　親のやす〳〵假寢の隙を窺ひ女房は、心忙く奥より立出で、　詞　是々臺所に人が一人もない、連合平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟に、大事の病人振捨ての京上り、男共は皆野へ行くエ、憎い女子共、我見る前ではちよびかはして、一寸立てば早や何所へ、大切な主の煩ひ藥一ツ溫めふ共せぬ、　地　下々には何が成る、圍爐裏の下焚付けぬか、次郎よ〳〵と呼廻す門の口、駕籠昇据て申々、

詞　大阪の新靱八百屋伊右衞門樣からと、　地　駕籠の戸明くれば打萎れ、フシ目元しぼよる縮緬の、二重廻りの抱帶、フシ涙の色に染めかへて、　地　なく〳〵出れば駕籠の

●隔心がましい　文字の如くへだてごゝろなり、俗に他人行儀といふに同じ。

●高麗橋　高麗橋通り、同橋詰町に伯母の家あるなり。

●常磐町　内本町より南へ二筋目。

●典薬　昔し宮内省のうちに典薬

者、慥に御居け申したと、フシ言捨て歸るも足早なる、地親の家さへ女氣の、敷居も高く越へかねて佇ずむ有様姉は見つけ、詞ヤアお千代おじやつたか、定めて御病氣の見廻ならめ、よふこそ〳〵何故駕籠の衆留めやらぬ、他外でもあるやうに隔心がましい、酒一ツ進ぜて去しやいの、地それ呼戻しやと、言へ共妹は差俯き、歎けば共に歎かれて、詞ヲヽ、道理〳〵とふ知らせんと思ひしに、此病では死なぬ、氣のとりにくい舅姑持つたお千代、婿半兵衛も忙い時分、聞いたり共自由に來る事は成るまい、案じさするも不便沙汰するなとの、病人の氣にもさからはれず、地高麗橋の伯母様常磐町へも知らせぬ、詞コレ氣遣しやんな京の御典薬にかへ

寮といふがありて、醫薬の事を司れり。其の長官を典薬頭といふ。これより御所方へ勤仕する醫師を俗に御典薬といひしなり。

てから、めつきり薬も廻り、今朝も粥を中がさに三よそひ、病は請取つて治すとのお醫者様の請合は、本復もおなじ事、地和女の顔御覽なされたら、いよ〳〵父様の病はすつべりなほらふ、嬉しい〳〵お目にかゝりやと有りければ、詞エヽ、父様はお煩ひか知らなんだ〳〵、何時からの事でござんする、ヤ何じやお煩ひ知らぬか、そんなら和女何しに來た、何悲しうて泣くぞ地恥かしや又去られてと顔押隱しむせび入る、姉も驚く顔に血を上げ、詞なふお千代、五度三度の聟入嫁入も世に有る習ひとは云ひながら、惡い事は手本にならぬ、恥しい〳〵と口で云ふ計りが恥を知つたと云れふか、地和女もかる〳〵三度の嫁入、尤も始めの男道修

●たゝずみもない　たゞずまひの轉にして、家もなく生活に苦むをいふ。

●風下に居るなの意。　風儀を見習ふな

●物しやんな　物をいはしやんすなの畧。

町伏見屋の太兵衛殿、心ぶしやうに身體を持ちくづし、たゝずみもない樣に成果てあかぬ別れ、其次は死別れ互に難はなけれ共、詞人は和女の辛抱がないゆゑに、去られた〳〵と批難付け、此度の嫁入も追出さるゝに間はあるまい、忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘持つた人々は寄合ひ茶呑咄にも和女の噂、ま一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知りぬいて、火に入り骨を碎かるゝとも歸るまい、ヲヽ必ず去られて戻るなと、念に念をつがふた今度の嫁入、よふ戻りやつた父樣お聞きなされたら、お悦びなされうぞお顏見せる折が有らふ、必ず聲高に物しやんな、詞して半兵衛が暇の狀取つて戻りやつたか、いや跡の

●唯もない身に同じ。姙身のこと。　唯ならぬ身といふ

月半兵衛殿、父御の十七年の弔ひの爲め、生れ故郷遠州の濱松へ、戻り次第道具に添へ暇の狀は跡から、先去ねと譯も言はず、地お中に四月唯もない身を、姑御が手を取つて駕籠に引きずりのせ、むごいつらいと計りにて歎くを見ればいた〳〵敷、子のある物を夫の留守、暇くれる姑、心に一物有るはいの、詞伯母婿ながら和女の親分、高麗橋二丁目川崎屋源兵衛殿指置いて、直に爰へ突付ける仕方も憎し、よい〳〵此方の人が京からの歸を待つて詰開かせ、大體で暇はとらぬ、地とは言へ世上の女夫中、去るといふ事誰こしらへ憂目をさせる可愛やと、歎けばわつと泣出す聲、高い〳〵障子のあなた父樣の寢入ばな、泣くな〳〵と言ひつゝも、

●親は泣寄　＊

●堤の茶屋　淀川の堤なり。

つとふ涙の血筋とてしんは泣寄る　フシ憐れさよ、　地平右殿御氣色、今日は如何とつゝと入る、おなじ村の金藏、お千代はちやつと姉の蔭、見付けられじと身を隱せば、　詞ア、隱れまい〳〵、只た今堤の茶屋で、大坂へ戻り駕籠の咄で聞いた、お千代殿目出度い、去られて戻らしやつたげなと、　地口も氣儘のとはうなし、お輕ははつと餘所よりも親の聞く耳憚りて、　詞金藏樣嗜ましやんせ、襲はなし聲低に言ふても濟む事、千代は去られは致しませぬ、親の病氣を見舞のもどり、　地奥には父樣すや〳〵と寢てござる、目を醒して下さんすな、ひくう〳〵おなじくば去んで貰ひたいと、氣の毒がるほど猶聲高、　詞親仁寢てか面白いなんぼ隱しても

慥な事聞いてゐます、お千代殿幾度でも去られさつしやれ、彼是の婿達が踏擴げた田地でも、百姓の女房には大事ない、　地おれが持つと一夜さも淋いめはさせまい、去られて戻つた悲いと氣をくさらし、必ず女房ぶり損ふて貰ふまい、　詞去春貰ひかけた時、おれが方へござればよいに、惚れかゝつた一念脇に足は留まらぬ筈、入まい〳〵戻ると云ふも、此鼻に緣が深いからじや、親仁殿に云ひ込んで今日からでも我ら請込む、　地姉御大事にかけて貰ひましよと喚けば、二人は死入る計り、冷す心の奥に手を打ち、かるよ〳〵あいあい〳〵、　詞南無三親仁おきられた、金藏が見舞ふたと云ふて下され、　地又明日御見舞ひ申そふと歸ればかるは

●誰かりす　誰が狩りするにて、次の落來る肉を猪にかけたる前提なり。

腹も立ち、　詞是々去なずと千代をお貰ひなされぬか、　地いや〳〵云ふても大事の緣組、日を見て申し出そうと、フシへらず口して立歸る、　地父樣お目が醒たかと、姉が障子をあくる跡より千代もおづ〳〵指覗けば、夜着にもたれて起臥も、なやみ苦しき老の坂、誰かりすとはなけれ共、落ちくる肉に顏あれて、フシ見かはす親の顏と顏、　地堪かねてなふ父樣、お藥あがつてま一度達者になつて下さんせと、思はず知らず聲立てゝさめ〴〵歎き伏しまろぶ、父も見る目に涙ぐみ大事ないつゝと來いつゝな、子に運ぶ親の心、居ながら千里萬里も行く、ましてや一ツ家の內、寢ても寢られず最前より何事も皆聞

●月もより日もよる年のよるといふはまだ〳〵、六十を越しては月に日に老の身に迫り來るをいふ

きしぞ、　地そも我ながら斯くも心の變る物か、五十と云ふ年の內は行步心に任せずながら、心は若かりし昔に變らず、氣も强く義理にも引かれ、　詞おのれ重ねてさられたらば顏も見るまじ物云ふまじとの我もありしが、六十に足踏込んでは年計りよるでなく、月もより日もよつて病にはからまるゝ　地身のおとろふる程彌增に按じらるゝは子の身の上、三度はおろか百度千度去られても、去らるゝに定まりし前世の約束と思ひあきらむれば、悔みもせぬ憎ふもない、笑ふ人は笑ひもせよ、譏らばそしれ指もさせ、子の不便さにはかへぬぞと、老の繰言息よはり、　詞半兵衞めは遠州へうせて留主の內となる、其留主合點、萬一うせたりとも物云ふ

●中食　晝食。

●口どまくれひ誤るとも。　口が惑ひて詞ないな顔も見な、彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる、苦に持つて煩ふな、地のふ姉下々は野へいつちん、茶わかいて千代めに中食させてたもれやと、餘念なき父の顔、姉は悦びコレお千代、詞案じた父様の御機嫌日本一、お側はなれす御介抱申しや、地嬉しや胸が開けたと、障子を引立て〳〵チカリ勝手へ出る折こそあれ、地門に物もう頼みませう、どなたとこたへ入るを見れば、千代が夫の半兵衛、扨こそ縁を切に來たと、思ふ心に口どまくれ、去狀さまよふござつたと、云へどもなんの氣も附かず、旅出立の儘笠取つて沓ぬぎに草鞋の紐、心も解けておかるさま、詞どなたも變る事あるまい、國元へ參る時分は、事急にて報知もいたさず、氣のつ

かぬ親共留主の内にも嘸御無沙汰、拙者も無事に遠州より、唯今罷り歸ります、フウそれはな、御きどくによふお歸りなさるゝと、顔を背けて鼻あしらひ、男ども女子ども、誰ぞお茶でもあげぬかと、内にいぬ人呼立てゝ、むやくし顔の色合を、見て取りながら半兵衛、立つも立たれず仔細は知らず、互の心隔ての障子さつとあけ、姉さま、お藥溫めてと出るは女房、地ヤアお千代爰に居るかを、聞捨て物をも云はずつゝと入り、障子をはたと　フシ引立てたり、詞おかる樣あれ女房、いつから爰に　地何故物は申さぬと騷げども、詞物云はぬ譯聞きたくば、此方の心にお問ひなされ、人の知つた事の樣に、ハ、、、、可笑い事ではあると、地空

●ちんかう記　塵劫記のこと。

笑ひ取つてもつかれず、ムウムウと計りさし俯向き、
フシとむねつくより詞なし、地奥には親のせぐるし聲、
詞夜短かで日の永いは、老人の身によけれども、それ
も息才で駈けまはる時の事、病みほうけて日の永いは、
扨々退屈で暮らし兼る、千代よ棚な本おろして何なり
共讀んで聞かせ、かるは何所に來て聞かぬか、地我伽
せぬかうせぬかと、忙く老の氣のいらだて、あいあい
爰に仕事しながら、障子隔てゝ聞きますと、流石半兵
衛を捨てゝも立たれず、障子の傍に立ちよれば、ヤ親
仁樣御病氣か、容體見たしと云はんとせしが、ぶあし
らひなる氣をかねて、詞を留め折を待ち、共に摺寄り
聞きゐたる、地千代は數多の本取出し、伊勢物語ちん

●網島の心中　「心中天網島」をいふ。同淨るりは享保五年、これは七年なれば其の噂をしたるなり。

●つれ〳〵　「徒然草」のこと。

●母の刀自云々　此の事は「源平盛衰記」にも出たり、祇王が佛御前に寵を奪はれ家に暇りゐる所にて入道より再び召さるゝを耻と思ひ其の命に從はざるより母の刀自が教訓して強ひて再び入道の召に應ぜしむる所の文なり。

かうき詞父樣の傍に有るまい、網島の心中もござん
する、つれ〴〵平家物語、なふ父樣、何の本がよから
ふぞ、姉が讀みさいた平家物語、祇王が段を聞かふ讀
みやれ、ほんに紙を付た所があると押開き、母の刀自
なく〳〵又教訓しけるは、天が下に住まん者、ともか
ふも入道の仰せは背くまじき事で有るぞ、千年萬年と
契るとも、頓て別るゝ中も有り、あからさまとは思へ
共、ながらへはつる事もあり、世に定めなき物は男女
の習なり、地ほんにそうじやと讀みさして、我身に當
る憂涙、フシ留め兼てぞ泣きゐたる、地父も不便に目を
しば〳〵、昔も今も人の氣の、移り易き世上の習、詞
コレ姉もきけ、平家物語を千代が身に引比べて云ふ時

●一ツ所ところ　重言ながら田舎訛りな其の儘寫したるものなるべし。

●先輿後輿　父の死する時は、其の子棺を擔ぐ。平右衞門に男子なければ、二人の聟が其の代りをなさんとなり。

は、清盛入道は八百屋半兵衞、祇王は千代が身の上よ、その清盛が心變つて追出す、憎や清盛去年婿入せし折から、不調法な娘を進上致した、氣に入らぬ事あらば、打毆き縛り括つても直させ、末々までも見捨ず添ふて下されかし、此度共に三度の嫁入、在所は一ツ所どころにて、又歸つては平右衞門二度人中へ頰が出されぬ、娘は氣に入らず共我を不便と、面倒見て必ず去つて給はるな、チヽ去るまい〳〵、御臨終の折からは、先輿は平六殿、後輿は此半兵衞、眞實の子を持つたと思召せ、今こそ町人八百屋の半兵衞、元は遠州濱松にて山脇三左衞門が忰、武士冥利商賣冥利、千代は去らぬ氣遣するな、ア、忝ないと手を束ね、地頭代官の其外に、

●正たい涙　正體なく泣く涙を約めたるなり。

●生れじやう　人の運不運は皆性に持て生れるといふの意。

一生下げぬ頭を下げし互の契約、地物忘れする老の身にも、其時の嬉しさは骨身に染みて忘れぬ物、若い形して忘れしか忘れぬ證據、其身は實父の弔ひにかこつけ、遠州へ出かけし其跡で姑に追出させ、養子の親に我あ罪を塗付ける不孝者、義理も法も知つた奴か、地彼が何の武士の果、鰹節の削り屑、人でなしめに緣組んであたら娘を捨てたな、ろくに吟味もせなんだかと、死んだ母が彼世から、恨み召されふ口惜いと、愼み深き堅親仁、惡口交の口說泣二人の娘も正たい涙、兎かく男に緣のない、生れじやうかと計りにて、聲も惜まず泣居たる、地扨は女房去られて爰へ戻つたかと、始めて驚く半兵衞、胸に盤石据へたる如く、呆れ返つて

涙も出ず暫し詞もなかりしが、詞エ、情ない女房、假令一言一宿のつき合にも、人の心は知るゝ物、況て足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知つても言譯してくれぬか、親仁様の御立腹申し開くは知つたれ共、詞我罪を養親に塗付ける、不孝者との一言からは、ゆめ〳〵存ぜぬ、我ら去りは致さぬと申し分くる程不孝の上塗、親仁様につがひし詞、違へぬ武士の性根を見せる、地見て疑ひをはれ玉へと、ずばと引きぬく脇差より、おかるは早く縋り付く、千代も驚きなふ悲しや、こな様に恨はないと障子引きあけ走りより、留めても留まらぬ男の力、父様頼み上げますと、騒げど騒がぬ平右衛門、詞お身が居るとは知つての當事、耳に

●つらうち　面あてに同じ。

●しどなさ　しどけなさの畧。取締りのなきこと。

とまつての自害か、ヲヽよい分別、自害して死んだらばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦、嫁を憎んで去りしゆゑ子はつらうちに自害せしと、養子に悪名難を付け、口々に取沙汰せば手がら〳〵、地留るな娘ぞんぶんに自害めされ、見物せんとの一言に、孝心深き肝をひしがれ、ハアそうじや過つた眞平と、額を擦付け身を悔み、詞然らば御暇、千代も同道いざお立ちやれ、エヽやつぱり私を女房に持つて下さんすか、ヲヽ假令死んでも身體も戻さぬ、ちん未來まで女夫〳〵、アヽ忝い父様姉さまも、悦んで下さんせと、はや締直す抱帶、さきをたぐつてにじりより、父ははら〳〵涙にむせび、詞半兵衛是見や此しどなさ、歸らんと云ふ嬉しさに、

●水盃　戰場又は敵討など死を決して出發せんとする時、酒の代りに水を汲み交して訣別す、此の酒盛りを水盃といふ。

親の病を何共云はす、地悦ぶ顔を見る親の、心の内の嬉さを、叶はゞ見せて禮云ひたし、取締のない愚者伊右殿夫婦の氣には入るまい、頼むは其方の心一ツ親は老病明日知らず、黄泉の底のそこ迄も、心にかゝるは千代一人、明日が日眼塞ぐとも、姉夫婦にきつと云付け、十廿の金の取りやり、いつ何時でも事缺かせぬ、隨分商内手廣くして、娘が事をフシ頼入る、契約の盃せん銚子〳〵、姉よ酒をきらせしか、親子の中に遠慮はない、酒と思ふ心が酒燗鍋に水持てこいと、盃の出る間もこがるゝは子故の闇、引きうけ〳〵ずつとほし、詞半兵衛ささふ親子夫婦が水盃、地さいつさゝれつ汲めども盡きず、飲めども醉はぬ水酒盛、不便と思

●八功德地の水

●門火　焼くこと。葬を送る時、門にて火を

ふ親の氣は餘りて色に出にける、地命があらば又逢はふ、死なば親子の末期の水、未來は八功德地の水此世に思ひ置く事ない、二人ながらおいにやれ〳〵、さらばと夜着に打ちもたれ二度詞もかはされぬ、長地親の心に身を耻ぢて、姉につど〳〵云ひかはし、思ひを陳べて立出る、フシ暫しと父は、起上り、詞姉なふ重ねて戻らぬため、祝ふて内で門火たけ、地忌々しいとは思へども、親に從ふ焚火の煙、目出度ふ爰から焚きますと、庭にこがるゝ下崩の、果は夫婦が無常の煙り、灰に成つても歸るなと、其一言を此世の名殘、留まる名殘行く名殘、長き名殘と　三重

●莚庇　夏になると屋根より町へ莚にて日覆すること。

●願人　後生願ひの意。

●寺狂ひ　佛事に狂奔する信者のこと。

●おねばいわりの大きくなりたるをいふ。大坂詞。

下之巻

夏も來て青物見世に水かはく、莚庇に除けられし、日蔭の千代が舅の家に、新うつぼ、油掛町八百屋伊右衛門、淨土宗の願人、了海坊の談義に打込み、開帳回向の世話やき仲間、見世は半兵衛に打任せ大坂中の寺狂ひ、女房は内外の世話に五ツも年ふけて、朝から晩迄氣は苛だて、詞此半兵衛は藏にべら〳〵何して居やる、見世の賣物がしなびる、ヤイ松め、きり〳〵と水打ちおろ、コリヤさんよ、のりかい物がひあがろがな、とりへてたゝんで打盤出してちよき〳〵とうて、ヤ其ちよき〳〵で夕飯のおねばきざめ、コリヤ松よ、今日は

●今日は五日宵庚申　五日は四月五日にて、庚申は六日なれば、今日は宵庚申なりと。大阪にては祭禮縁日の前夜を宵宮と稱す。甲子は近い、甲子は必ず庚申の次に來ればなり。二股大根、甲子には茶飯を炊き大黒天に供ふ、二股大根も甲子の供物なり。

●のらつぼ　なまけものといふに同じ。

●卯の刻　明六ツ時。

●てんとぼし　天道干にて直に日に干し付けるをいふ

●おうご　荷物をになふ棒。

五日宵庚申甲子が近い、二股大根のけておけ、地ソレさんよ茶釜の下が燃出ると、商賣が八百屋とて、八百色程言付ける、口せか〳〵と忙きは、フシ大晦日の生れかや、伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、はしりの竹の子片荷には、獨活生姜青山椒白瓜二ツ、歌これは扨も早い事でごんすよの、おれが戻るは、ても遲い事でごんすよの、詞コリヤのらつぼ今朝卯の刻から内を出て、何時じやと思ふ晝下り、どこで鼻毛をよまれて居た、旦那しゆの誂へもの、日覆してさへ傷む時、高い物をてんとぼし、地商賣のおうごくらはせ、魂に覺へさせんと取付けば、半兵衛走りいで母者人のがこりや尤も詞コレ太兵衛、何處にのら〳〵やつて居た、おくび町

の笹屋から、竹の子取に矢の使、阿波座堀の丹波屋から栗おこせと云ふてくる、朝倉屋からは青山椒内にはきれる返事に困つた、太義ながら母者人の機嫌なほし、つい一走り廻つておじや、ハテ私じやとて何の悪ひ所には入つて居ましよ、横町の山城屋から呼びこまれ、二ツ三ツ咄したばかり、其も外の事でござらぬ、此方に誰やら逢ひたいとて、今日から爰に待つて居るといふてくれとの傳言、地私や花主を廻つてこふ此方も一寸往かしやれと、誂へ物を取揃へ、荷拵して出てゆく、半兵衛は山城屋と聞くより、お千代が來たであろ、氣どられまいと空とぼけ、ハア山城屋からは何の用、どりや一寸いてかふとはしり出るをむずと捕へ、詞息子

●ぬつけりとした顔　人まぜもせずしぶとき親たい

●宗味が石鐘の開眼　宗味は鑄物師の名なるべし。開眼は鐘の出來上りし時行ふ式なり。

●非時　＊

殿こりやどこへ、イヤ山城屋から逢ひたいと、チヽその山城屋合點、なりませぬ、アノぬつけりとした顔はいの、こちと夫婦は何にも知らぬと思ふてか、氣にいらいで往なした嫁、遠州戻りに在所へより、ようくはへて戻つたな、常盤町の從弟が所に預けておき、商賣に托け、間がな隙かな女夫こつてり、おれが知らいでおこかいの、嘸おれが事譏りやつゝろ、十五年世話にした親の嫌ふ女房に、隨分と孝行つくし、親には不孝つくしや、地恩知らずめと疊たゝいて喚き居る所へ、青布子の西念坊、案内なしにずつと通り、詞熊野屋の權右樣から先達てのお約束、宗味が石鐘の開眼、麁相な非時致します、講中皆お揃ひ旦那寺もとふお出で、御

●旦那寺　旦那寺の住職の畧。
●そゝくさ坊主　そゝッかしき坊主、あはたゞしきをいふ。
●つごと聲　慳貪なる聲。
●修羅燃す　藥を煮やすなどいふに同じ。腹を立ち又は嫉妬に燻られ、ヤキモキするをいふ。

夫婦ながら唯今と、云捨て歸るそゝくさ坊主、フシ未來賴むはあぶな物、詞アレ親仁殿、熊野屋から呼に來た早よ往かしやれおりや往かぬ、地きり〳〵さしやれとつごと聲、親伊右衞門は後生一ぺん、詞ハレ嗅何を喧い、またしても〳〵半兵衞さへ見れば敵の樣にいふ人じや、世間する若い者、呼に來まい物でもない、少々の事は聞きのがしにしやいの、ソレ其結構過ぎたから、親を阿呆にしをるわいの、現在おれが甥の太兵衞を差置き、あかの他人の此のら殿に、家屋敷遣る此母邪は少しもない、コレ嗅、それは誰も知つた事今更調べる事かいの、そのよな腹の立つ時は念佛が藥じや、兎角如來の御方便、修羅燃すそなたを呼びに來るも彌陀如

●ほたへる　＊
●三百戒五百戒　佛說に戒は一切不善の法を制する義にして、其種類頗る多し、二百五十戒は比丘五百戒は比丘尼戒とあり。又妄語戒は五戒の一にして、虛言を吐くことは佛法にては深く誡めたるなり。
●嗔恚　＊

來、地參る此方等も彌陀如來、機嫌直しやと宥むれば、詞イヤこち夫婦が出てゐて、跡へお千代を呼入れ、留主の間でほたへさす事は成りませぬ、此方一人參つて、私は俄に目が舞ふたと成りと頓死したと成りと間に合に遣らつしやれ、コレ嗅、たつた今西念坊が見て去んだはいの、此伊右衞門に虛つけかア勿體ない妄語戒、此中さるお寺で、五戒の割口說聽聞した、三百戒五百戒も、約る所は赤貝に留まるとのお談義、半兵衞が叱らるゝも貝のわざ、和女に已が意見するも貝のわざ、一蓮託生の閨のお同行と、フシしやれて機嫌を取りければ、詞そんならマア此方參らしやれ、此樣な嗔恚の燃る時に念佛申せば、地咽にすく〳〵立やうな、心鎭め

●あたどん　＊

●念佛講　浄土宗の信徒にて組合を設け、毎月當番ありて順次講元をなし、講中集合して念佛を修し、食事を饗するを日待月待の講と異なるところなし。

●めかりきがせる　氣轉を利かせると。

●かや、の雨　萱屋の雨なり。

●生玉大寶寺　生玉寺町にあり。

●筑後の川中島　近松作「信州川中島合戰」は、享保六年八月三日初日、筑後の芝居に興行せしを、此の大寶寺の開帳に、川中島の四段目即ち天目山の造り物を拵へ、人目を引きしことをいふ。

て跡から參らふ、エ、かて〻くはへてあたどんな念佛講、こんな時はめかりきかして延ばしたがよいはいの、ほんに〳〵此方の同行に、氣轉の利いたがひツとりもないと、恐いめ知らぬ我儘たら〴〵、ヲ、そんなら先へ行く跡からおじや、詞佛法とかや〻の雨は出て聞けと、外へ出れば又難有い事も聞く、此度生玉大寶寺の聞帳に、築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事じやげな、こんな事も出にや聞かれぬ、地アの南無阿彌陀佛と、フシわ珠數くり〳〵出にけり、難有い南無阿彌陀佛言の答もせず、涙にくれて居たりしが顏ふり半兵衛一言の答もせず、涙にくれて居たりしが顏ふり上げ、詞申し母者人、今めかしい申し事ながら、武士の釜の水で育ちし此半兵衛、廿二の年から御面倒に預

●判官贔屓の世の中　謡曲、舞、淨るり源義經の事を作れるもの多く、いづれも義經の不遇に同情を寄せたるものなれば、其の感化を受けて、三才の童子も義經の事といへば善をし、之に反し梶原といへば一も二もなく惡人と憎む。その如く姑が嫁を離緣したとあれば理非を糺さずして姑がいびり出したやうにいひて、嫁に贔屓するとなり。

り、一人の甥子を差置き、家屋敷商賣とも、私へお讓りなさる〻御厚恩、肝にこたへて空にも存ぜぬ、御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別致してこそ、孝行も立つ世間もたつ、所に此度國元の留主の間に、八百屋半兵衛が母が、嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰あつては、まん〳〵千代めが悪いになされませ、判官贔屓の世の中、お前の名ほか出ませぬ、母の惡名を立て、若い者の人中へ面が出されませうか、親仁樣にも面目失はする、爰が一ツの御訴訟、少しの間と思召し蟲を殺し、美う千代めをお入れなされ、其上にて私が、物の見事に去狀書いて暇やります、ホ、そこが男のかうけん、貴人高位の娘でも、夫が去るになんと申す、

●百萬遍　浄土宗の信者連座して大念珠を繰りて念佛するをいふ。
●知識長老　徳高き僧をいふ。
●十念　浄土宗にて信者に六字の名號を授け佛に結縁せしむるをいふ。
●ほいやり　うぶな親。

時には千代めが姑への恨もなく、お前を慈悲じやと云はせたい、十六年此方たつた一度の御訴訟、　地老少不定の世の中、假令私が先つても、如何なる跡のとひ弔ひ、百萬遍の御回向より、聞き入れたとの御一言、智識長老のお十念を、授かる心と計りにて、女房の親と我親と、世間の義理と恩愛と、三すぢ四すぢの涙の絲、たぐり出すがごとくなり、母ほいやりと笑顔して、ムゝ思ひ合ふた夫婦合、誠らしうは思はねど、嘘に涙は出ぬ物、眞實去るが定じやの、ハテお前をだます程なれば、此御訴訟は申しませぬ、チゝ嬉しい〳〵、おれも鬼にはなりともない、必ず去りやゝ、間に合言ふて欺しやれば、コレ此母が咽笛を、出刄庖丁でちよいじ

●店のつるし　釣し柿のことか、さては季節に合はず。

やぞや、母殺すか女房去るか、夫ならば其方の勝手次第、アゝさりとて穢土の苦が脱けた、此世からの生佛とはおれが事、足輕ふ非時に參りましよ、　地こちら未來までのきざりせぬ閨の同行が、さこそ待ちや焦れて、　詞南無阿彌陀佛〳〵、さんよ其形でつい供せい、ア南無阿彌陀、松よ又見世のつるし喰ふな、アなまみだ、南無阿彌陀佛に取りまぜて、　チクリぶづ〳〵　云ふてぞ出にける、お千代が重なる五月の重き身ながら足元も、手もかろ〳〵と帶の下、小褄引きあげちよこ〳〵走り、ハア久振で家を見た半兵衛樣、今日といふ今日、町内廣ふ戻つたはいの、ア嬉しやと　フシ抱きつけば、半兵衛ぎよつとし、何として戻つた、　詞たつた今母が出ら

れた道で逢ひはせなんだか、さればいの、母様の山城屋へよらしやんして、いつにない門口からにこ〳〵と、いとしや〳〵おれがちつとの思違ひで苦勞させた、今からいなそのいのじも云ふまいと心誓文立た、娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁、末期の水取らるゝも骨拾はるゝも和女、隨分孝行にしてたも、和女もおれがいとしがる、今お念佛に參る其内に早ふ戻つて、後に逢はふ早う〳〵ととんと桶な物打ちあけた樣なお心、皆此方樣の云ひなしゆへと、ほんに男の御恩は戴いて居てもあきはない、松よ久しいな、最早どこも蚊があるに、女房主人がなければ、まだ蚊帳の釣手もなし、アノさんが居眠では、袷どもの洗濯もできまい、

●相縁奇縁　親子又は男女の縁の互ひに結ぼれたるをいふ。つまり相性の合ぬと。

此戸棚のほこりはいの、奥の疵もまだ塞がず、かうの物も見舞ひたし、地何からせうやら氣がうろつく、居付た所に居て見よと、とんと坐りし茶釜のまへ、湯を沸かして水になる、フシ末知らぬこそ果敢なけれ、半兵衞兎角の挨拶せず、詞コリヤ松よ、只ゐずとも藏へゐて、地椎茸よれと人をのけ、お千代の顔をつく〳〵と見て涙ぐみ、詞エ、かあいや利發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか、云やる事が皆嘘じや、さりながら昨日もくれ〴〵いふ通り、佛法の端も聞き入れ、物の慈悲も知つた人、我甥をさしのけ他人の身共に、跡式讓る心からは、根からいがまぬ是證據、人には相縁奇縁血を分けた親子でも中の悪いが有る物、乘合舟の

●さんもつかず　詳ならず。愚を受けた算用もせざることか。

●金に詰つて死ぬる心中　「長町女腹切」の伯母の詞に「世間多い心中も金と不孝に名を流し戀で死ぬるは一人もない」とある如く、戀でな

見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人もある、人界の習はし斯うした物、いとしぼなげに根からの惡人でもない母を、和女故に邪見者と言はせては、女夫の者が後生も惡い、母の機嫌よふ一たん呼返し、改めて己が手から去る筈じや、エヽイ、すりやどふでも去らるゝか、ハテ肝潰すことかいの、死るは二人が豫ての覺悟、養親にさんもつかず在所の親の遺恨もなく、エヽ流石じや、見事に死んだと、未練者の名を取るまい爲め、母に向ひなんぼの詞を盡したと思やるぞ、書置も認め死裝束脇差も、荒布の荷へ捲込み、この世の心ばかりは微塵程もなけれども、金に詰まつて死ぬる心中と一口に言はれふかと、地是が一ツの氣がゝりと、わつ

く金に詰つて死ぬるは情死者の恥辱とするところなればなり。

●りやうげ違ひ　了簡違ひの訛り

と泣けばわつと泣き、こなさんの孝行の道さへ立たば、私も心は殘らぬと、夫婦手を取り縋り寄り、伏沈むこそ道理なれ、母は念佛の回向より、嫁女夫の願以此功德氣がゝり、餘所にゆるりと居る空も、見世さし頃によつと歸り、詞なふお千代戻りやつたか、さつきにも云ふ通り、些したりやうげ違ひで物思はせたいとしやの、ほんの生如來が見たくばおれじやと思や、永うもない浮世に、酷いつらいめ見て何にせう喃否やの、コリヤ半兵衛、はしりの出刄庖丁よふ研がして置いたぞや、ちよいと觸つても劒じやぞ、ア南無阿彌陀佛地〳〵と半兵衛に合圖の詞、嫁は知らぬと思ひこむ、フシ是ばつかりは佛なり、女夫は母の機嫌顏、見れば

●じやくは雨と降り　土佐の方言に死ぬることをじやくは雨といふ寂の義かと『俚言集覧』に見えたり。

此世の本望と思へどじやくは雨とふる、フシ涙隠すぞ哀なる、コレ半兵衛何も忘れたとはないか、日の永い時は得て物忘するものじや、よふ思ひ出しや、お千代泣かずと爰へおじやいの、まだ已が恐いか、地爰へ〳〵と猫撫聲、アイアイお側へ参りますと、立寄らんとする所を、半兵衛取つて突退け、女房計りは親の儘にもならぬ、身が氣に入らぬ、去つた〳〵出てうせい、コリヤさんも丁稚もよふ聞け、半兵衛が女房去つたぞ、向隣町内でも母の浮名を立てたらば聞く事でない、地うろ〳〵せずと出てうせいと眞顔に睨む目に涙、詞コレ嫁御おりや去らぬぞや、親の儘にもならぬは女夫是非がない、地おれを恨と思やるなと云へども何の

●五々八八、知死期　一月の中上旬三四五の三日は丑未辰戌の四時を知死期とせり。此の日恰も五日なり、丑未は夜の八ツ時と晝の八ツ時、辰と戌は夜の五ツ時と晝の五ツ時なれば即ち五五八八なり、今恰も暮六ツなれば次の血死期八ツ時なれば間もなしとなり。

返答も、泣入り〳〵しやくり泣き、詞ム、其涙はまだ母に恨が有りさうな、有るなら言や聞きませう、イヤ〳〵御慈悲深い姑御に、地何の〳〵と詞計りにて、かつぱと伏して泣居たり、詞ヲ、おのれが云ふまでもない、母者人に何の恨み、地口手間入れる面倒なと、小腕取つて門口に引出す、此身は遂に行く、後に〳〵と囁きて、目まぜに宿の名殘の涙、弱る心を見られじと、門口ひつしやり見世ぐはつたり、鳴るは六ツかはや初夜か、時もじぶんも六六に、胸はわけなき五々八々、フシ血死期近づく計りなり、あかぬ夫婦は生別れ、流石の母も拶挨なく、おうへを立つて奥の間の、罪ほろぼしの鐘の聲、善悪照らす御燈の、火を見るよりも居

●すゝどき　鋭きの詞。

眠る下女、外に見る目も荒布の束、中に隠せし一尺四寸、是が冥途の案内者、魂こむる書置箱、地獄へ落ちるか極樂か、末は白茶の死装束、くる〳〵包む毛氈も、はや紅の血を見れば、死損ひはせまいぞと、一心はすはれ共、暖簾一重彼方には、すゝどき母の鍾の聲、胸にこたへて身も慄ひ、踏所覺へぬ差足に、鑼外す手もわな〳〵、密と出たる門口に、詞イヤアお千代か、おいの、サア鰐の口を脱がれた、地サアおじやと手を引けば、マア待つて下さんせ、生中一度戻つて、此方樣の口から退くぞ去るぞと言はれては未來迄の氣掛、此門口で唯一言、去らぬと云ふて下さんせ、ハテ愚痴な事計り、今宵は五日宵庚申、女夫連で此家を去ると思

●此家を去るの地口。

●かのえさる（庚申）

●名殘も夏の　名殘もなしを夏にかけたるなり、此の文句他にもあり。鶯の巣に育てられは當時の流行の小唄をとり入れしもの。

●杜鵑　は卯月の鳥にして、啼く時は血を吐き草木を浸し、其の聲には離別の苦あり、又不如歸去ともいふより、季節とお千代の離縁沙汰に利かせ、杜鵑の故事を多く引けるなり。

●卯月　卯花月の略、四月の異稱。

●其の一言は庚申　其の一言はかなへざるのもぢり。

へばよいはいの、ほんにそうじや手に手を取つて此世を去る、輪廻を去る迷を去る、地今日は最期の羊の歩、足に任せて　三重

八百屋半兵衛
女房おちよ　道行

歌名殘も夏の薄衣、鶯の巣に育てられ、子で子にあらぬ杜鵑、我も二八の年月を、養親に育てられ、子で子にならず振捨て、死に行く身は人ならぬ、死田の田長か杜鵑、フシ同じたぐひの夫婦連、小チクリ肩に掛けたる毛氈は、啼く音血をはく姿かや、覺悟極めし足元も、本フシ影ほのぐらき薄曇、卯月五日の宵庚申、死ば一所と契りたる、其一言は庚申、參りの人に打紛れ、チクリ

●八百萬屋を一文字に　やたもよろずも數の多きことを代表する文字にて、神に八百萬の神あり、又上方にては荒物屋の事を萬屋といふ、皆同意より出たる名稱なり。一もじは惑の婦女詞にて、下の根深（惑の異名）くに、かけたるなり。以下例の青物惑しなり。

●はじかみ　生薑のこと、耻ぢるといふにもぢる。

●智者は惑はず勇者は恐れず　「論語」に智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず、とあるに據る。但しこゝは半兵衛が「武士の稱なるより死に臨みても少しも惡びれぬを褒めたるまでにて、智者云々は附たりなり。

●けし、からし　いづれも種の細小なるもの。

●銀のとつさか　凡て他人の逆に出るをいふ。

●ありのみ　なしといふことを忌んで、梨をありの實といふ。狹斜語なり。

●うちやうかんてん　宇頂天と寒天を搗交ぜたるなり。

●いつわつさびたつさび　いつわつさりをわつさびともぢりなり。

●水ぶき　水路なり、水中に生ず鬼蓮ともいふ。

忍び〳〵出るも商賣の、八百屋万を一文字に、半兵衛といふ名にも似ず、長地唯ねぶかくも思ひつむ、わかな心の突詰めて、詞の義理にはじかみや、智者は惑はず、

フシ勇者は懼れぬ生付、流石は武士の種ぞかし、地干代も今度が三度目の、嫁菜盛も古くれて、諸事を細なけしからし、人の云ふ事きくらげや、夫の親を手にさゝげ、フシ晝夜孝行つく〴〵し、仰せ背かぬ給仕へ、氣のとつさかな姑に、せり〳〵弄りたてられて、命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投ふ、今日あまのりに成らふかと、心はうちやうかんてんの、いつわつさびとしもせねば、斯くなる蓮でござんせう、何と生薑の身の果を、云ふて返らぬ水ぶきの、姑去で殺した

●すゐきの涙　鱸喜を半草に刺かせたり。

●かぶらん　蒙らんを蕪にかけたるなり

●我が戀路は糸なき三味よ　此の名取川の唄は當時いたく流行せしものと見え「二ツ腹帶」にも見えたり。われが戀ぢはいとなき三味よ〳〵なんのれもせでなきあかす見れば思ひの雲の帶〳〵、扱もみじか夜心のせくにござんせいやとおしやるともふ、そふさんせ、ふたりが中に名取川。少しづゝ異なれり。

と、祭文惡名つけて世の人の、薇ませうがお笑止と、悔めば夫はずゐきの涙、地なふ和女さへ其如く、悔んで給るに此半兵衛、年比日比の御厚恩送らで死ぬるは人のくづ、罰をかぶらん恐ろしと、ほうづき程な血の涙、はら〳〵溢せば走り寄り、地私も病者な父樣を、先へ送るが尊菜を、却て憂目見せまする、是も何ゆへ相生の、松だけゆへと抱きつき、木末に知らぬ松の露、落ちて松露になりやせん、彼一群に聲高く、下向の衆のぞめき歌、見付られじと影隱す、歌我が戀路は絲なき三味よ、なんのねもせで待明かす、それじや〳〵、見れば思ひの雲の帶〳〵、さすぞ盃ならずと一つまいれ、いやとおしやるに、こちやも、それじや〳〵、そうさ

●生玉の馬場先　當時生玉の門前に奈良大佛殿の勧進所あり、無明は法界に縁なき愚痴の妄念にて、能化は之を化度するたいふ。即ち此の勧進所こそは、われ〳〵如き愚痴闇昧の者を教化する所となりと。

んせそれじや〳〵、しかもよいこの情盛に、ちよきりこつきり小女房の、腰もしなへてやつくるり、くるり〳〵やつくるりと、ぬめらしやんすは二人がほかに名取川、チヽそれ二人と二人が名取川、それじや〳〵、

フシ　それ行過ぎしと立出て、今の小歌の一節に、二人と二人が名取川、チヽそれそれじやと謠ひしは、已と和女が名取川、辻占が能い此方へと、勇むは男の矢竹心、アヽ嬉いと引連て、共に急ぐは女氣の、フシ情するどに人絶えて、物しん〳〵たる寺町を、死に行く身も暫は、爰生玉の馬場先に、法界無縁の勧進所、無明能化の門前に、念佛を便り辿寄る、地なふお千代、しんずいばんきやうでんと聞く時は、心は境界に隨つて轉

●楓樂良訓信女　お千代の戒名。
●露秋禪定門　半兵衛の戒名。

●遷化　僧の死するたいふ。

じ變る、和女も千代と云ふ名を、楓樂良訓信女と改め、我も八百屋半兵衛を、露秋禪定門と改め、地息のある内より早無き人の數に入れば、死後の身體の置所も俗縁を離れ、寺の庭でと思へども、門開かねば力なし、爰は奈良の東大寺、大佛殿の勧進所、詞先年了海和尚衆生濟度の說法を、此所にて說始め、今遷化の後迄も

地我親は講中の第一にて、由緒ある所なれば、最期を爰と思ひ寄る、但し望も有りやと問へば、なふ死ぬる身に何の望、水の中火の中でも、先の世迄もこなさんと、女夫になつて居る所を、見立て死で下さんせと、さめ〳〵歎けば、チヽ過分な、詞此書置にも書く通り養子に成つて十六年此方、十方旦那の機嫌を取り、暇

ある日には町中を振賣し、元は僅の八百屋店、今では人に少々の、金貸す樣に儲け溜ても、地つらい目計りに日を半日心を伸ばす事もなく、死なふとせしも以上五度、恨ある中にも和女に緣組、切ての憂を晴らせしに、それさへ添はれぬ樣になり、死ぬる身に迄成下る、由ない者に連添ふて、半兵衞が身の因果、和女迄にふるまひ、在所の親仁姉御にも、悲しい事を聞かすと思へば、此胸に鑢をかけ、肝を猛火でいる樣な、エ、口惜いと拳を握り、膝に押付け身を慄はし、涙はら〳〵フシ朝露に、つれて流るゝ計りなり、地あれ又愚痴な事計り、在所の父樣姉樣は、こな樣より諦よい、水盃の其上に、門火迄燒かれしは、生て再び戻るなと、私

●半鐘　夜明の鐘なり。

に意見の暇乞、其愚痴な事いふ手間で、早ふ殺して下さんせ、アレ〳〵〳〵三方四方に半鐘がなる鐘が鳴る、人の來ぬ間に來ぬ間にと急ぐ最期の玉かづら、夫にまとひ泣沈む、詞それよ〳〵由なき悔、最早互に親の事兄弟の事言出すまい、必ず和女言出しやんな、地いざ此方へと毛氈を土に打敷き、なふお千代、此毛氈を毛氈となな思はれそ、二人が一所に法の花、地紅の蓮と觀すれば、一蓮托生頼みあり、親兄弟への書置も、此狀箱に入れ置けば、明日は早々屆くべし、サア〳〵觀念最期の念佛怠りやるな、今が最期とすばと拔く、一尺四寸親重代、我身を切れとは讓りはせじ、かひなき半兵衞が身の果やと、昔思へば手も慄ひ、フシ不覺の涙堰